

都城市文化財調査報告書第24集

NAMI KI ZOE - SITE  
並 木 添 遺 跡

—古代～近世の道路遺構および中世集落跡の調査—

1993年3月31日

宮崎県都城市教育委員会



古代道路遺構全景（南西上空から）



中世集落跡全景（南東上空から）

## 序 文

本書は、都城市高木町に所在する並木添遺跡の発掘調査報告書です。

都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東に鰐塚山系、北西に高千穂峰を仰ぎ、三方を山に囲まれた広大な盆地の中心部にあります。交通は、九州縦貫自動車道宮崎線をはじめ、国道、主要地方道が縦横に延び、古くから南九州の交通の要衝として栄えています。

さて、当地域に立地している企業は、一部を除いて経済変動に影響されやすい中小企業がほとんどで、雇用の拡大が困難です。こうした状況に対応するため、本市では地場産業の育成と企業誘致を推進していますが、この発掘調査もその施策のひとつである工業団地造成事業に伴うものです。

当遺跡の発掘調査では、くしくも、宮崎自動車道と国道10号線のクロスする交通の要の地において、平安時代にさかのぼる広域道路遺構が発見された他、宮崎県南部において初例の石鈔が見つかりました。また、中世の集落跡も姿を現し、当時の様子をしのぶことができました。これらの貴重な成果の収録された本書を、郷土の歴史教育や生涯学習活動の資料として利用していただければ幸いです。

最後に、発掘作業に従事していただいた市民の皆様をはじめ、現場における調査や出土資料の整理から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました関係各機関、多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

1993年 3月31日

都城市教育委員会

教育長 隈 元 幸 美

## 例 言

1. 本書は、都城市高木町農村地域工業等導入計画・工業団地造成事業に伴う並木添<sup>なみきぞえ</sup>遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、平成4年4月17日から平成4年9月18日まで行った。
3. 発掘調査地は宮崎県都城市高木町4864番地ほか（字並木添）であり、調査面積は約15,130㎡である。
4. 出土遺跡の整理作業（水洗・復元・注記）は、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵庫にて行った。
5. 現場における遺構の実測および写真撮影は、作業員の協力を得て、都城市文化課主事兼畑光博、同主事矢部喜多夫、同主事補横山哲英が行い、遺構の空撮は株式会社スカイサーベイに依頼した。本書掲載の遺物の実測は作業員の協力を得て、兼畑が行い、すべてのトレースは兼畑があたった。なお、現地における一部の遺構・遺物測量にコンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システムSITEを使用した。
6. 本書に使用した時期区分に関する記載は次のとおりである。  
〈大 区 分〉先史時代＝縄文時代～弥生時代，歴史時代＝平安時代以降  
〈歴史時代区分〉古代＝奈良～平安時代，中世＝鎌倉時代～戦国時代  
近世＝江戸時代
7. 本書に使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
8. 出土遺構の分類略記号は次のとおりである。  
SA：竪穴状遺構，SB：掘立柱建物跡，SC：土坑，SD：溝状遺構  
SF：道路遺構，SN：焼土遺構，SS：集石遺構
9. 発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵庫に保管している。

# 目 次

巻頭口絵 並木添遺跡空中写真 古代道路遺構全景（南西上空から）  
中世集落跡全景（南東上空から）

序 文  
例 言  
目 次  
挿 図 目 次  
表 目 次  
図 版 目 次

I	序 説	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査体制	2
II	遺跡の位置と環境	3
III	調査区の設定と概要	5
IV	調査の記録	7
1.	層 序	7
2.	包含層出土遺物	10
(1)	先史時代の遺物	10
(2)	歴史時代の遺物	10
3.	歴史時代の遺構と遺物	10
(1)	道路遺構	10
(2)	溝状遺構	16
(3)	掘立柱建物	30
(4)	土坑・竪穴状遺構	40
(5)	その他の遺構	46
V	まとめ	50
1.	歴史時代遺構の変遷について	50
2.	古代道路遺構について	56
3.	石銚について	56
4.	中世集落跡について	57

# 挿 図 目 次

Fig. 1	試掘調査トレンチ配置図	1
Fig. 2	遺跡位置図	4
Fig. 3	調査区域図	6
Fig. 4	基本層序模式図	7
Fig. 5	先史時代の遺物実測図	7
Fig. 6	歴史時代の遺物実測図 (1)	8
Fig. 7	歴史時代の遺物実測図 (2)	9
Fig. 8	道路遺構配置図	11~12
Fig. 9	道路遺構断面図	13
Fig. 10	B-Ⅲ・Ⅳ区SF 1 平面図	14
Fig. 11	B-Ⅲ・Ⅳ区SF 1 断面図	15
Fig. 12	道路遺構出土遺物実測図	16
Fig. 13	A-I・Ⅱ区溝状遺構配置図	17
Fig. 14	A-I・Ⅱ区溝状遺構断面図	19
Fig. 15	A区溝状遺構出土遺物実測図 (1)	20
Fig. 16	A区溝状遺構出土遺物実測図 (2)	21
Fig. 17	A・C区溝状遺構出土遺物実測図	22
Fig. 18	C区溝状遺構配置図	24
Fig. 19	C区溝状遺構断面図	25
Fig. 20	C区溝状遺構出土遺物実測図	25
Fig. 21	A・C区溝状遺構の関係	26
Fig. 22	B区溝状遺構配置図	27~28
Fig. 23	B区溝状遺構断面図	29
Fig. 24	B区溝状遺構他出土遺物実測図	29
Fig. 25	掘立柱建物配置図	31
Fig. 26	掘立柱建物実測図 (1)	33
Fig. 27	掘立柱建物実測図 (2)	34
Fig. 28	掘立柱建物実測図 (3)	36
Fig. 29	柱穴内出土遺物実測図	36
Fig. 30	A区土坑その他配置図	37
Fig. 31	土坑実測図	38
Fig. 32	土坑および竪穴状遺構実測図	39
Fig. 33	竪穴状遺構出土遺物実測図	39
Fig. 34	土坑出土遺物実測図	40

Fig. 35	C - I 区SC51出土遺物実測図 (1)	41
Fig. 36	C - I 区SC51出土遺物実測図 (2)	42
Fig. 37	C - I 区SC51出土遺物実測図 (3)	43
Fig. 38	C - I 区SC51出土遺物実測図 (4)	44
Fig. 39	その他の遺構実測図	45
Fig. 40	その他の遺構出土遺物実測図	45
Fig. 41	I 期遺構配置図	51
Fig. 42	II 期遺構配置図	52
Fig. 43	III 期遺構配置図	53
Fig. 44	IV 期遺構配置図	54
Fig. 45	V 期遺構配置図	55
付 図	宮崎県都城市並木添遺跡調査区および遺構全体配置図	

## 表 目 次

掲載遺物一覧表	47~49
掘立柱建物の時期別規模一覧表	58

## 図 版 目 次

挿入図版 1	道路遺構調査風景，遺跡見学会風景	2
挿入図版 2	春日神社境内の石塔，後馬場採集の越州窯系青磁	3
挿入図版 3	溝状遺構調査状況，遺物出土状況	5
PL. 1	道路遺構全景	59
PL. 2	道路遺構	60
PL. 3	溝状遺構	61
PL. 4	溝状遺構	62
PL. 5	溝状遺構	63
PL. 6	掘立柱建物	64
PL. 7	土 坑	65
PL. 8	竪穴状遺構，集石遺構，焼土遺構	66
PL. 9	出土遺物	67
PL. 10	出土遺物	68



# I 序 説

## 1. 調査に至る経緯

平成2年、都城市は、同市高木町所在宮崎自動車道インターチェンジ付近の水田・畑地帯13.481ヘクタールに農村地域工業等導入計画を示した。平成3年8月には、市企業立地対策課から市教育委員会文化課へ遺跡の有無の照会が行われたが、当該地は昭和63年に実施した市内遺跡詳細分布調査による遺跡番号9010の並木添遺跡に含まれており、中・近世の遺物散布地とされていた。そこで、市文化課は、遺跡の状態を具体的に把握するために、平成3年10月28日から11月2日にかけて、開発対象地に27か所のトレンチを設定し、遺物・遺構の包蔵状況を確認した。その結果、北東部の1トレンチと5トレンチにおいて、中世の柱穴群が検出され、3トレンチでは中世の土師器が出土した。また、中央部の16トレンチ、23トレンチ、26トレンチでは南北方向に走行する一連の道路跡が確認され、時期は中世以前のものとして推定された。

この結果を受け、平成3年11月7日に市企業立地対策課と市文化課の間で協議が行われた。造成計画は全体的に盛土を行うというものであったが、今後の工場建設も勘案し、中世の建物跡検出の予想される北東部約9,375㎡と道路跡検出の予想される中央部2,250㎡の合計11,625㎡を発掘調査し、記録保存の措置をとることとした。

発掘調査は平成4年4月17日から平成4年9月18日まで行った。なお、平成4年8月21日に一般市民と沖水小学校児童を対象とした遺跡見学会を実施しており、約300名の見学者が来跡した。

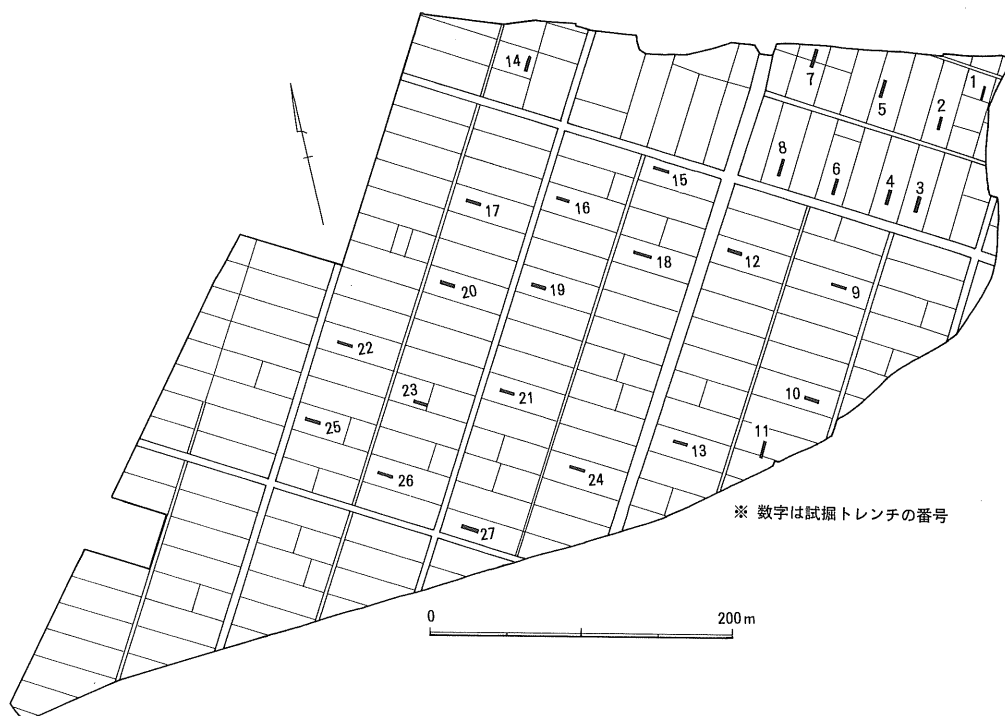
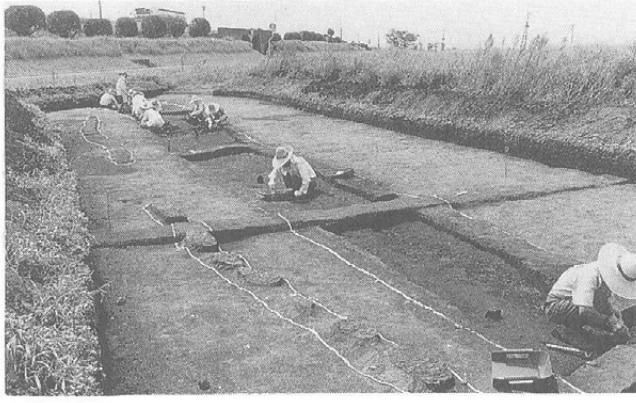
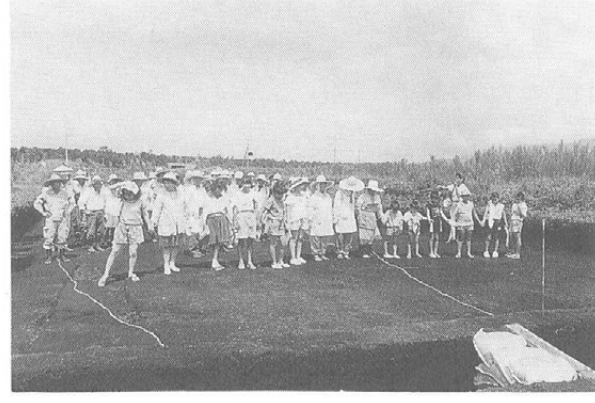


Fig. 1 試掘調査トレンチ配置図



▲ 道路遺構 (SF 1) 調査風景



▲ 遺跡見学会風景

挿入図版 1

## 2. 調査体制

調査の主体は都城市教育委員会であり、経費の運用は同市文化課が行った。調査の組織は以下のとおりである。

[調査責任者]	都 城 市 教 育 長	隈元 幸美	
[調査総括]	都 城 市 文 化 課 課 長	成竹 清光	
[調査事務局]	都 城 市 文 化 課 課 長 補 佐	遠矢 昭夫	
	都 城 市 文 化 課 係 長	海田 茂	
	庶務担当 主 事 補	田部井寿代	
	調査担当 主 事	栞畑 光博	主事補 横山 哲英

### [調査指導および協力者]

池崎譲二 (福岡市博物館) 山村信榮 (太宰府市教育委員会) 菅付和樹 (宮崎県教育委員会) 大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館) 日野尚志 (佐賀大学) 木下 良 (国学院大学) 上村俊雄 (鹿児島大学) 野口 実 (鹿児島経済大学) 亀田 博 (橿原考古学研究所) 千田嘉博 (国立歴史民俗博物館) 永山修一 (ラ・サール高等学校) 橋村 修 (国学院大学) 児玉三郎 (都城市文化財調査員) 川越 明 (都城市文化財調査委員) 重永卓爾 (都城市文化財調査員) 柳沢一男 (宮崎大学) 山田 渉 (宮崎大学)

### [発掘作業員]

有水トミ 新田ハルコ 田中哲夫 田中ミツ 前田ハルエ 前田重満 河野忍  
 河野スギエ 野口虎男 浜田寛 中原貞良 高橋ヨシ子 宮元孝子 松崎ミエ子  
 立山君子 岩切ユキ子 坂元トミ子 藤田フヂ子 南スミ子 蒲生ミツ子  
 高橋光子 正ヶ峰シズ子 正ヶ峰義男 楠牟礼エイ子 荒ヶ田エダ 釘崎トミ子  
 細山田茂 和田利雄 細山田登 岩元深雪 児玉ヤスコ 待木すずこ 永井ヤエ  
 徳島トミコ 池田レイコ 堀之内三枝子 下田代清海 壇清人 阿久根敏恵  
 阿久根昌子 吉村則子 大重晃 蔵満さゆり 福丸治男 福丸貞行 福丸秀則  
 鴫松雄 曾原主吉 松永浩一

### [整理作業員]

猪股幸千代 池谷香代子 雁野あつ子 水上和子

## II 遺跡の位置と環境

並木添遺跡は、都城市北東部の高木町4864番地に位置する。一帯は耕地整理が進んでいるため起伏の少ない平坦な印象を受けるが、厳密にみると北西方向へ緩やかに傾斜する開析扇状地形に属する。今の高木の集落は、北東部を北流する花木川と、やがてその川が合流する大淀川に挟まれた微高地上に営まれており、現在は東西に走る宮崎自動車道によって分断されているが、当該遺跡はその集落の南端を占めている。なお、高木町には近世の高木街道を踏襲した国道10号線が通るが、第2次世界大戦前までこの街道沿いに松並木があったという。

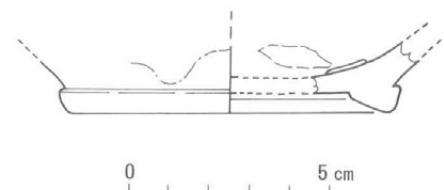
同町には、南方神社、春日神社、熊野神社、巖島神社、大將軍神社といった古代・中世・近世からの系譜をひくものと思われる多くの寺社があり、境内に古石塔が残存しているところもある。当地における中世（14世紀～15世紀）には高木氏という在地領主の存在が指摘されている〔重永卓爾氏教示〕が、都城島津家文書に「諏訪上下大明神」と記載されている南方神社は、その高木氏の創建と伝えられている。南方神社の「揚げ馬<sup>あ</sup>」と春日神社の「牛どん<sup>べぶ</sup>」はともに都城市指定文化財の民俗芸能である。牛どんは古記録に記載された「打植祭」に当たるものとされ、豊穰祈願の農耕神事であるが、木製の牛が主役となるのでこの名で呼ばれている。さらに、町内の遺跡としては、昭和63年に行われた市内遺跡詳細分布調査によって、字後馬場で越州窯系青磁碗底部が採集され、字赤坂では、60基におよぶ軽石製五輪塔が確認されている（挿入図版2）。

隣接する太郎坊町字中原では、大正8年、山林の開墾中に経塚が発見され、陶製の経筒が採集されている。散逸してしまったこの資料は、高さ24cmを測り、黄緑色の釉がかかっていたという〔児玉三郎氏教示〕。大淀川の対岸に目を向けると、シラス台地の端部に志和池城、森田陣、野々美谷城といった中世城郭が、連続して築かれている。

このように、この地域周辺は古代から中世にかけて重要な位置を占めていたことをうかがうことができ、今回調査を行った並木添遺跡もそれらの遺跡との関連の中で検討していく必要があるだろう。



▲ 高木町春日神社境内の石塔



※ 実測は土橋理子氏

▲ 高木町字後馬場採集の越州窯系青磁

挿入図版2

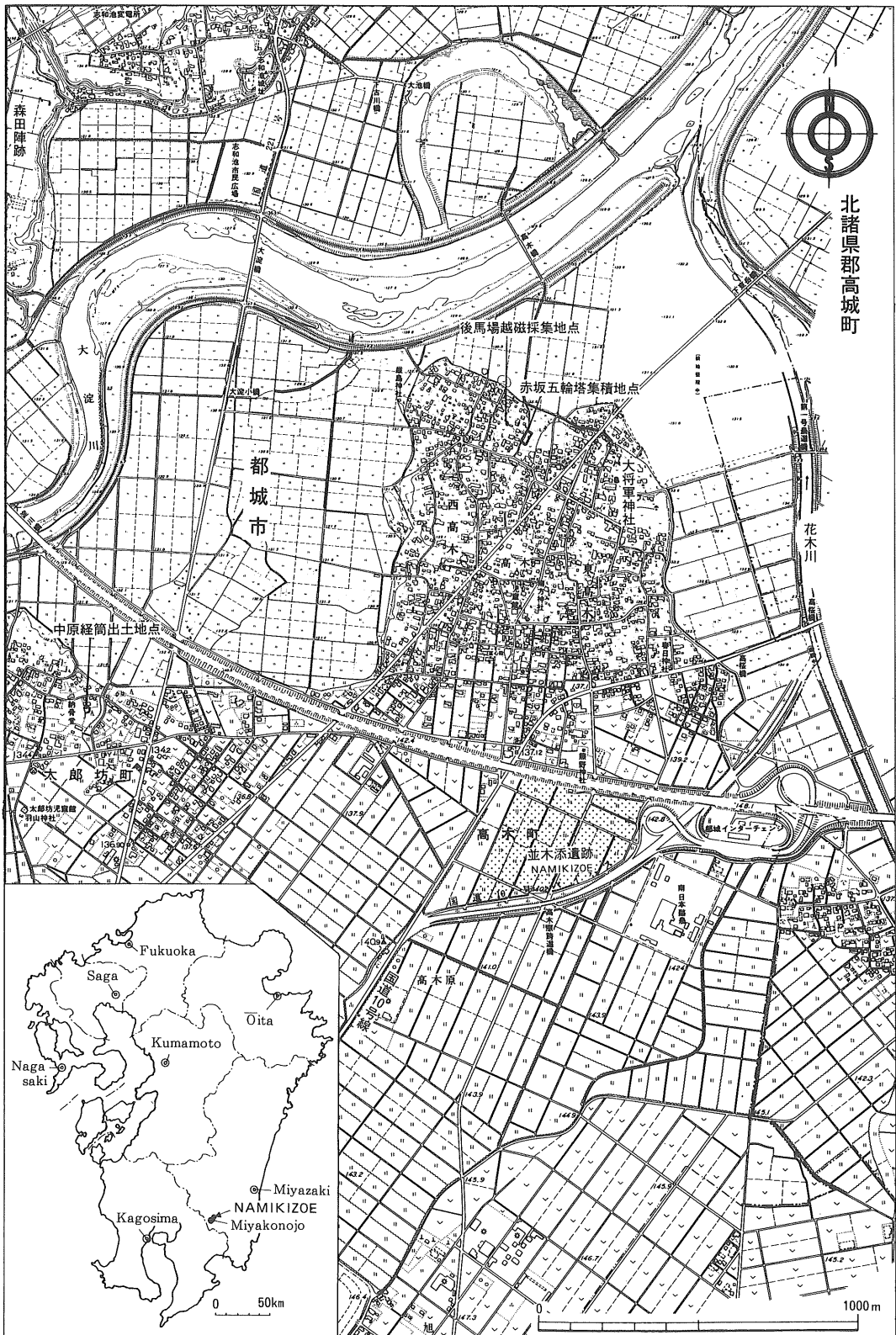


Fig. 2 遺跡位置図

アミかけ部分は調査対象地

### Ⅲ 調査区の設定と概要

調査区域は試掘調査の結果と工事計画とを勘案し、東側のA区と西側のB区に分けて設定した。すなわち、A区においては中世の集落跡を、B区においては古代までさかのぼると思われる道路遺構を検出することを主眼としたのである。またA区において確認した溝状遺構を西側に追跡した結果、新たな調査区域を設定する必要性が生じ、それをC区とした。

各区は便宜的にローマ数字を付けた小区域に細分し、溝状遺構の走行確認のために設けたトレンチには各区のアルファベットに番号を付して整理した。

最終的に調査総面積は約15,130㎡に達した。以下、各区ごとに調査の概要を述べる。

#### [ A 区 ]

縄文時代の土器と近世の遺構・遺物が少量出土しているものの、主体は中世の遺構と遺物である。遺構には掘立柱建物24棟、溝状遺構群、土坑群があり、その他竪穴状遺構2基、集石遺構3基、焼土遺構1基も見つかっている。遺物は包含層や遺構から土師器、青磁や白磁、陶器などが出土しているが、遺構の数に比べ、遺物の量が概して少ないという印象を受けた。

#### [ B 区 ]

南西―北東方向に走行する古代の道路遺構(SF1)が発見された。その硬化面からは平安時代の土器が出土している。一方、この道路を切るかたちで、ほぼ南北方向の中世の硬化面群(SF3)と近世～近代の道路遺構(SF2)も確認された。なお、覆土に桜島起源文明硬化軽石の堆積した中世の溝状遺構も見つかっている。遺物の中で特筆すべきは、溝状遺構SD27の文明降下軽石層下位の埋土から出土した石鍬(丸柄)で、当市において初例となった。

#### [ C 区 ]

東側で、A区から溝状遺構のつながりを把握し、西側ではB区の古代道路遺構の走行を確認している。前者の溝状遺構は複雑な切り合い状況が認められた他、A区からの溝状遺構の流れも含めて、かなり広域的なものであることが推察された。なお、これら中世の溝を切る性格不明の近世の土坑中(SC51)には、拳大から人頭大の礫と陶磁器などが大量に投棄されており、その中に、茶器が多く含まれている点が注目された。



A - II 区 溝状遺構調査状況



C - I 区 溝状遺構遺物出土状況

挿入図版 3

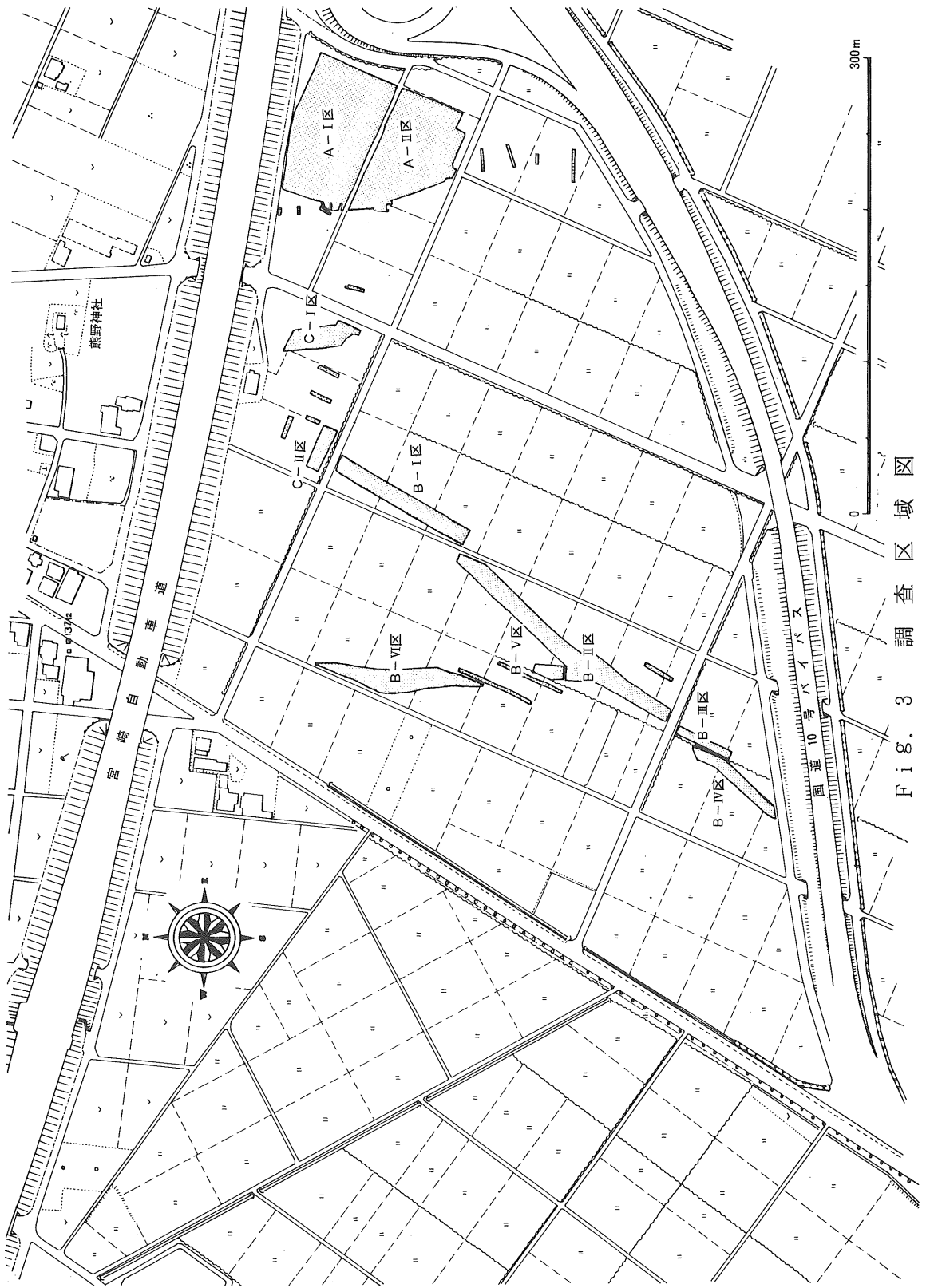


Fig. 3 調査区域図

## IV 調査の記録

### 1. 層 序

当遺跡の地形は緩やかに北西方向へ下がっており、土層もその傾斜に合わせて堆積している。比較的高いA-I区の北東部は耕地整理によって削平され包含層の遺存状態がよくないものの、今回の調査で確認できた層は御池降下軽石層まで5枚ある。基本的層序を次に示す (Fig. 4)。

I層が現在の耕作土で、灰褐色砂質土層である。II層は暗褐色砂質土層で、灰白色軽石を含む。昭和の耕地整理が行われる以前の耕作土と思われ、中世～近世の遺物が出土している。III層は灰白色の軽石層で、文明8年(1476年)に噴出したとされる桜島起源の降下軽石(以下、「文明軽石」)である。これは、溝状遺構などの遺構内堆積層として認められるだけであり、調査区の全面において1枚の層としては確認できない。IV層は黒色の粘質シルト土層であり、さらにaとbの2層に細分できる。a層は軟質で、古代～中世の遺物が出土する。b層は黄橙色軽石粒を多く含み、やや堅く、縄文時代の遺物が出土する。V層は黄橙色軽石層で、縄文時代中期ごろに噴出したとされる霧島御池起源の降下軽石層(以下、「御池軽石」)である。当地区で約1mの厚さを測る。

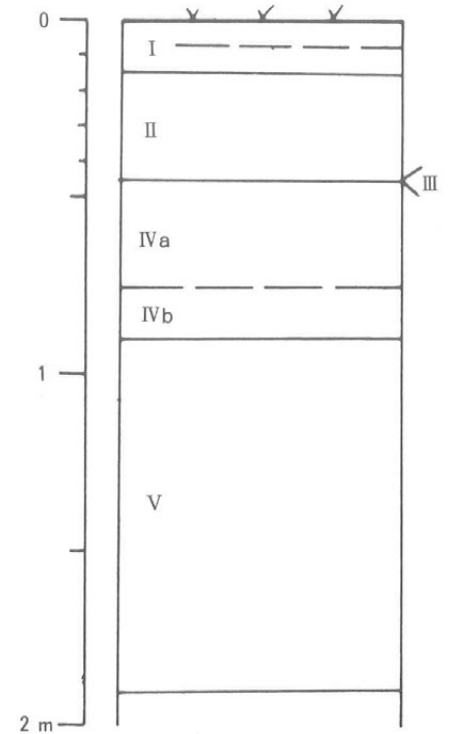


Fig. 4 基本層序模式図

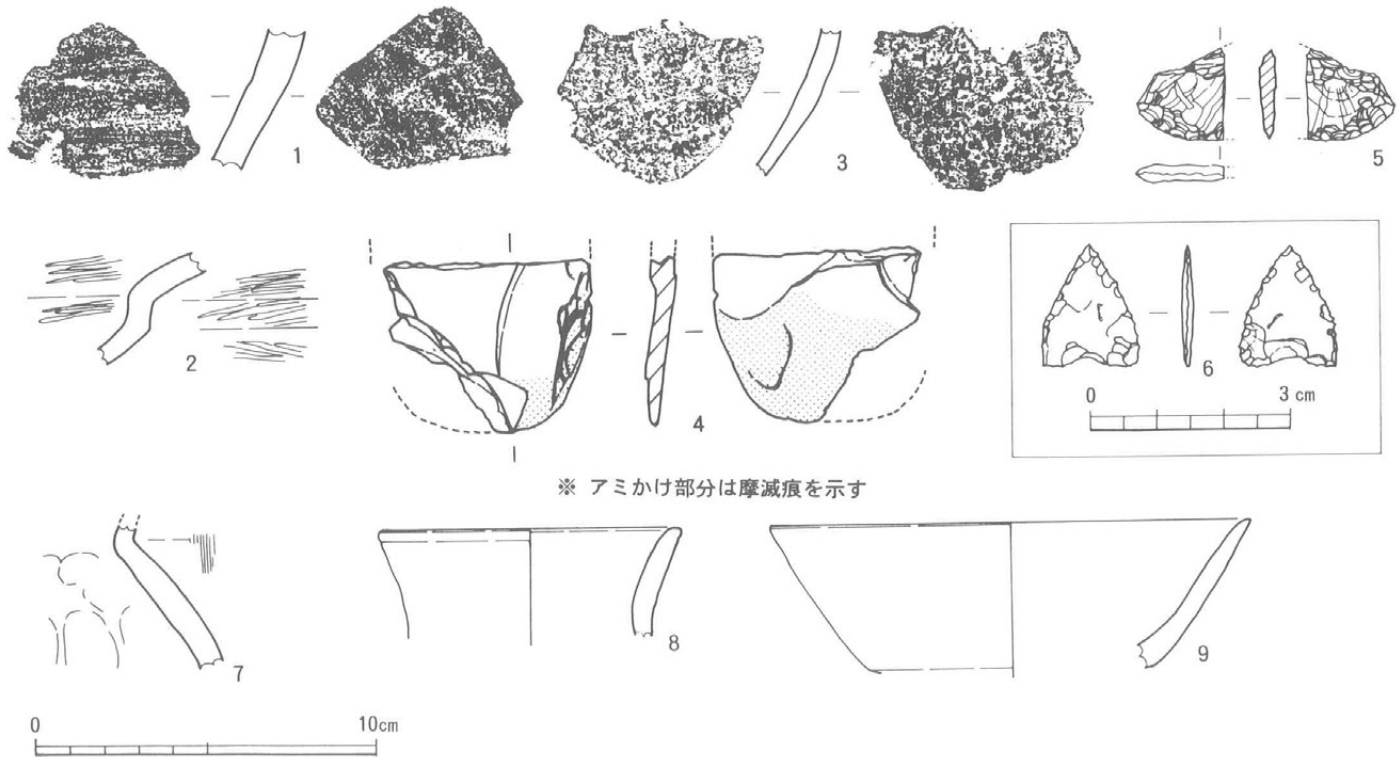


Fig. 5 先史時代の遺物実測図

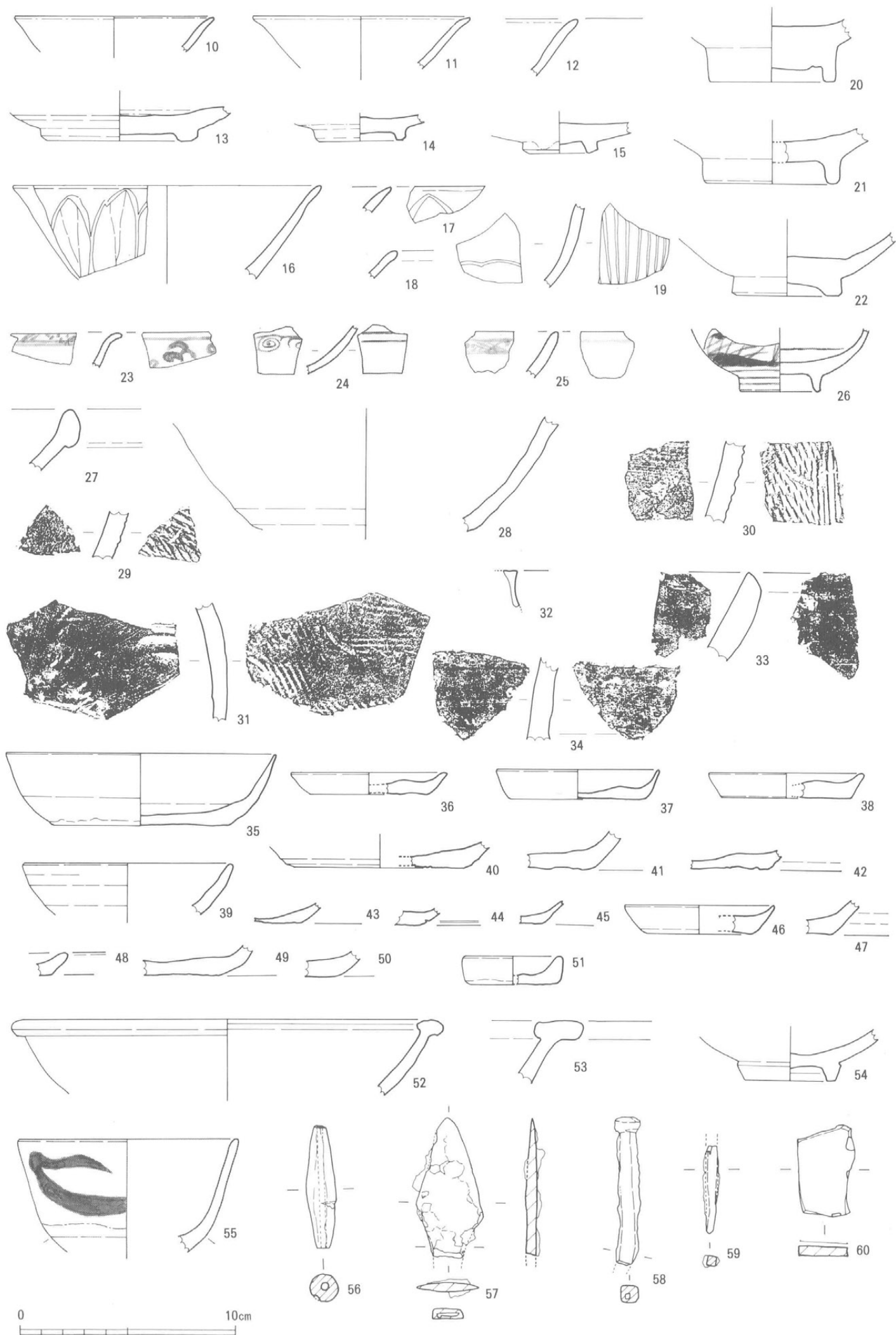


Fig. 6 歴史時代の遺物実測図 (1)



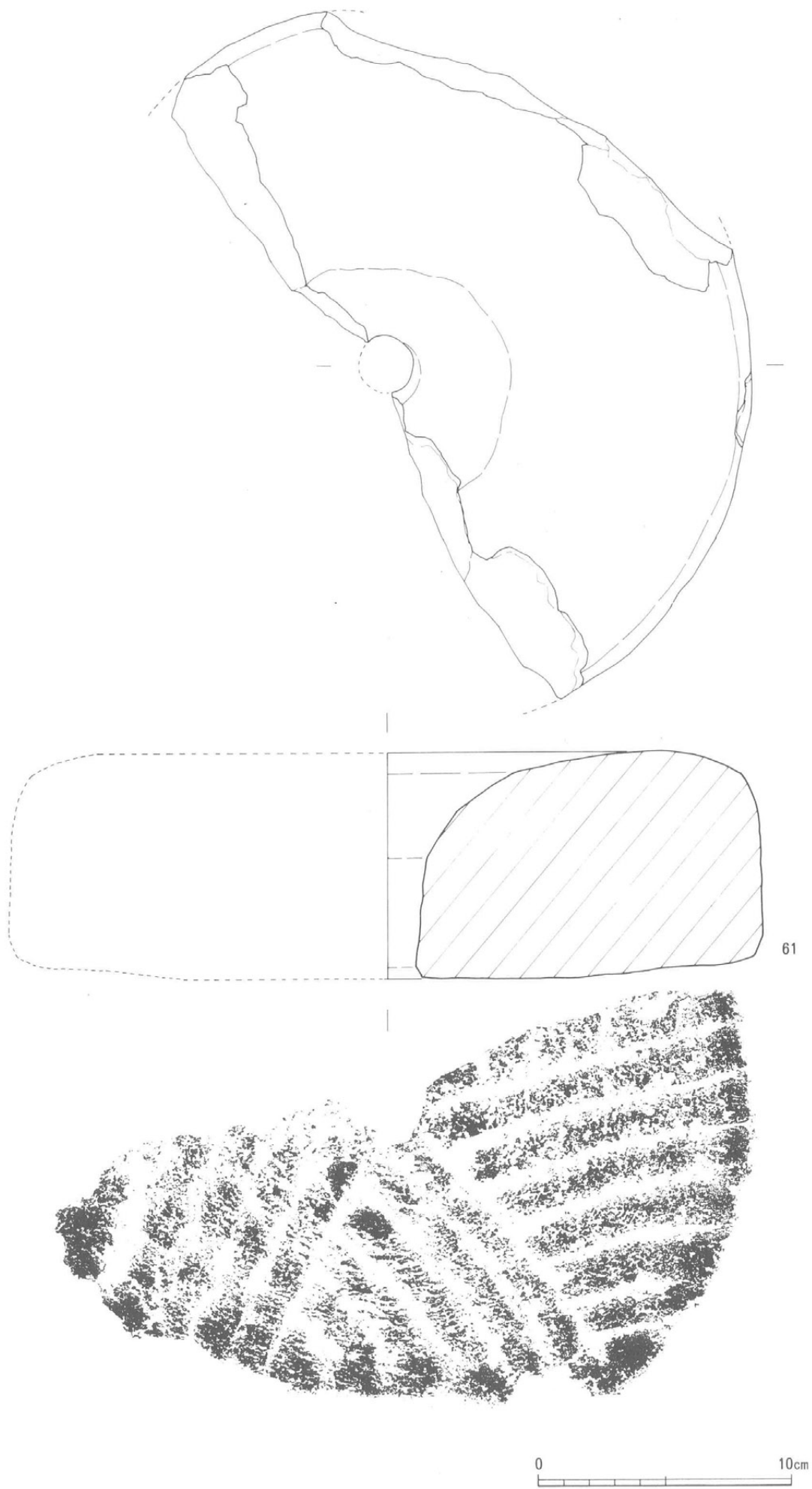


Fig. 7 歴史時代の遺物実測図 (2)

## 2. 包含層出土遺物

IV b層から、縄文時代の遺物が少量出土しているが、主体となるのはII層とIV a層から出土した平安時代以降の遺物である。

### (1) 先史時代の遺物 (Fig. 5)

A-I・III区とB区北側のIV b層下部から、縄文時代後期～晩期にかけての土器(1, 2)や石器(4, 5, 6)が出土している。また、B区において弥生時代の土器小片(7～9)が出土している。

### (2) 歴史時代の遺物 (Fig. 6)

包含層出土遺物は、おもにA-I・II区の中世集落部分において見いだされており、同区のIV a層から口禿げの白磁(10, 11, 12)、青磁縞蓮弁文碗(16)、東播系須恵器(27)、常滑焼(32)、ヘラ切り離しの土師器などが出土しており、おおむね13世紀後半から14世紀代を中心としている。また、II層からは染付、薩摩焼(苗代川系陶器)が出土しており、16世紀代から近世の時期幅が認められる。他にIV a層からは、鉄鏟と思われる鉄製品(57)も出土している。なお、35と36の土師器はA-I区の同一地点で重なりあって出土した。

## 3. 歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構は、調査区の全域において確認された。以下、各遺構ごとにその内容と出土遺物を報告する。また、土層、遺構間の切り合い、遺構内出土遺物から、それぞれの年代を推定したが、不明確なものについては言及していない。

### (1) 道路遺構

ここではある一定の幅をもち、通行や舗装によって、構築された硬化帯・硬化面群を道路遺構と呼称した。なお溝状遺構の床面が硬化し、道として利用されたものと思われる例もあるが、それらについては溝状遺構の中で取り扱う。

SF1 この硬化面遺構は試掘調査の際にすでに確認していたもので、B-I区、B-II区、B-III区、B-IV区、C-4トレンチ、C-II区において検出されている(Fig. 8)。B-II区でSF2とSF3に切られる。若干の蛇行は認められるものの、その主軸をN-40°30'-Eにとりながら、おおむね直線的に走行している。またその長さは調査区内だけでも約420mを測り、かなり広域的なものと推察される。なお、路面の両脇に側溝は検出されていない。B-I区では幅が30cm程度の3枚の硬化面が少しずつコースを違えながら重なり合う状態がとらえられ、C-II区やB-II区の北側ではそれらの硬化面を分離することが不可能になり、幅6m・厚さ10cm程度の範囲がぼんやりとした堅い層としてとられられる。B-II区南側、B-III区、B-IV区においては幅30cm・厚さ数cm以内の数条の帯状硬化面が幾重にも重なった状態ととらえられ、乾燥するとそれらは剥離しやすくなる(Fig. 11)。C-4トレンチ、C-II区、B-I区、B-II区ではIV a層の中位に形成されているが、B-III区、B-IV区では御池軽石層が溝状に掘り込まれ、その上に硬化面が重なっている。また同区では硬化面の下位に円形のピット状くぼみが連続して認められており(Fig. 10)、その埋土と底面は堅く、酸化鉄が沈着する。その性格は不明である。同じようなピットは市内大岩田町大岩田村ノ前遺跡の1号道路最

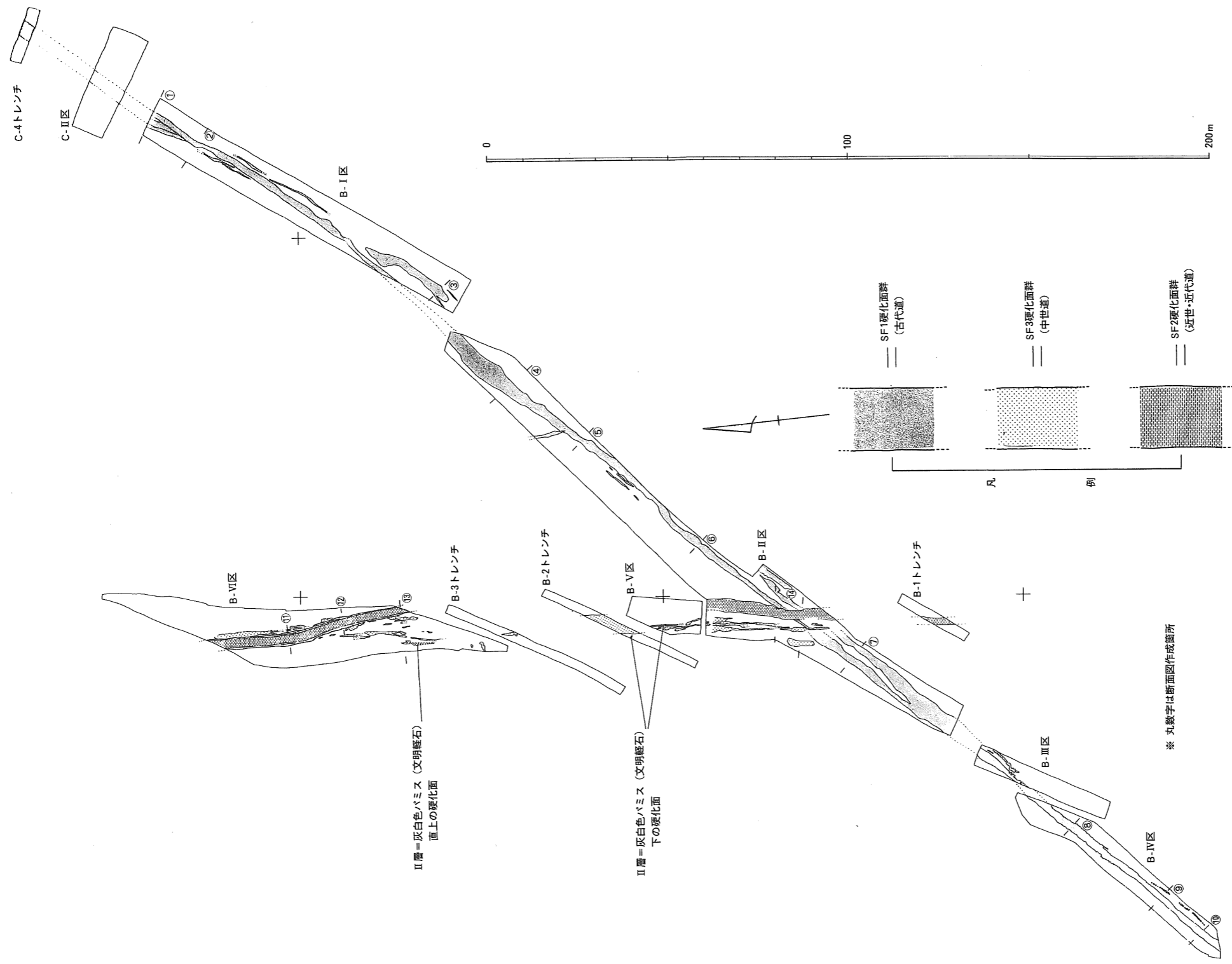


Fig. 8 道路遺構配置図

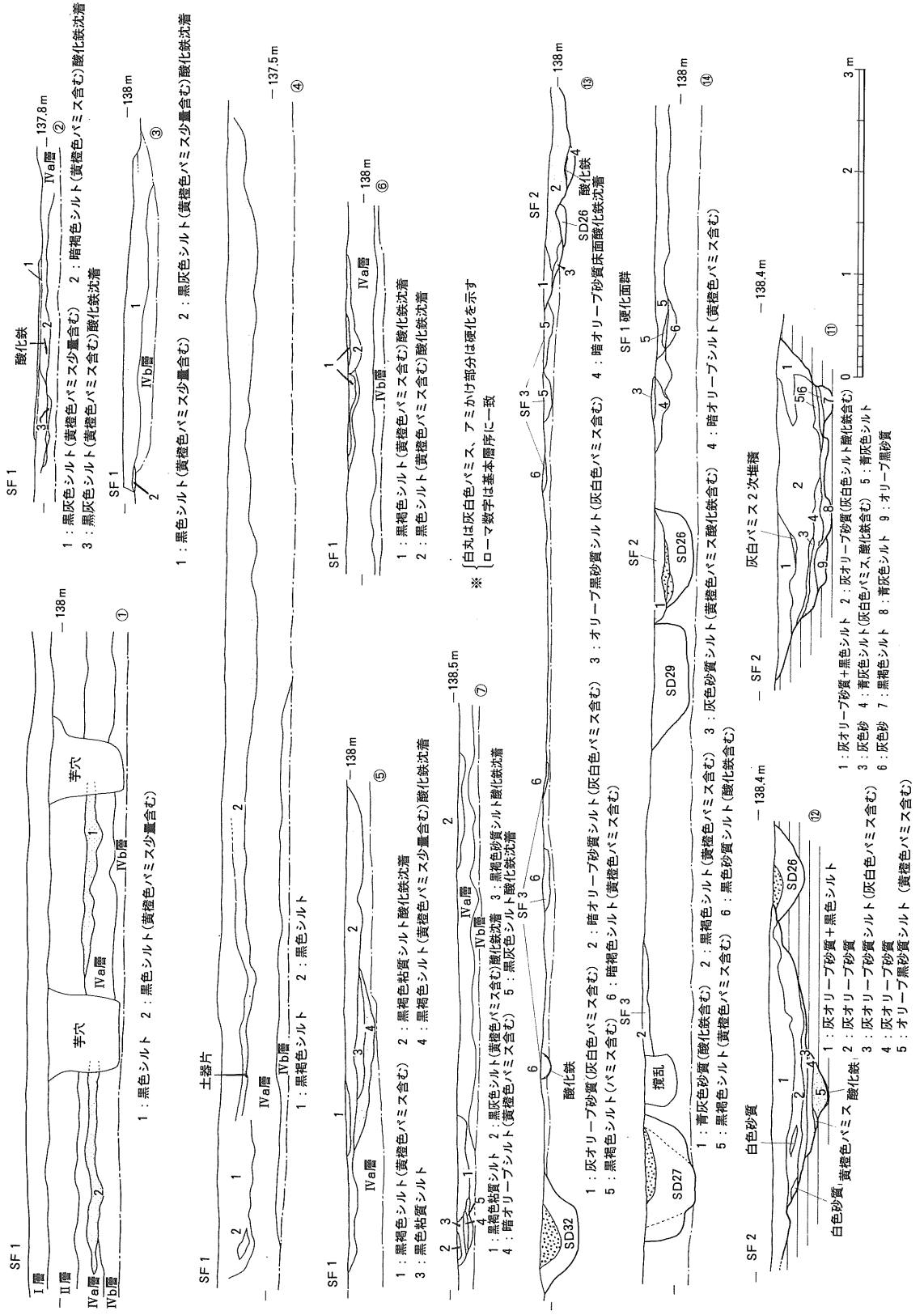


Fig. 9 道路遺構断面図

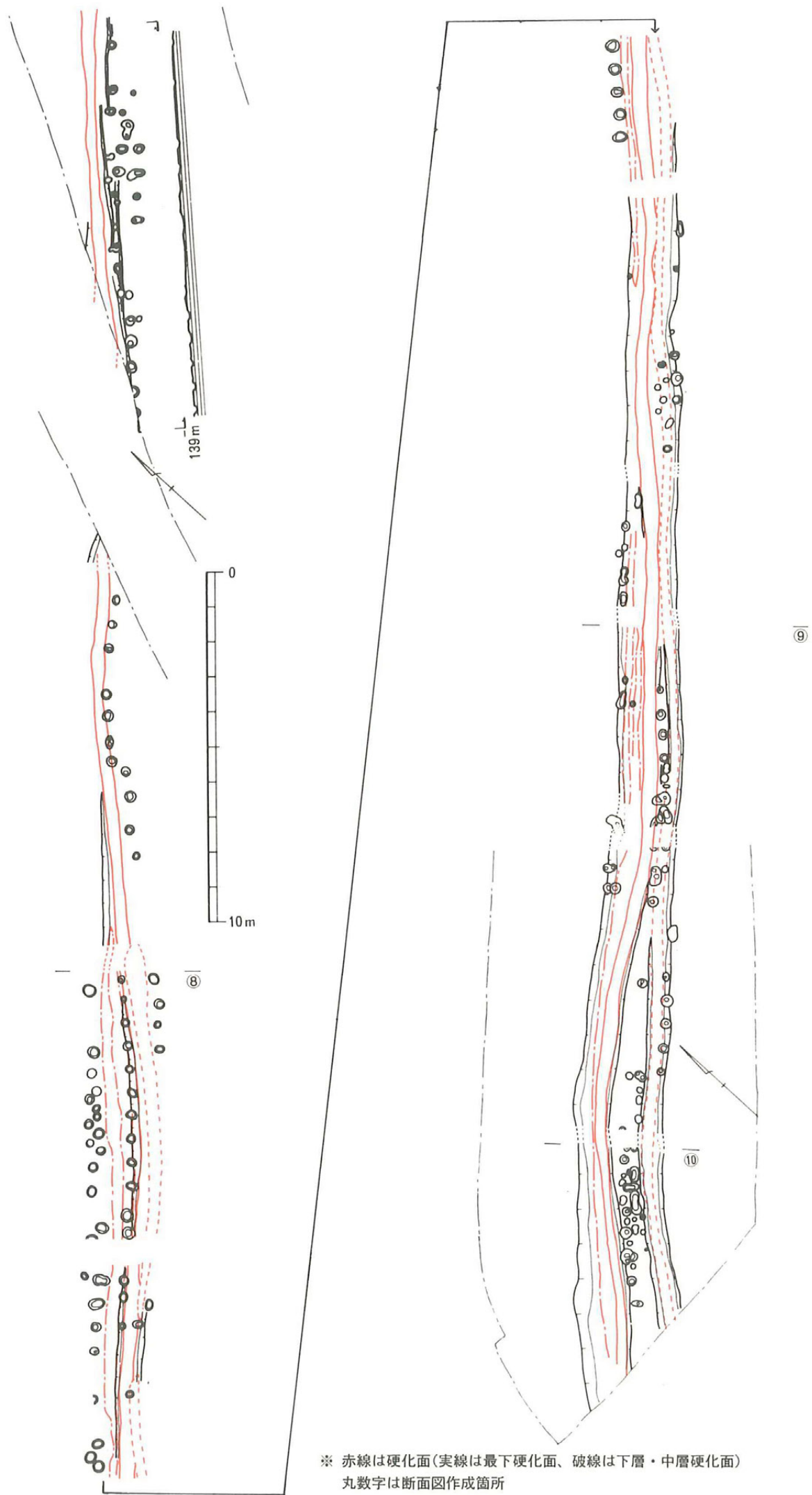


Fig. 10 B-III・IV区SF1平面図

下面にも認められている。遺構の性格上遺物の出土は少ないが、硬化面にくい込むようにヘラ切り離しの土師器破片や須恵器の破片(62)が発見されている。内訳を示すと、土師器26点、須恵器3点、金属製品1点である。土師器底部の形態(66・67)は、おおむね10世紀代を下るものではなく、道路遺構の使用下限もその時期と考えている。65の須恵質陶器は、B-IV区の最下硬化面直上にはりついた状態で検出されたものであり、自然釉が認められる。

SF2 南北方向に走行する道路遺構で、B-II区、B-VI区、B-1トレンチにおいて検出された(Fig. 8)。SD26を切る。B-II区においては幅2mの平地状硬化面としてとらえられるが、B-VI区においては、幅3.5m、深さ45cmの溝状遺構の底面に硬化面が形成されており、路面の幅は、2~2.3mである。なお、硬化面のレベルは南へ行くほど高くなる。

この道路は松山義春氏(大正2年生・高木町在住)の証言によると大正時代まで使用されていたことが明らかで、明治時代の地図にも記載されている。現在の耕作土に類似する溝内堆積土をよく観察すると、自然埋積ではなく、一度に埋め戻された可能性がある(Fig. 9)。出土遺物の内訳は、青磁5点、白磁1点、陶器40点、土師器15点、染付・磁器30点、鉄製品6点、鋳滓1点、寛永通寶(摂津高津銭)1点(76)であり、陶磁器の年代は19世紀代が中心である。

SF3 B-II区、B-V区、B-VI区、B-2トレンチ、B-3トレンチにおいて南北方向に走行する(Fig. 8)。ここでは主軸をN-7°-Wにとる硬化面群を同一の道路遺構としてとらえたが、B-II区、B-V区では文明軽石層の直下に幅0.33~1.7m、厚さ6cm~10cm

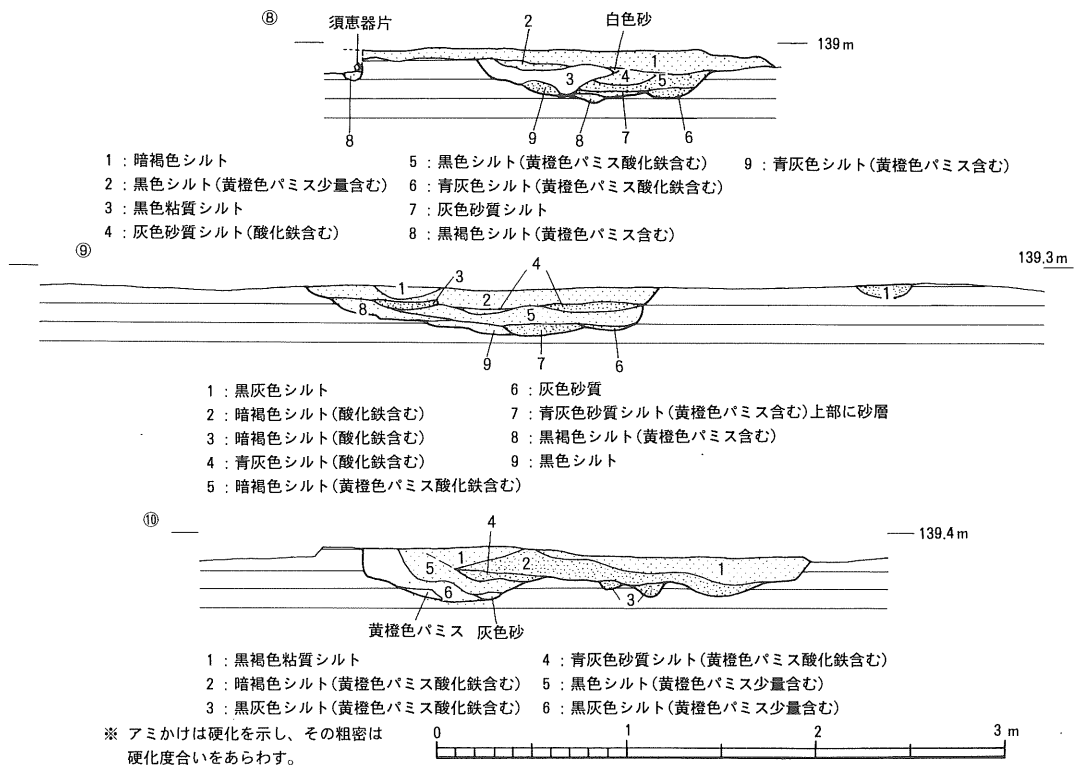


Fig. 11 B-III・IV区 SF1 断面図

の硬化層が認められるのに対し、B-II区のSD7とB-VI区のSD32に堆積した文明軽石の上位に硬化面が形成されている。また、その他の硬化面はおおむね層内に文明軽石（2次堆積）を含んでいる。これらの硬化面はSF1同様、通行の結果形成されたものと思われるが、SF1に比べると硬化面の硬化度や重なり具合が弱く、使用頻度が少ないことを示すものかもしれない（Fig. 9）。なお、B-II区では、硬化面の表面に円礫数個がはまり込んでいる箇所がある。硬化面直上出土遺物の内訳は、土師器1点、須恵器1点、陶器3点、鉄製品1点、鋳滓2点である。使用年代は、文明軽石層との関係や出土遺物から15世紀代から16世紀頃までであろう。

## (2) 溝状遺構

合計34条が確認されており、多くは中世のものである。溝内堆積層は、おおまかに文明軽石層降下前のもの（1類：黒色系の土色）と降下後のもの（2類：灰褐色系の土色）とに分けることができる。1類はさらに文明軽石層を堆積層中にもたないもの（1a類）ともつもの（1b類）とに細分される。またそれらの性格も居住区を区画するものやそれとは違う意味の区画を示すものなどあるが、ここでは、A-I・II区の中世集落を取り巻き、互いに関連が深いA区とC区の溝状遺構について述べた後、B区の溝状遺構について説明する。

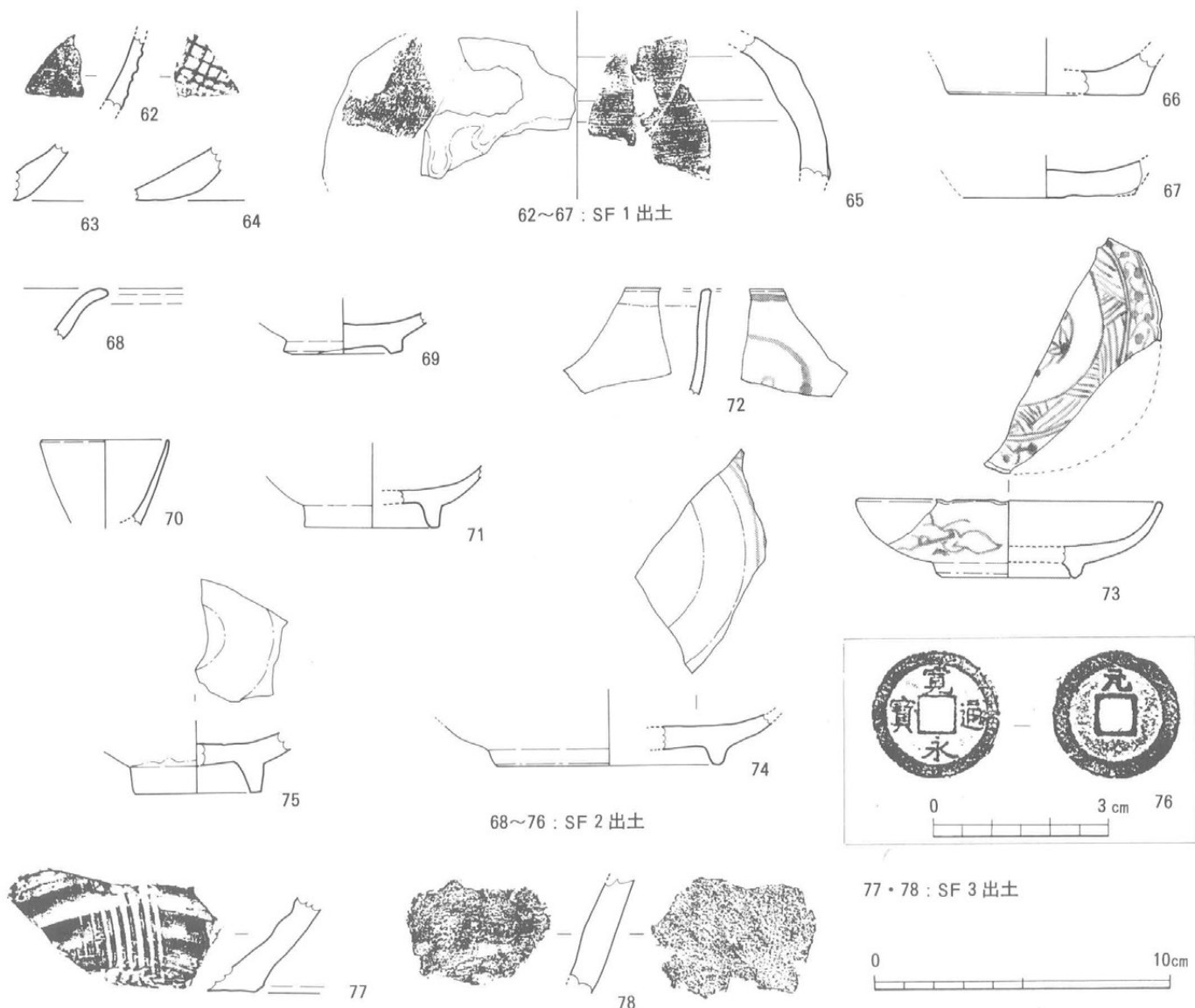


Fig. 12 道路遺構出土遺物実測図

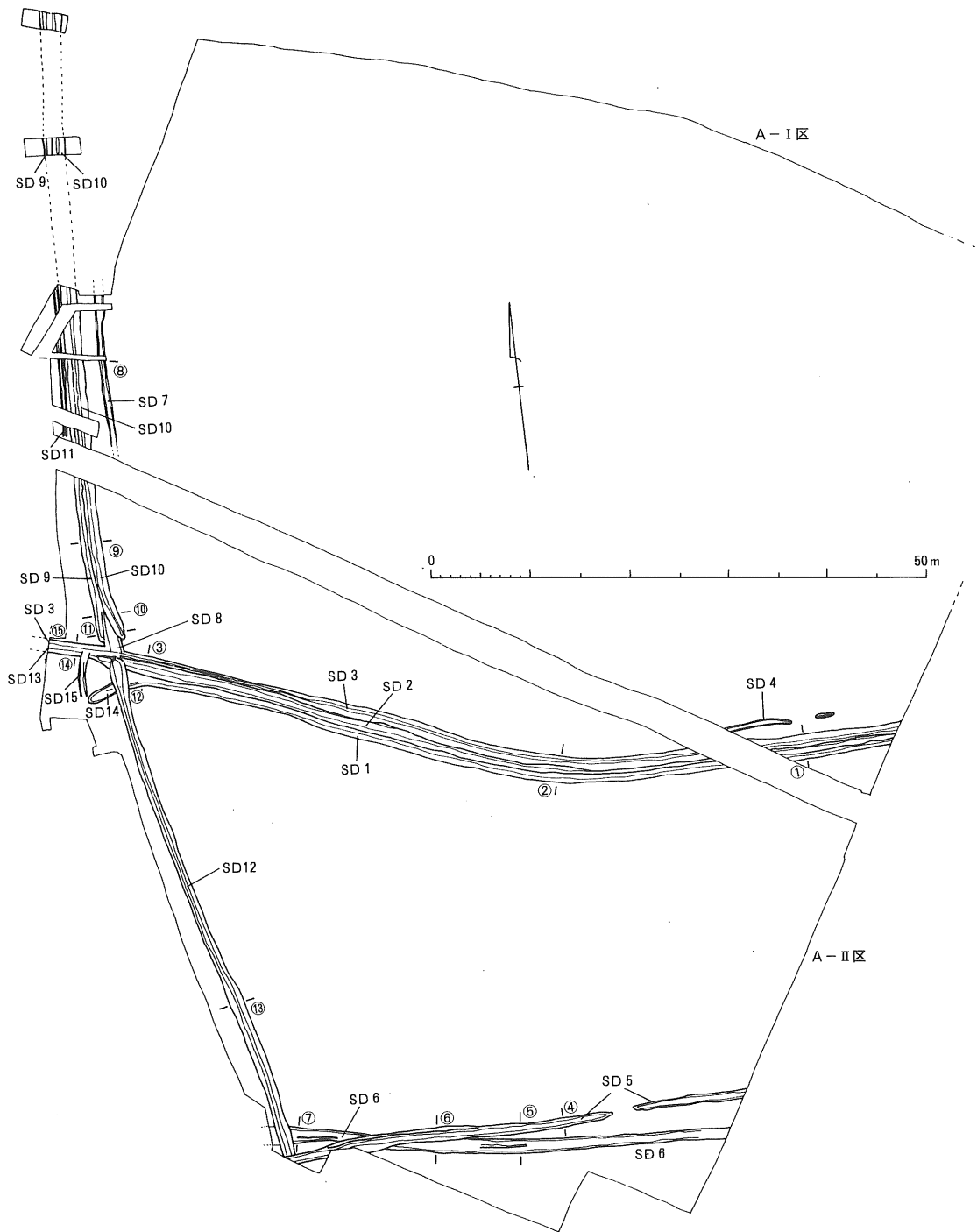


Fig. 13 A-I・II区 溝状遺構配置図



[ A区・C区 ]

SD 1, SD 2, SD 3はA-I・II区において南へ弧を描きながらほぼ同一ルートを東西方向に走行するものである (Fig. 13) が、切り合いながら重なり合い、その時期と形態は異なっている (Fig. 14)。なお、これらの溝のうちSD 3はさらに西へ連続する可能性がある。

SD 1 北側をSD 2に切られているが、幅は1.4m程度と推察される。深さ約50cmで、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で幅広い。その西端はSD14につながるものと思われ、埋土は1 a類である。出土遺物の内訳は、完形のヘラ切り離し土師器1点 (80)、青磁1点 (79)、白磁1点、鉾滓2点である。底面直上出土土師器 (80) から13世紀代と考えられる。

SD 2 北側をSD 3に切られており、幅は1.5mと推察され、深さは約65cmである。断面形は逆台形を呈し、堆積層の中位にレンズ状の文明軽石層が認められる。埋土は1 b類であり、底面に幅50cm程度の硬化面がつくられている。出土遺物の内訳は、青磁1点 (81)、白磁1点 (82)、陶器2点、鉾滓3点、砥石1点である。下限は15世紀中頃であろう。

SD 3 上記一連の溝の中で、最も新しいもので、幅1.05~0.95m、深さ50~35cmである。断面形は「V」または「U」字状を呈する。SD 2と同じように底面に硬化面が認められ、西側では埋土も堅い。埋土は2類である。出土遺物の内訳は、土師器13点、青磁5点、白磁2点、染付3点、陶器7点、須恵器1点、鉾滓18点、砥石1点、軽石製五輪塔空風輪1点 (135) で、105の平安時代の須恵器甕破片は混入したものであろう。本遺構の下限は16世紀代である。

SD 5 A-II区の南端を東西方向に走行し (Fig. 13)、SD 6とSD12を切る。幅0.9m、深さ20cmで、断面形は皿状を呈し壁面の傾斜はゆるい。底面近くにうすい砂層の堆積が認められる。埋土は2類である。出土遺物の内訳は、土師器4点、青磁1点、陶器1点、瓦質土器1点 (110)、鉾滓2点である。

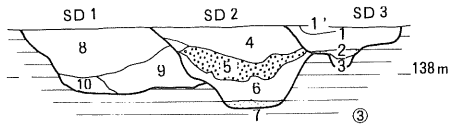
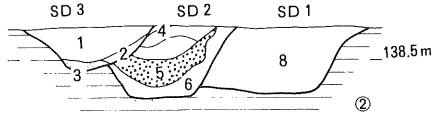
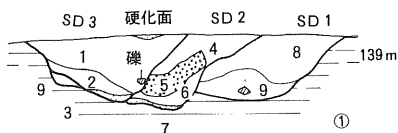
SD 6 A-II区の南端をゆるくカーブしながら東西方向に走行し (Fig. 13)、SD 6とSD12に切られる。断面観察による分層は困難であるが、幅1m程度の2本の溝が重なりあっているものと思われ (Fig. 14)、北側はやや深く、34cmを測り、南側が深さ20cmである。埋土は1 a類である。

上記の東西方向溝に対し、南北方向に走行する溝があり、東西方向溝と切り合い関係にあるものもある。SD 8, SD 9, SD10は切り合い関係にあるが、いずれも並行して走行し、確認トレンチで追及を試みたが、SD 9とSD10は調査区外へ延びるようである (Fig. 21)。

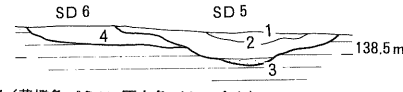
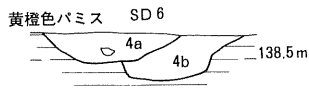
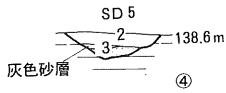
SD 8 A-II区で検出された (Fig. 13)。SD 9とSD10に切られる。幅は1.7m、深さ45cmで、断面形は逆台形状である。底面は平坦で、埋土は1 a類である。

SD 9 A-I・II区で検出され (Fig. 13)、SD 8を切る。幅1m、深さ25~45cmで、断面形は皿状を呈する。埋土は1 a類で、底面に硬化面がつくられている。出土遺物の内訳は、青磁1点、陶器3点、鉾滓4点である。

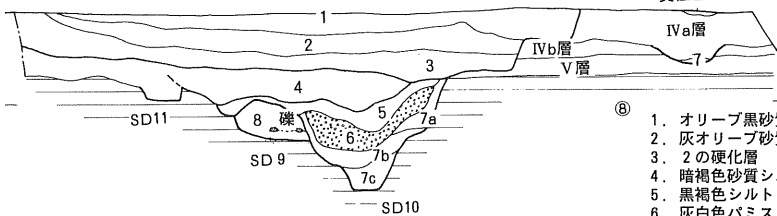
SD10 A-I・II区で検出され (Fig. 13)、SD 8とSD 9を切る。幅1.8m、深さ1.2mで、断面形は「V」字状を呈する。埋土は1 b類で、堆積層の中位にレンズ状の文明軽石層が認められる。出土遺物の内訳は、土師器1点、青磁4点、陶器11点、砥石1点、鉾滓17点である。下



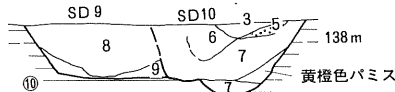
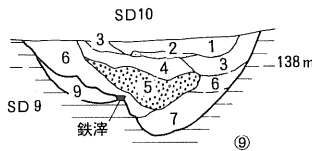
- ① 1. 灰オリブ砂質シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)
- 2. 黒褐色砂質シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)
- 3. 黒灰色シルト(灰白色バミス含む)
- 4. 灰オリブ砂質シルト(灰白色バミス含む)
- ② 5. 灰白色バミス
- ③ 6. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス含む)
- 7. 6の硬化層
- 8. 黒褐色シルト(黄橙色バミス含む)
- 9. 黒褐色シルト(黄橙色バミス多く含む)
- 10. 黒色シルト



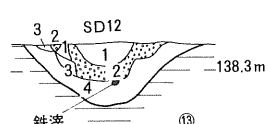
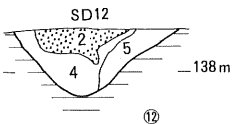
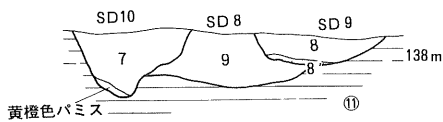
- ④ 1. 暗褐色砂質シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)
- ⑤ 2. オリブ黒色シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)
- ⑥ 3. 2の硬化層
- ⑦ 4a. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス微量含む)
- 4b. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス含む)



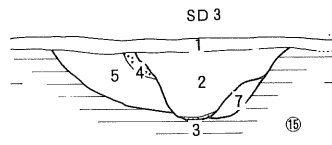
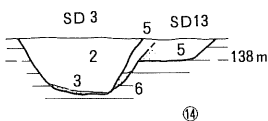
- ⑧ 1. オリブ黒砂質シルト(小礫含む)
- 2. 灰オリブ砂質シルト(小礫含む)
- 3. 2の硬化層
- 4. 暗褐色砂質シルト(黄橙色バミス含む)
- 5. 黒褐色シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)
- 6. 灰白色バミス
- 7. 黒褐色粘質シルト(黄橙色バミスの含有量 a < b < c)
- 8. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス含む)



- ⑨ 1. オリブ黒色砂質シルト(灰白色バミス含む)
- 2. 黒色シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)硬化層
- 3. 灰オリブ砂質シルト(灰白色バミス含む)
- ⑩ 4. 灰白色バミス 2次堆積層
- ⑪ 5. 灰白色バミス
- 6. 黒色シルト(黄橙色バミス含む)
- 7. 黒褐色シルト(粗粒の黄橙色バミス含む)
- 8. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス含む) 8': 8の硬化層酸化鉄沈着
- 9. 黒色粘質シルト(粗粒の黄橙色バミス含む)



- ⑫ 1. 暗オリブ砂質シルト(灰白色バミス含む)
- ⑬ 2. 灰白色バミス
- 3. 木の根痕
- 4. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス含む)

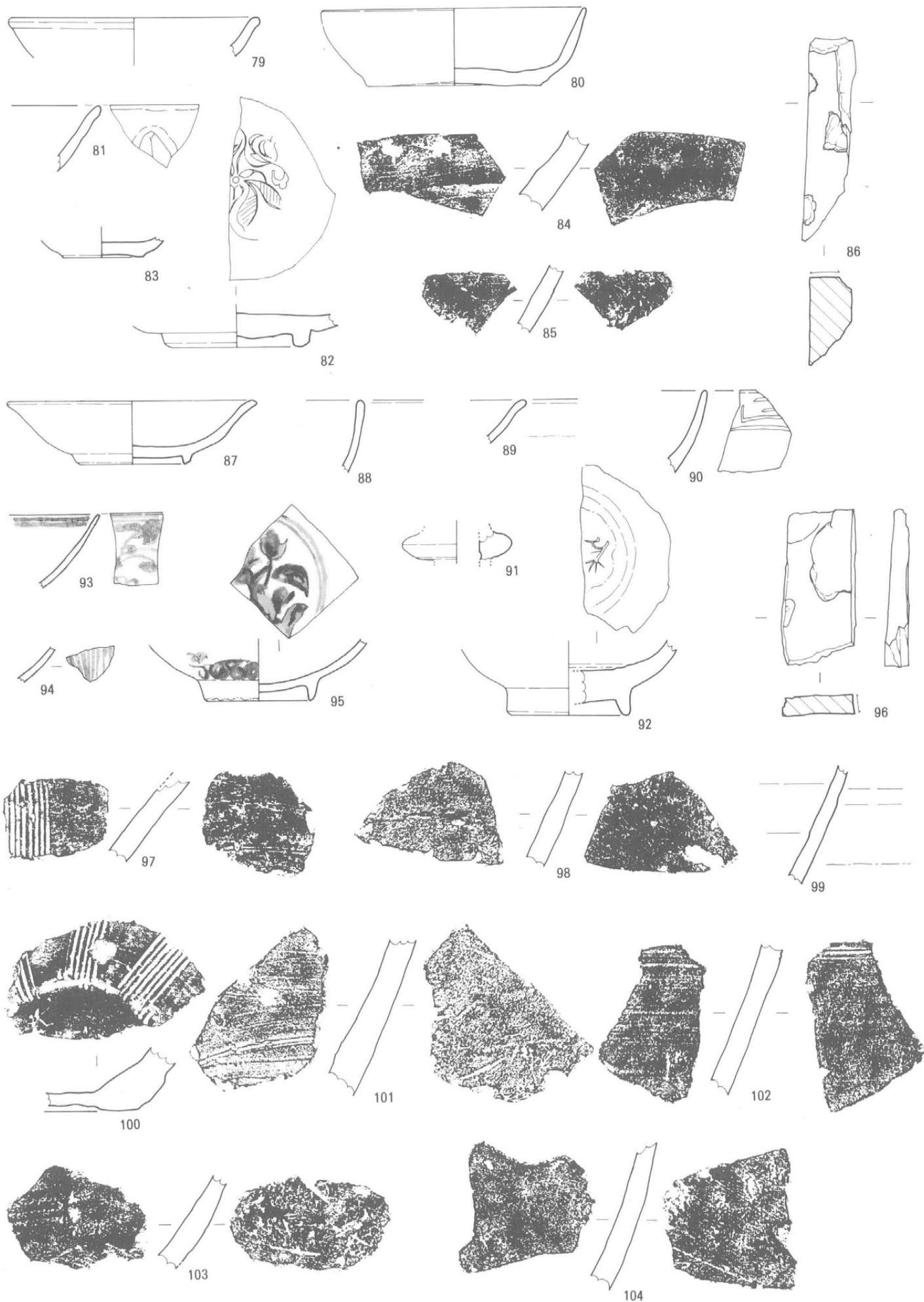


- ⑭ 1. 暗オリブ砂質シルト(灰白色バミス含む)
- ⑮ 2. オリブ黒色砂質(黄橙色バミス、灰白色バミス含む)
- 3. 黒灰色砂質シルト(黄橙色バミス、灰白色バミス含む酸化鉄沈着)
- 4. 灰白色バミス
- 5. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス含む)
- 6. 黒色粘質シルト(黄橙色バミス多量含む)
- 7. 黒褐色シルト(黄橙色バミス含む)

※ 白丸は灰白色バミス、アミかけは硬化を示す。



Fig. 14 A-I・II区 溝状遺構断面図



79, 80 : SD 1 出土    81, 82, 84~86 : SD 2 出土  
 83, 87~104 : SD 3 出土

0 10cm

Fig. 15 A区沟状遺構出土遺物実測図 (1)

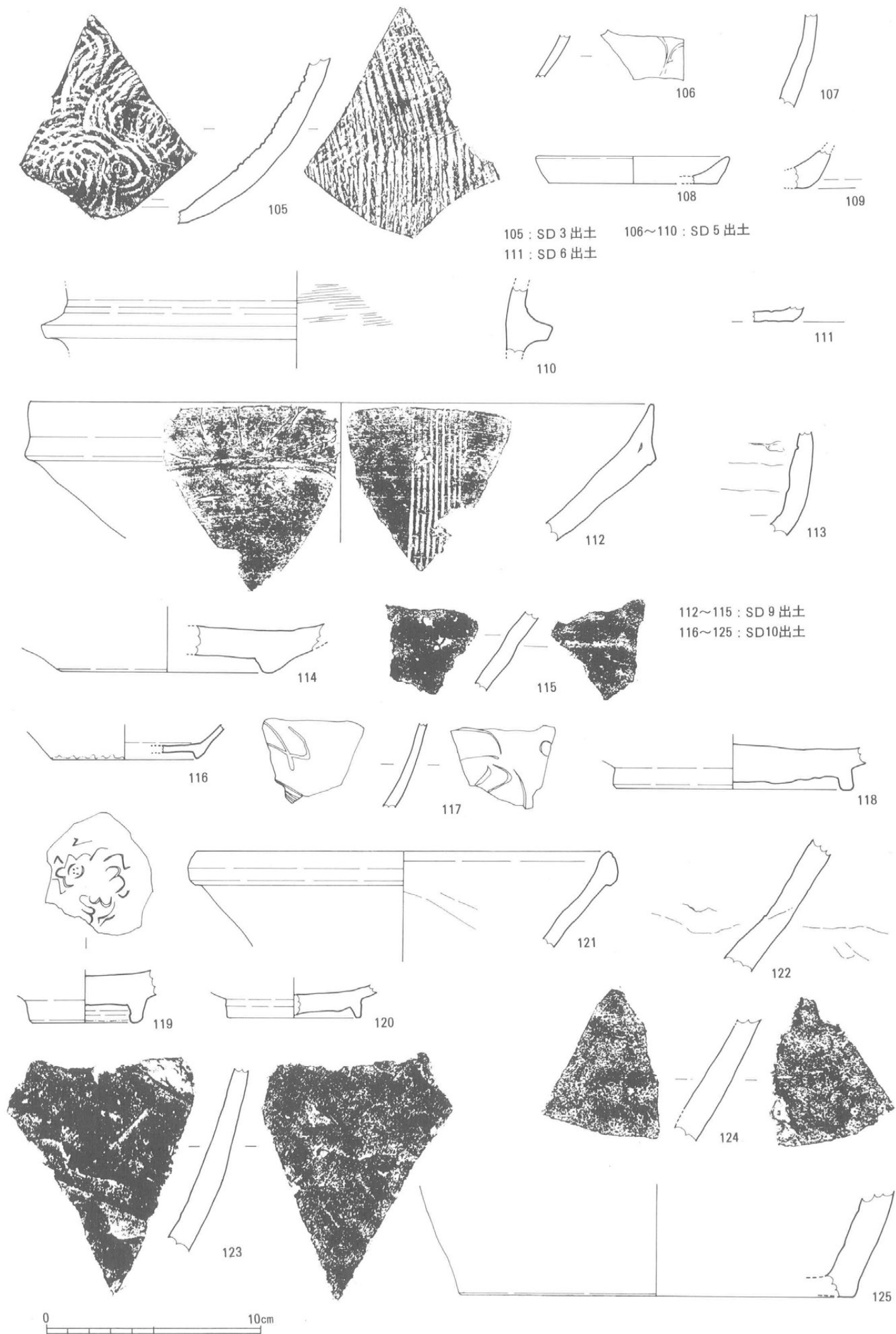


Fig. 16 A区溝状遺構出土遺物実測図 (2)

限は15世紀中頃であろう。

SD12 SD 1・SD 2・SD 3 とSD 8・SD 9・SD10の交差部分から出現し、A - II区を南へ走行する (Fig. 13)。SD 6 を切り、SD 5 に切られる。幅1.4m、深さ50cmで、断面形は「V」字状を呈する。埋土は1 b類である。トレンチでさらに南側へ追跡したが、調査区域外へ延びる。出土遺物は鉾滓4点だけである。下限は15世紀中頃であろう。

SD13 SD 1・SD 2・SD 3 とSD 8・SD 9・SD10の交差部分から出現し、A - II区をさらに西へ走行する。SD 3 に切られる。幅1.8m、深さ58cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は1 b類である。出土遺物は鉾滓1点だけである。

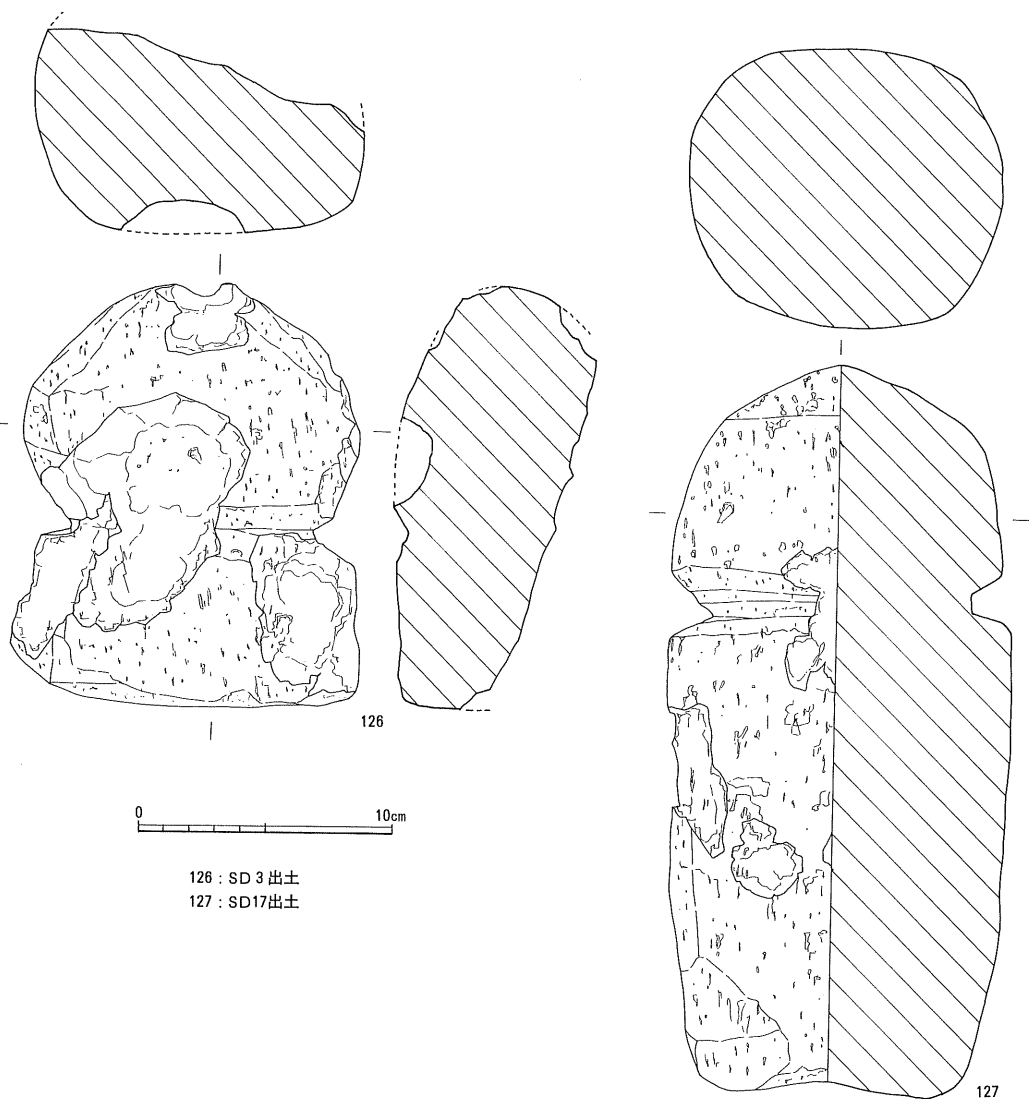


Fig. 17 A・C区 溝状遺構出土遺物実測図

SD 4 (幅60cm、深さ10cm)とSD 7 (幅60cm、深さ15cm)はいずれも断面形は皿状、埋土は1 a類の小規模なものである。それぞれSD 1・SD 2・SD 3とSD 8・SD 9・SD10に並行しており、いずれかの溝と同時期のものであろう。

SD11 (幅30cm、深さ15cm)とSD15 (幅60cm、深さ10cm)は、いずれも断面形は逆台形状を呈する。埋土は2類で、近世の陶磁器が出土する。

C区において検出したSD16, SD17, SD18, SD20, SD21, SD22はA区から連続した溝の可能性はある。

SD16 A-7トレンチで検出された溝から連続しており (Fig. 21)、C-I区で屈曲し北走する (Fig. 18)。SD17に切られる。幅1.1m、深さ30cmで、断面形は皿状を呈する。埋土は1 a類である。出土遺物の内訳は、陶器1点 (126)、鉾滓1点である。

SD17 A-II区で検出されたSD 6から連続している可能性があり (Fig. 21)、C-I区を北走する。SD18に切られる (Fig. 18)。幅1.1m、深さ30cmで、断面形は皿状を呈する。埋土は1 a類である。出土遺物の内訳は、青磁1点、須恵質陶器2点、鉾滓1点、軽石製五輪塔空風輪の未製品1点 (127) である。129は平安時代末～鎌倉時代の須恵質陶器甕である。

SD18 C-I区の南側を南北方向に走行し、SC51に切られ、姿を消す (Fig. 18)。幅1.5m、深さ50cmで、北へ行くほど底面が深くなる。断面形は「U」字状を呈し、埋土は1 b類である。出土遺物は、文明軽石の上位から青磁1点とその下位から白磁1点 (131) がある。15世紀中頃を下限とする。

SD19 C-I区で出現し、西へ走行する (Fig. 18)。幅60cm、深さ25cmで、断面形は「U」字状を呈し、埋土は2類である。出土遺物は、磁器1点だけである。

SD20とSD21は底面の凹凸により分けたが、断面による分層は不可能であった。A-II区で検出されたSD13から連続している可能性があり (Fig. 21)、C区を西へ走行する (Fig. 18)。幅1.68m、深さ40cmで、断面形は皿状を呈し、埋土は1 b類である。出土遺物の内訳は、陶器2点、砥石1点、鉾滓3点である。134は常滑焼こね鉢底部であり、内面の摩滅が進んでいる。136は側面に砥面をもつ砥石である。

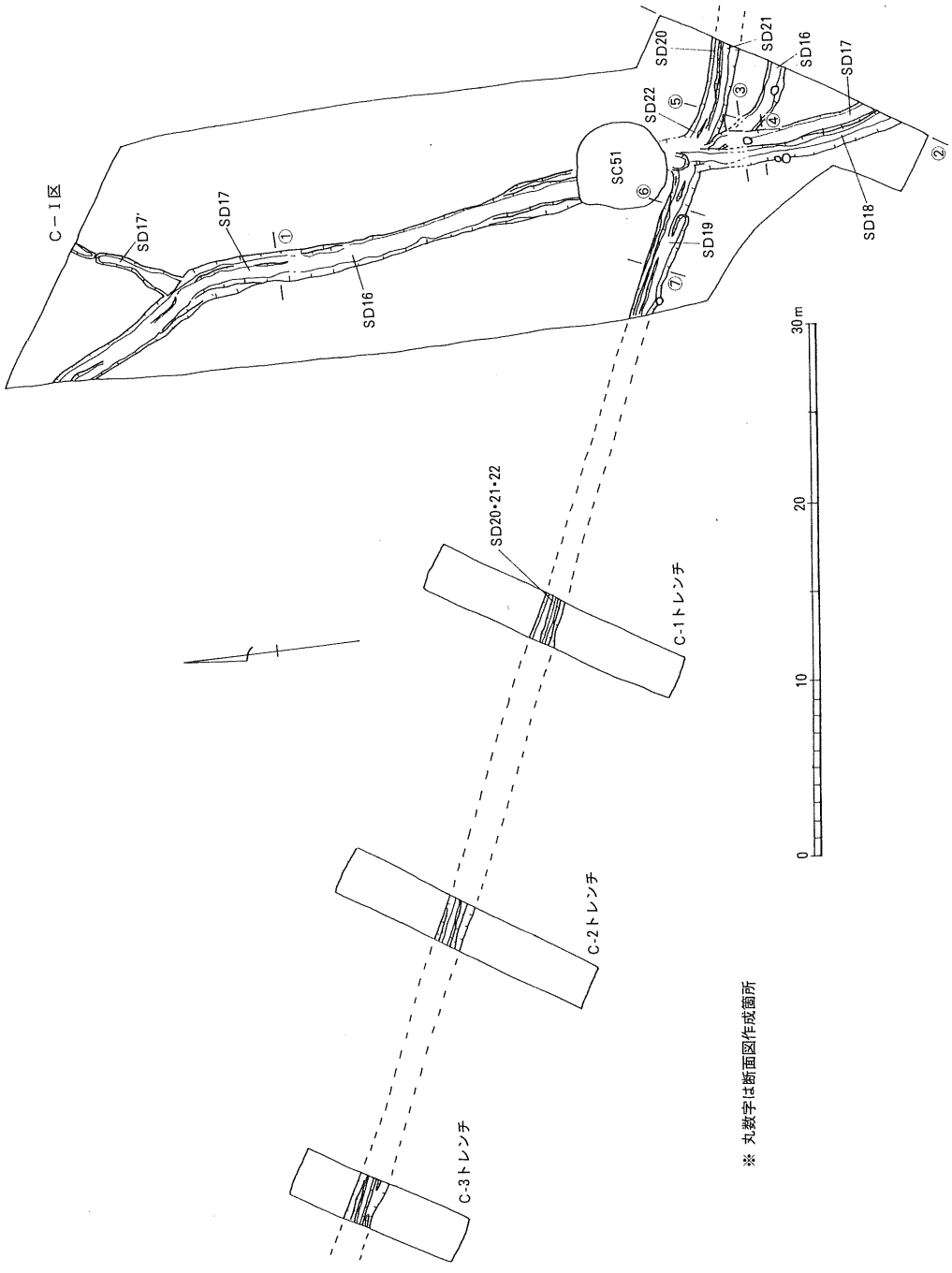
SD22 A-II区のSD 3から連続している可能性があり (Fig. 21)、C区を西へ走行する。幅0.94～2m、深さ20～54cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は2類であり、底面ともに硬化している。出土遺物は、鉾滓2点だけである。

#### [ B 区 ]

SD23, SD24, SD25は並行してB-I区を東西に走行し、前2者は途中で断絶する (Fig. 22)。

SD25 SF 1を切る。幅1m、深さ30cmで、断面形は「U」字状を呈する。埋土は1 a類である。出土遺物は鉾滓1点だけである。

次に述べるSD26とSD27は並行して南北走行している (Fig. 22) ことから、当初、SF 3の側溝になるのではと考えていたが、両者の間隔が不規則であることやSF 3硬化面群が溝の上に乗っていることなどからその可能性は少ないという結論に達した。



※ 丸数字は断面図作成箇所

Fig. 18 C区 溝状遺構配置図

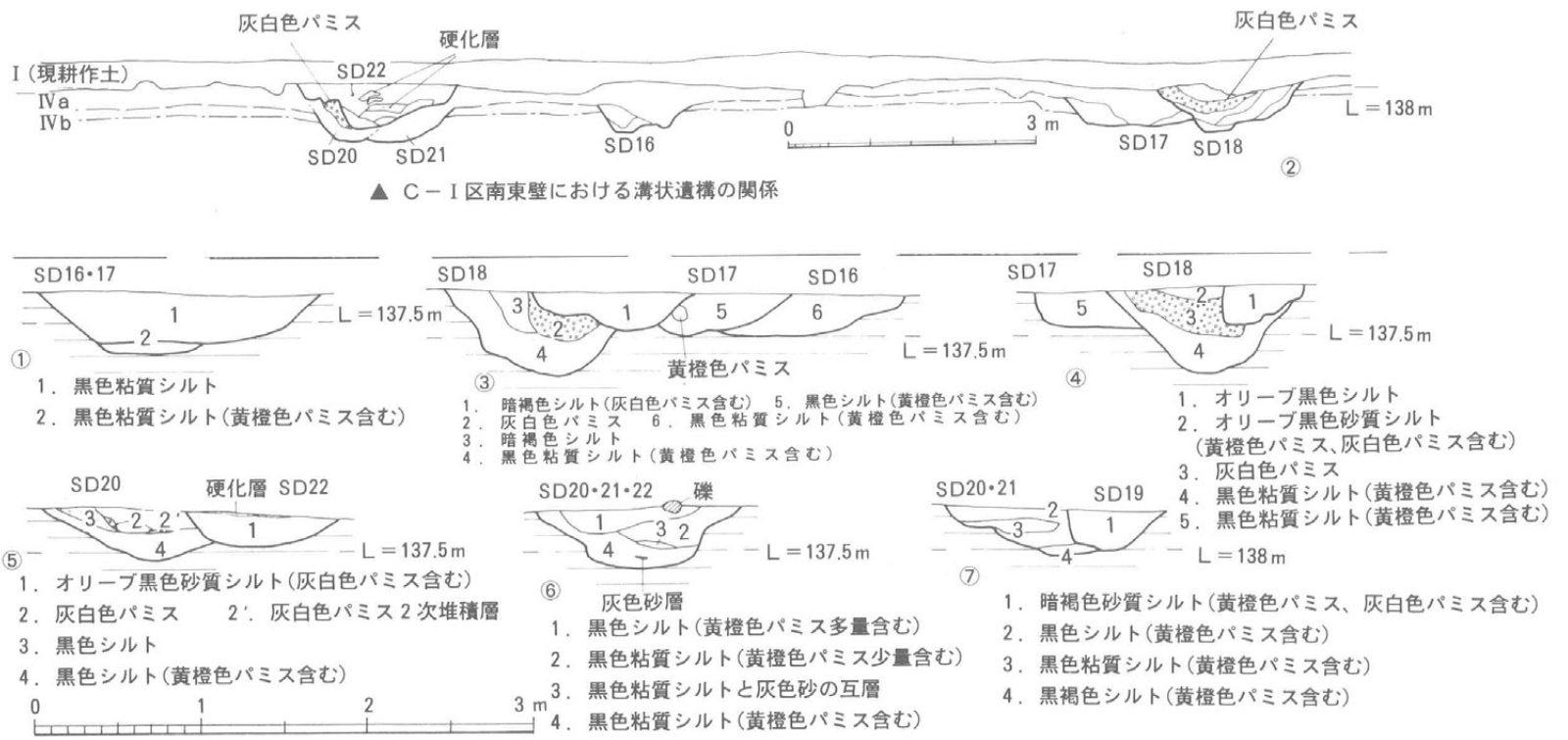


Fig. 19 C区溝状遺構断面図

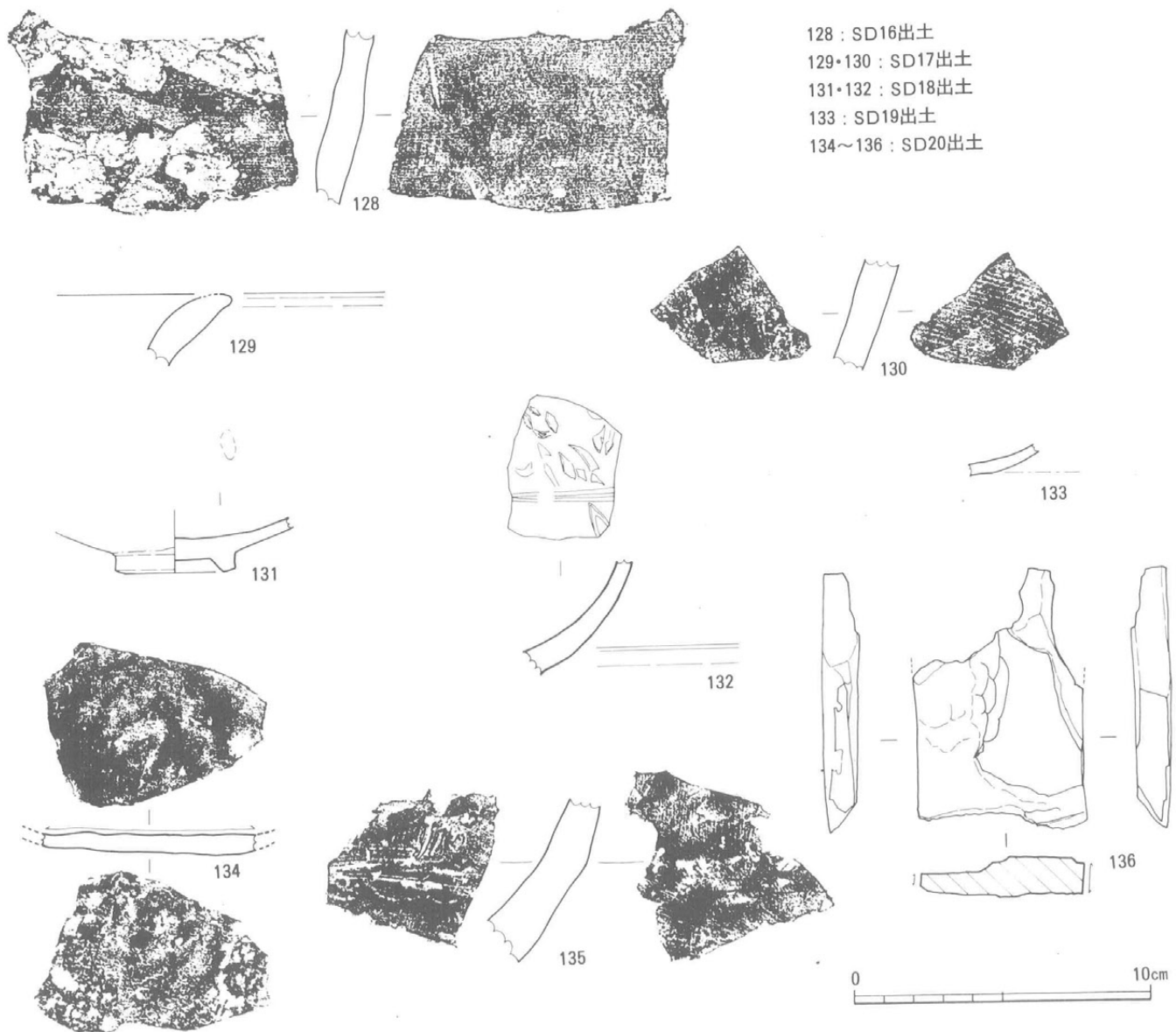


Fig. 20 C区溝状遺構出土遺物実測図



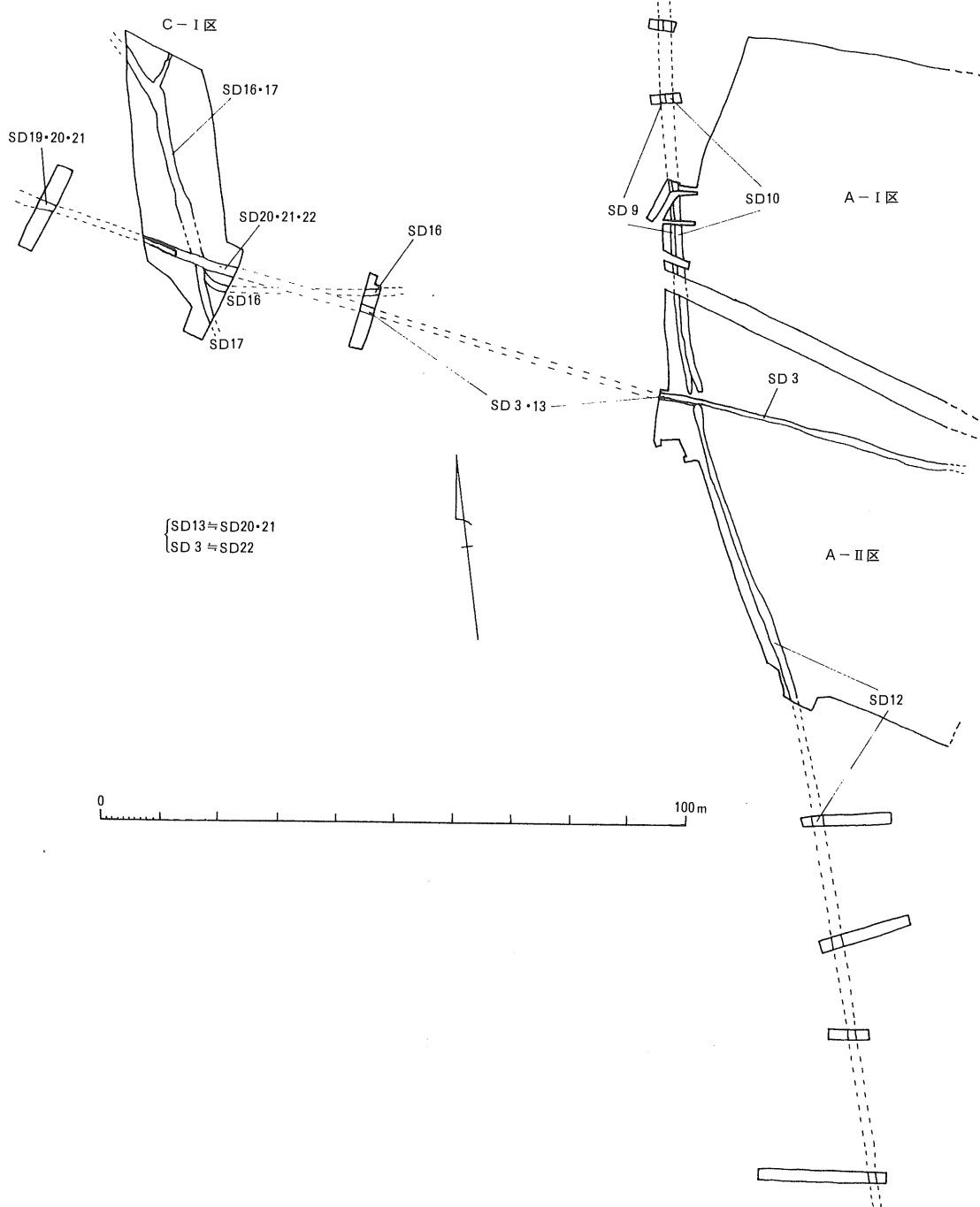


Fig. 21 A区とC区の溝状遺構の関係

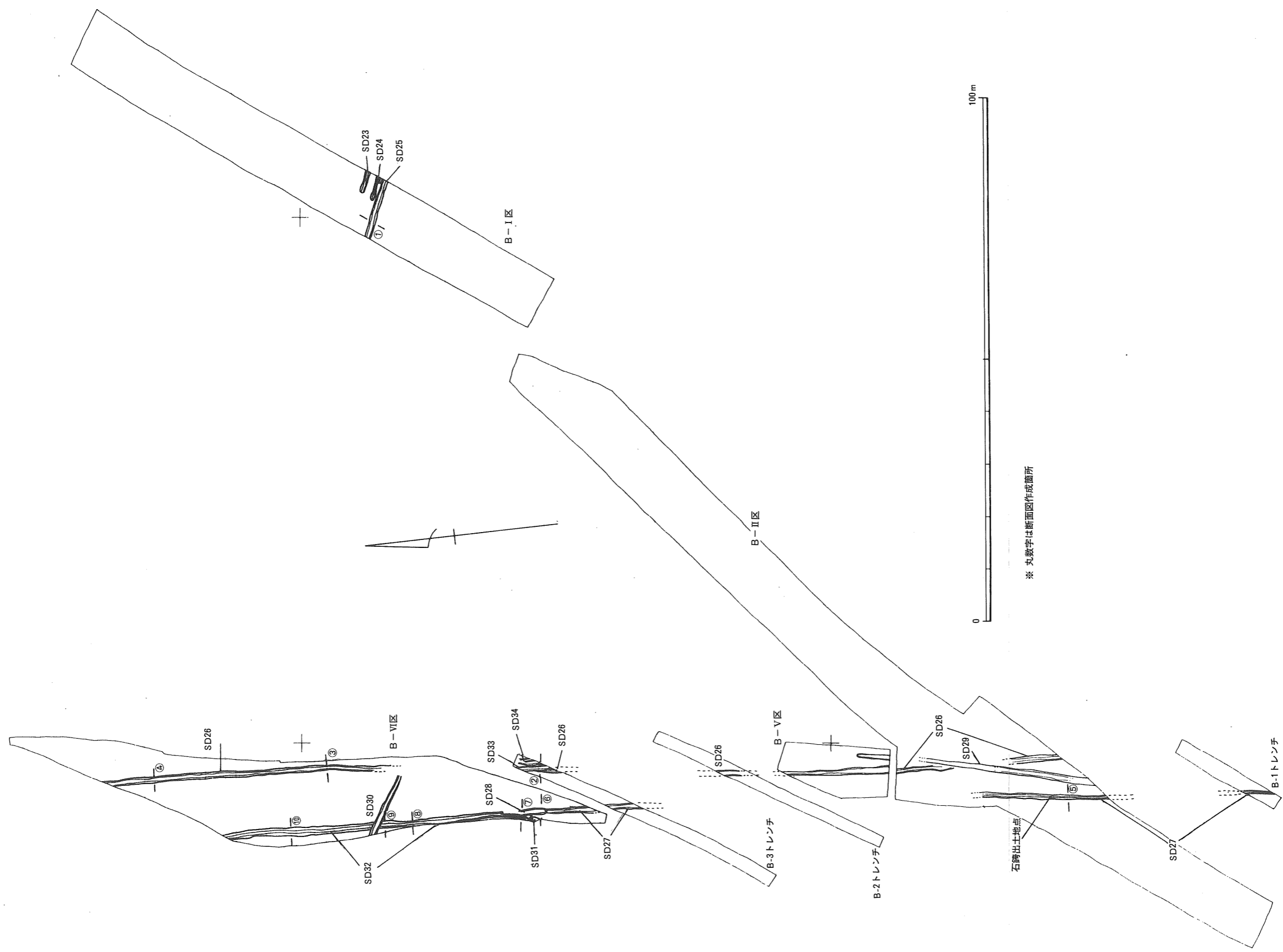


Fig. 22 B区 溝状遺構配置図

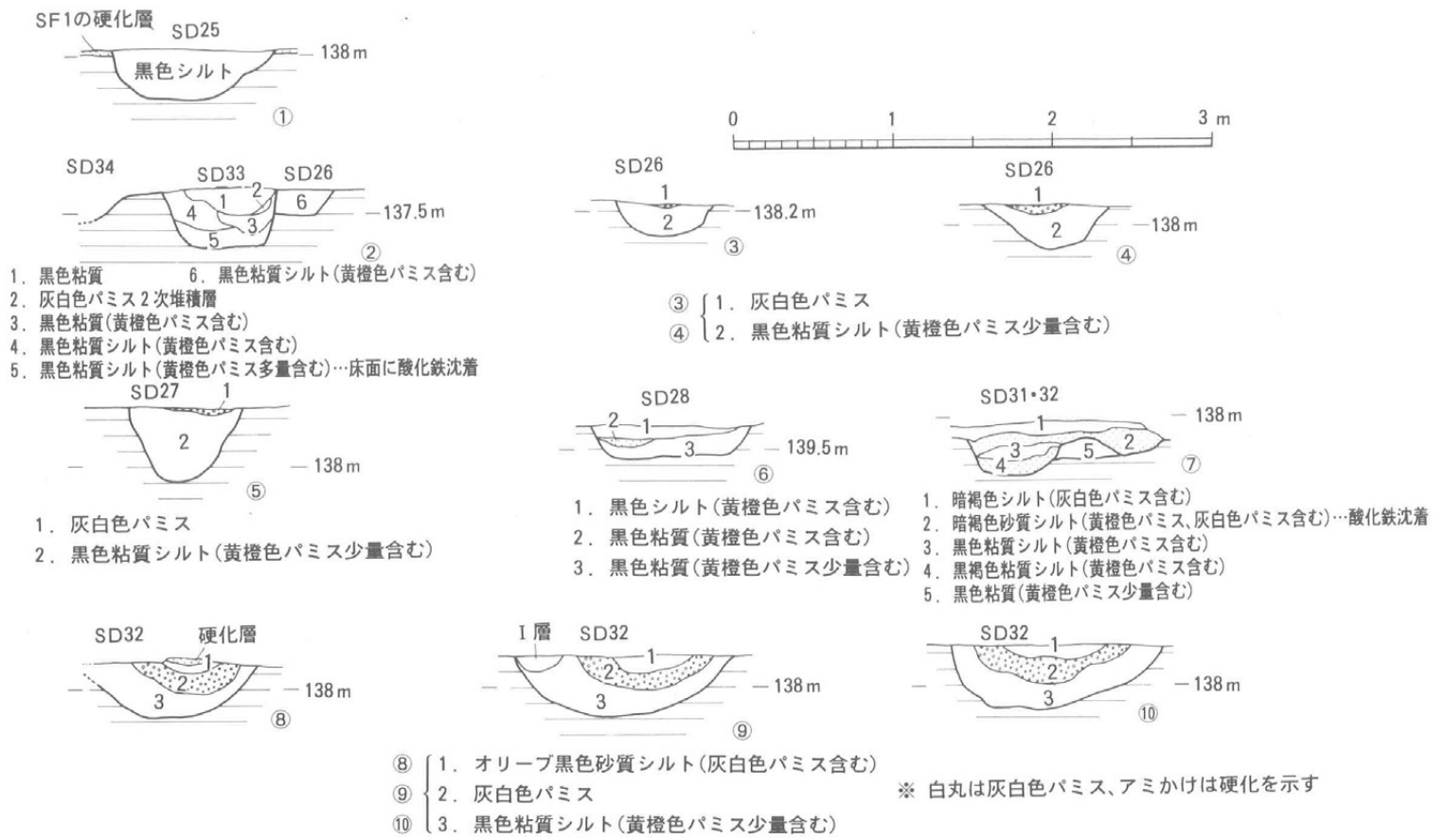


Fig. 23 B区 溝状遺構断面図

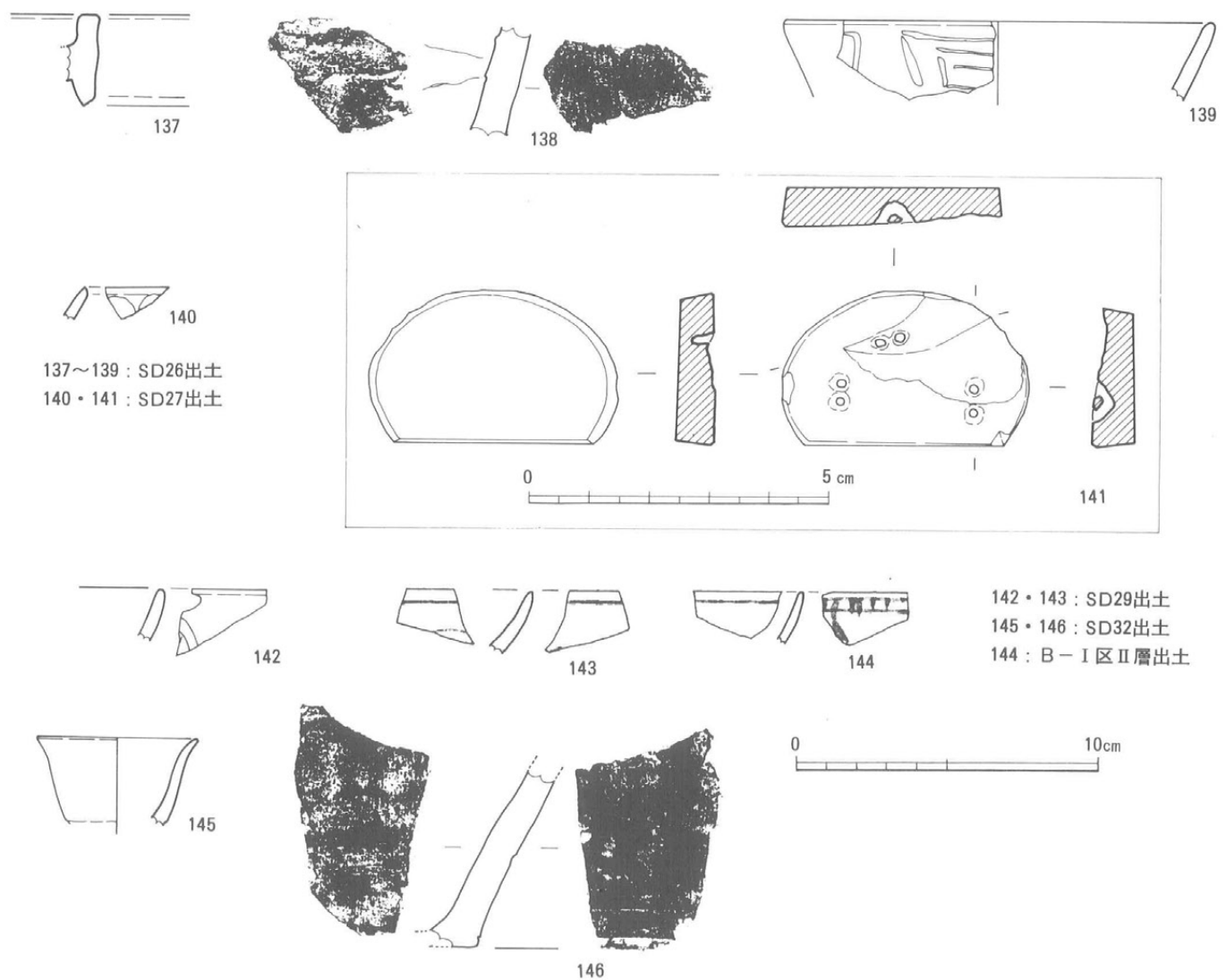


Fig. 24 B区 溝状遺構他出土遺物実測図

SD26 B-II区, B-V区, B-VI区にかけて検出した。幅60~80cm、深さ30~40cmで、断面形は「U」字状を呈する。埋土は1b類であり、堆積土の最上位に文明軽石が見られる。出土遺物の内訳は、土師器1点、陶器2点、青磁1点、鋤滓2点である。137は常滑焼甕の口縁部で13世紀代に位置づけられている。139は14世紀末から15世紀の青磁雷文帯碗である。

SD27 B-II区, B-V区, B-VI区にかけて検出した。幅70cm、深さ50cmで、断面形は「U」字状を呈する。埋土は1b類である。SD26と同じように堆積土の最上位に文明軽石が見られ、その下位から青磁縞蓮弁文碗1点(140)、石鏝1点(141)が出土している。この遺構の上限は13世紀代であろうか。141の石鏝は黒色の石材を利用した丸柄で、透し穴はなく、裏面に3か所の潜穴を設けている。また、裏面は凹凸が認められるが、側面と表面は丁寧に研磨されている。長さ4.1cm、幅2.6cm、厚さ0.65cmである。石鏝の用いられていた年代は平安時代を中心とするとされているが、本遺構の時期とはギャップがあり、伝世や混入などの可能性が考えられる。

SD28 B-VI区で検出された(Fig. 22)。SD27と重なり合うが、その切り合い関係は不明である。幅1m、深さ20cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は1a類であり堅い。

SD29 B-II区, B-V区で検出し、南北方向に走行する(Fig. 22)。SF1とSD26を切る。幅1.2m、深さ45cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は2類である。出土遺物の内訳は、土師器4点、陶器2点、青磁1点、染付3点である。近世以降のものであろう。

SD30 B-VI区で検出し、東西方向に走行する(Fig. 22)。SF2・SF3とSD32を切る。幅80cm、深さ50cmで、断面形は箱状を呈する。埋土は2類で、出土遺物は陶器1点である。

SD31 B-VI区のSD32が西へ折れて調査区外へ消える部分で検出された(Fig. 22)。幅は不明であるが、深さ8cm程度の断面形皿状を呈し、埋土(1a類)と底面は堅い。底面にピット(径20cm・深さ30cm)を伴い、その埋土、表面ともに酸化鉄が沈着し堅い。

SD32 B-VI区で検出し、東に弱い弧を描きながら南北方向に走行する(Fig. 22)。幅1.3cm、深さ40cmで、断面形は半円形状を呈する。埋土は1b類であり、埋土の上位に堆積した文明軽石の上面に硬化面が見られる部分もある。出土遺物の内訳は、青磁1点、白磁1点、陶器1点である。下限は15世紀中頃であろう。

SD33 B-3トレンチで検出した。南北方向に走行し、SD26を切る。幅70cm、深さ38cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は2類で、堅い。底面に酸化鉄が沈着する。

SD34 B-3トレンチで検出した。南北方向に走行し、SD33を切る。幅76cm、深さ15cmである。埋土は2類で、堅い。底面に酸化鉄が沈着する。

### (3) 掘立柱建物

掘立柱建物はA-I・II区だけで総数24棟検出されている(Fig. 25)。すべての柱穴内埋土は、黒色シルト土(IVa層)で、細分は不可能であった。時期はおおむね15世紀以前の中世と推察されるが、主軸方向から以下に示す6グループに分けることができる。

① N-16°-E~N-19°-E=SB4, SB17, SB18

② N-11°-E~N-14°-E=SB8, SB10, SB11, SB16, SB24, SL1

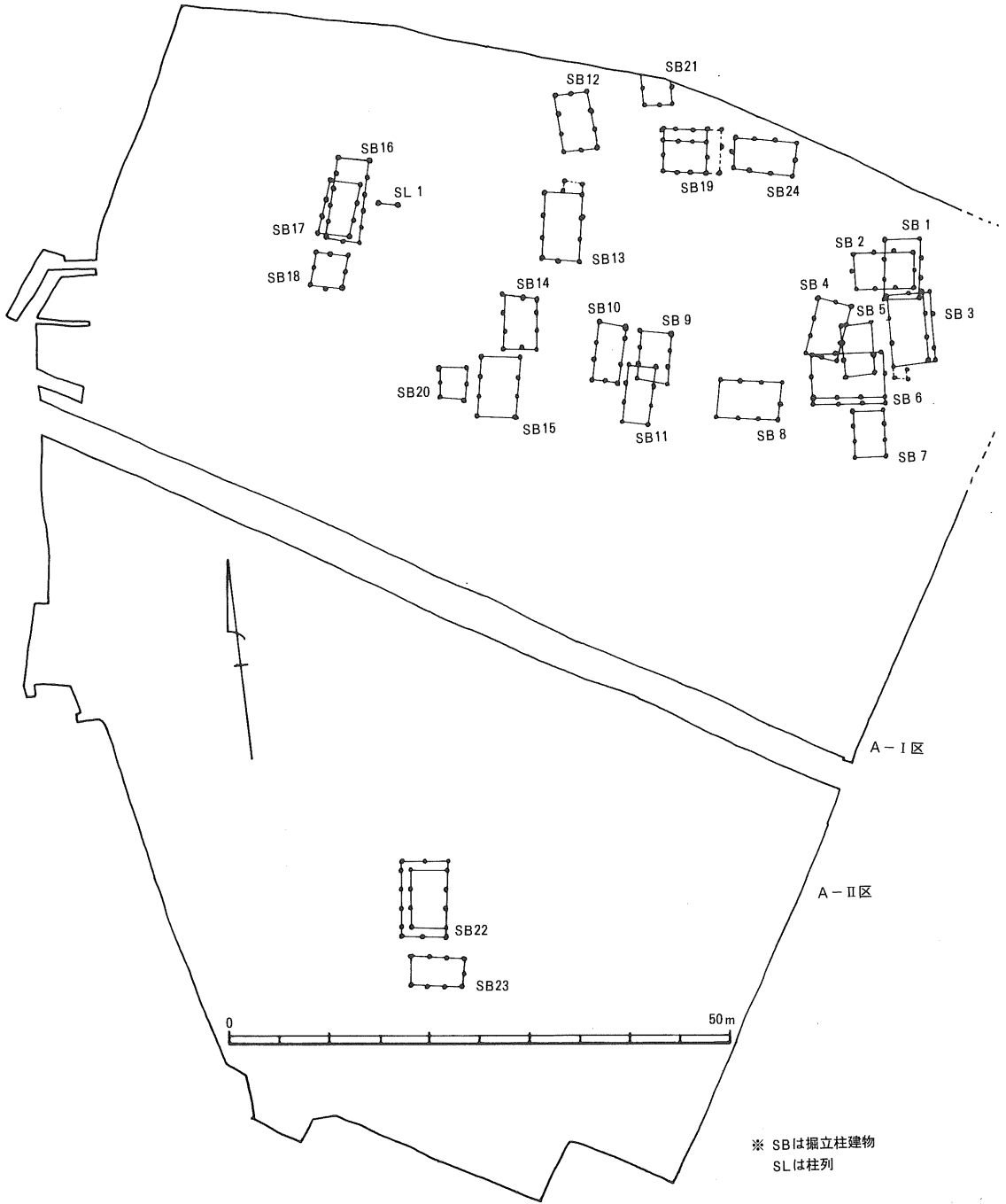


Fig. 25 掘立柱建物配置図

③ N-7°-E~N-9°-E=SB 9, SB13, SB15, SB19, SB20, SB22, SB23

④ N-4°-E~N-6°30'-E=SB 1, SB14, SB21

⑤ N-3°-E~N-3°30'-E=SB 2, SB 6, SB 7

⑥ N-1°-E~N-3°-W=SB 3, SB 5, SB12

[①グループ]

SB 4 SB 5, SB 6 と重複関係にある南北棟建物で、主軸をN-19°-Eにとる。梁間2間(3.5m)、桁行3間(5.6m)であり、柱穴掘方は径15~30cmの円形ないし楕円形である(Fig. 26)。

SB17 SB16と重複関係にある南北棟建物で、主軸をN-18°-Eにとる。梁間1間(3.15m)、桁行3間(5.6~5.8m)であり、柱穴掘方は径18~28cmの円形である(Fig. 27)。

SB18 SB17の南側に隣接する正方形の建物で、主軸をN-16°-Eにとる。東西2間(3.3m)、南北2間(3.4m)であるが、中央のピットは柱穴とは断定できない。柱穴掘方は径20~40cmの円形である(Fig. 27)。

[②グループ]

SB 8 SC 6 に切られる。東西棟の建物で、主軸をN-11°-Eにとる。梁間3間(3.8m)、桁行3間(6.35m)であるが、建物西端梁間は1間である。柱穴掘方は径20~26cmの円形である(Fig. 26)

SB10 SB11に隣接する南北棟の建物で、主軸をN-11° 30'-Eにとる。梁間2間(2.7m)、桁行3間(5.9m)であるが、建物北端梁間は1間である。柱穴掘方は径20~38cmの円形ないし楕円形である(Fig. 27)。

SB11 SB10に隣接し、SB 9 と重複関係にある南北棟の建物で、主軸をN-12°-Eにとる。梁間1間(2.7m)、桁行3間(5.8m)で、柱穴掘方は径25~30cmの円形である(Fig. 27)。ひとつの柱穴内に礫が見られた。

SB16 SB17と重複関係にある。南北棟建物で、主軸をN-14°-Eにとる。梁間2間(3.2m)桁行5間(8.2m)であるが、建物北端梁間は1間である。柱穴掘方は径18~25cmの円形である(Fig. 27)。

SB24 SA 1 と重複関係にあり、ほぼそれをとりかこむように柱穴がならぶ。SA 1 内に明瞭な柱穴がないことを考えると、上屋となる可能性があるが、断定はできない。東西棟の建物で、主軸をN-11°-Eにとる。梁間2間(3.4m)、桁行3間(6.2m)であるが、建物西端梁間は1間である。柱穴掘方は径20~30cmの円形である(Fig. 28)。

SL 1 SB16の東側で、2つの柱穴が検出されているが、建物を構成するものではなさそうである。東側の柱穴は掘りなおされており、柱間は2.5~2.75mである(Fig. 28)。柱穴内底面には礫が1個ずつ検出された。

[③グループ]

SB 9 SB11と重複関係にある。南北棟の建物で、主軸をN-9°-Eにとる。梁間2間(3.2m)、桁行3間(5.1m)であるが、建物北端梁間は1間である。柱穴掘方は径20~38cmの円形である(Fig. 26)。3つの柱穴内で礫が重なりあっていて他、土師器底部(148)も出土している。

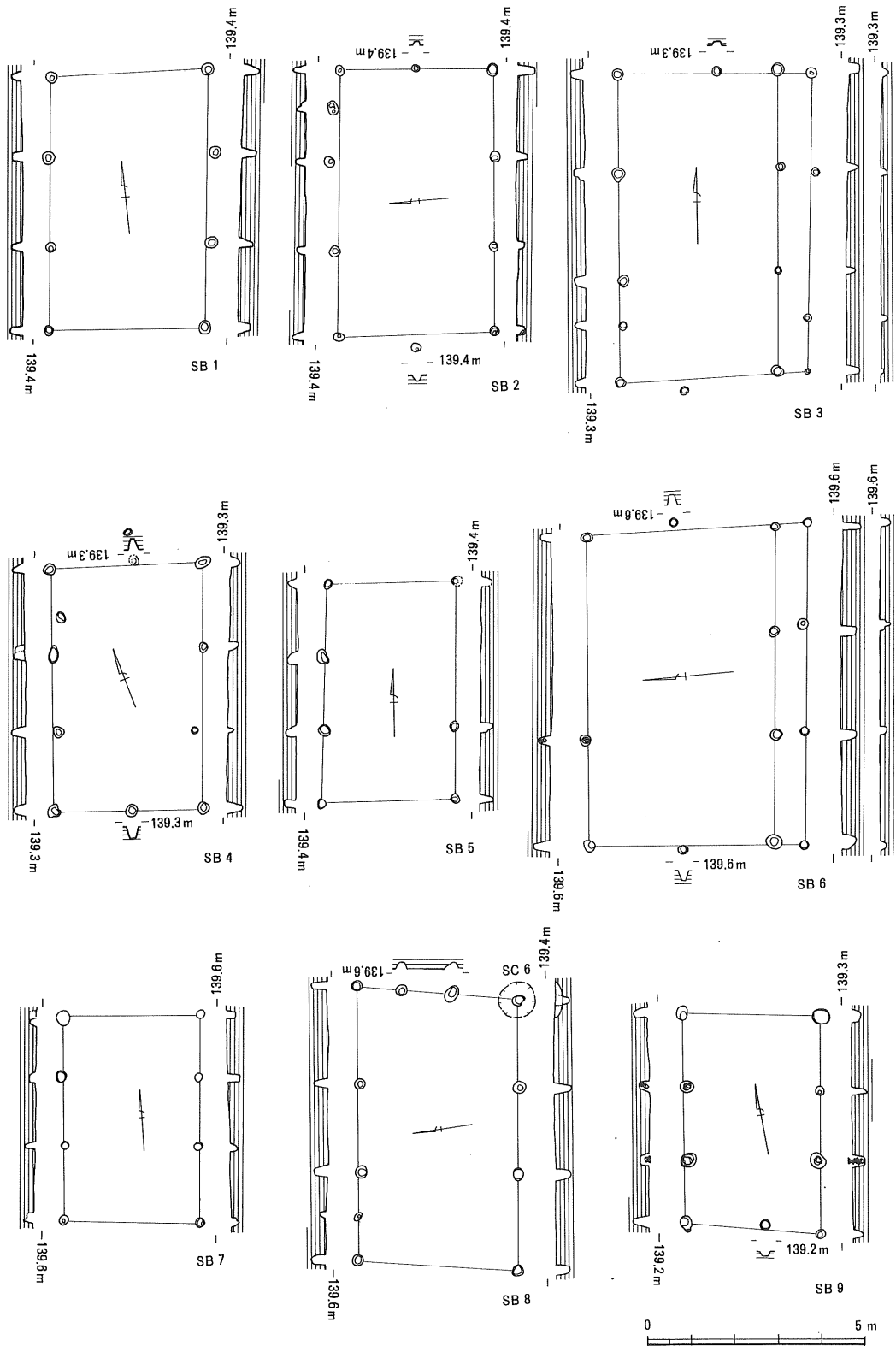


Fig. 26 掘立柱建物実測図 (1)

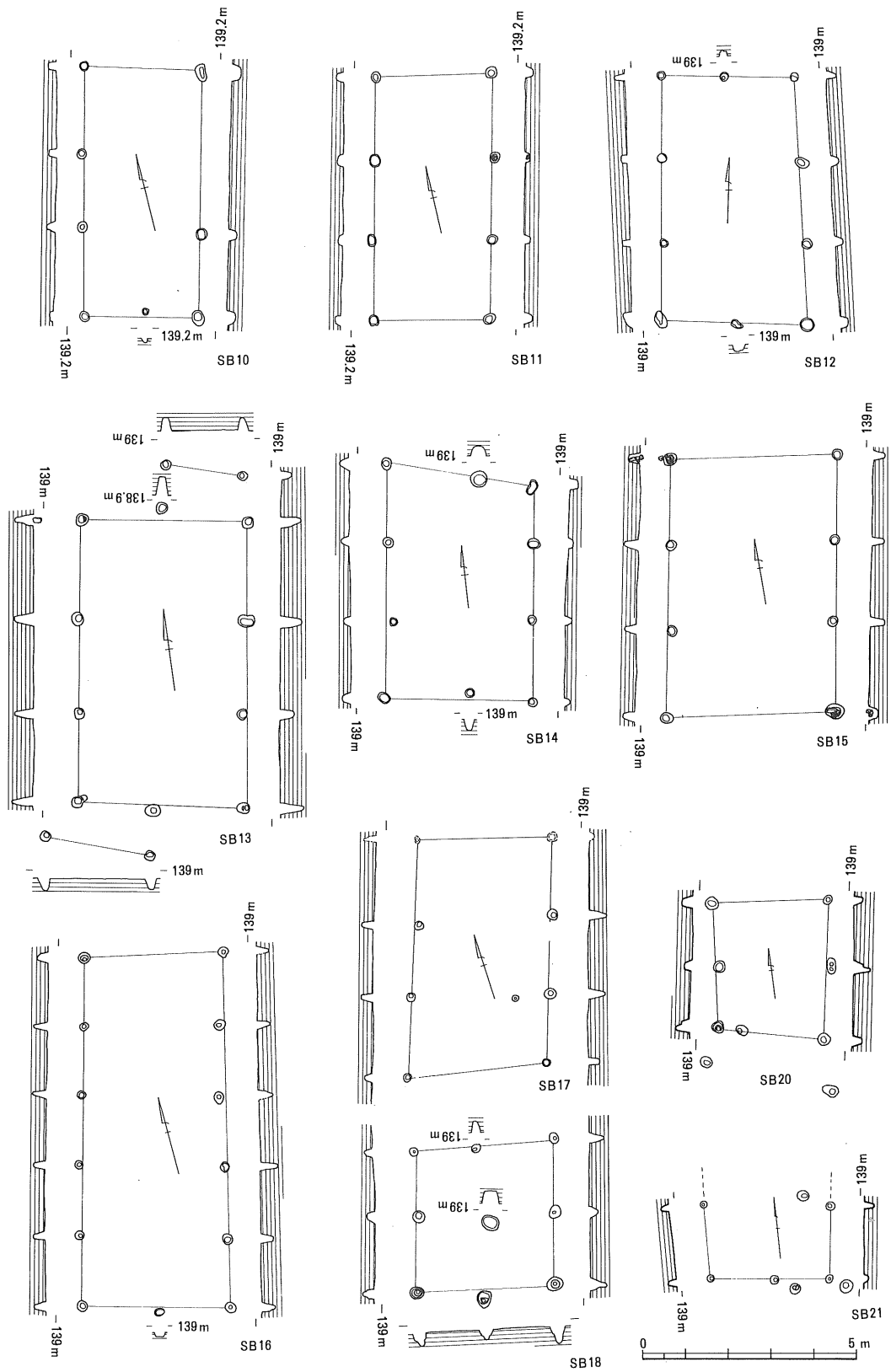


Fig. 27 掘立柱建物実測図 (2)



SB13 南北棟の建物で、主軸をN-9°-Eにとる。梁間2間(3.35m)、桁行3間(6.8m)であるが、北側と南側に一間分(1.1m)の半庇状柱穴を伴う可能性がある。柱穴掘方は径26~40cmの円形、楕円形、方形である(Fig. 27)。1つの柱穴上面に礫が検出された他、東播系こね鉢(150)も出土している。

SB15 南北棟の建物で、主軸をN-9°-Eにとる。梁間1間(4m)、桁行3間(6.1m)で、柱穴掘方は径24~43cmの円形である(Fig. 27)。4隅の柱穴のうち2カ所で礫が検出された他、口禿げ白磁碗の底部と思われる磁器(152)も出土している。

SB19 東西棟の建物で、主軸をN-8°-Eにとる。梁間2間(3.2m)、桁行3間(4.5m)であるが、北側と東側に一間分(1.25m)の庇状柱穴が配される。柱穴掘方は径20~40cmの円形ないし楕円形である(Fig. 27)。1つの柱穴内で礫が検出された他、須恵質陶器(153)も出土している。

SB20 南北棟の建物で、主軸をN-9°-Eにとる。梁間1間(2.7m)、桁行2間(3.3m)で、柱穴掘方は径30cmの円形ないし楕円形である(Fig. 27)。

SB22 SB23に直交・隣接する南北棟の建物で、主軸をN-7°-Eにとる。梁間1間(3.7m)、桁行3間(6m)分を身舎とし、北、西、南に一間分(0.9m)の庇状柱穴が配される。3つの柱穴内で礫が検出され、その内の1つには粘土塊も見られた。柱穴掘方は径20~34cmの円形である(Fig. 28)。

SB23 東西棟の建物で、主軸をN-8° 30'-Eにとる。梁間2間(3.1m)、桁行3間(5.25m)であるが、建物西端梁間は1間である。柱穴掘方は径20~25cmである(Fig. 28)。

#### [④グループ]

SB1 SB2, SB3と重複関係にある南北棟の建物で、主軸をN-6° 30'-Eにとる。梁間1間(3.65m)、桁行3間(5.9m)で、柱穴掘方は径22~30cmの円形である(Fig. 26)。柱穴内から土師器口縁部破片(147)が出土している。

SB14 南北棟の建物で、主軸をN-4°-Eにとる。梁間2間(3.5m)、桁行3間(5.55~5.1m)であるが、北側梁間は桁方向に直交していない(Fig. 27)。柱穴掘方は径20~30cmの円形であり、柱穴内から青磁鎬蓮弁文碗(151)が出土している。

SB21 南北棟の建物と思われるが、北側は調査区外へ延び、全容は明らかでない。主軸をN-4°-Eにとる。梁間2間(2.8m)で、柱穴掘方は径16~20cmの円形である(Fig. 27)

#### [⑤グループ]

SB2 SB1と重複関係にある東西棟の建物である。主軸をN-3° 30'-Eにとり、梁間2間(3.6m)、桁行3間(6.25m)で、柱穴掘方は径18~30cmの円形である(Fig. 26)。1つの柱穴内で礫が検出された。

SB6 SB4, SB5と重複関係にあり、SB7と直交・隣接する東西棟の建物で、主軸をN-3°-Eにとる。梁間2間(4.3m)、桁行3間(7.4m)で、南側に一間分(0.75cm)の庇状柱穴を配する。柱穴掘方は径20~38cmの円形であり(Fig. 26)、1つの柱穴内で礫が検出された。

SB7 南北棟の建物で、主軸をN-3°-Eにとる。梁間1間(3.2m)、桁行3間(4.9m)で、柱

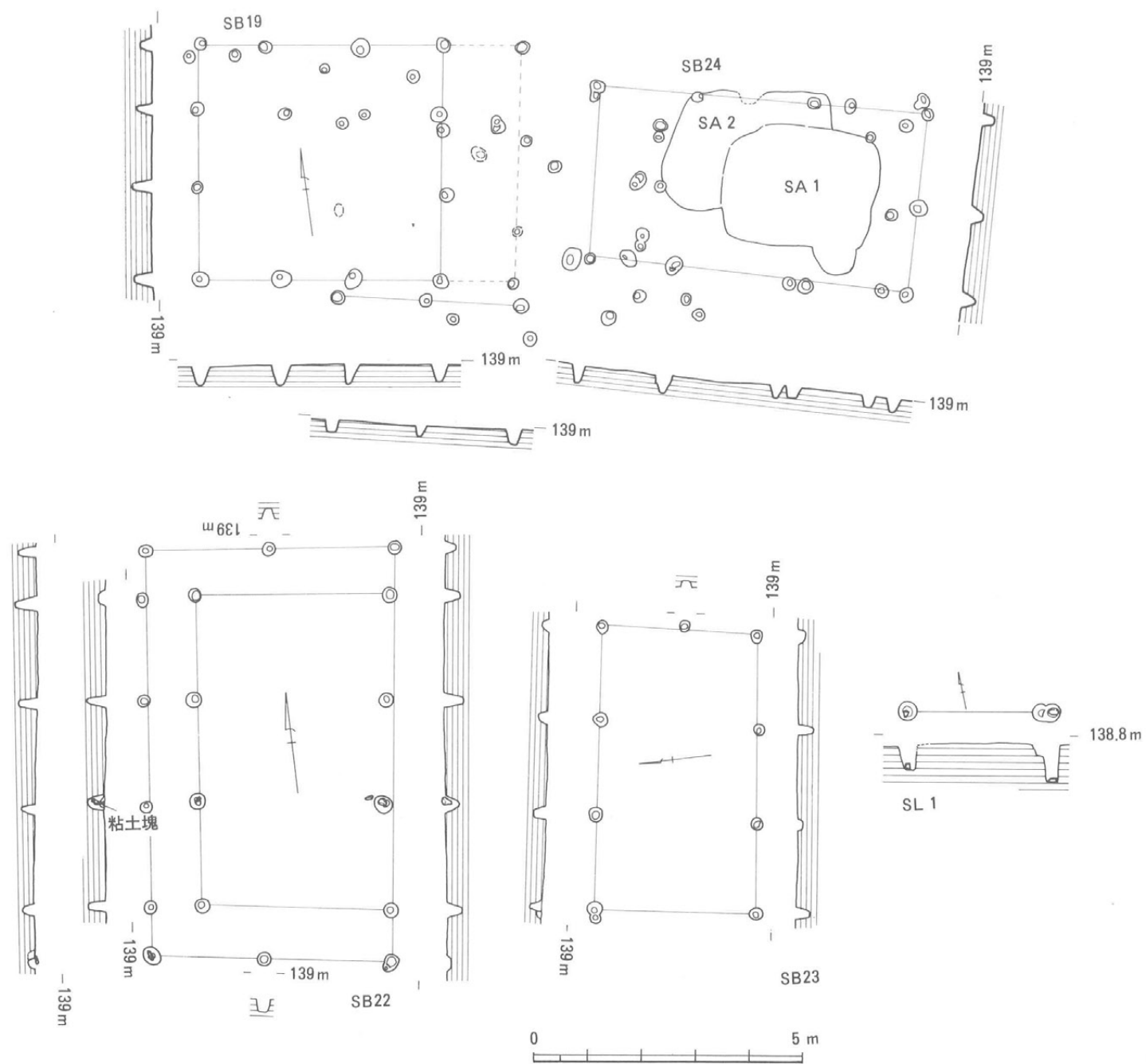


Fig. 28 掘立柱建物実測図 (3)

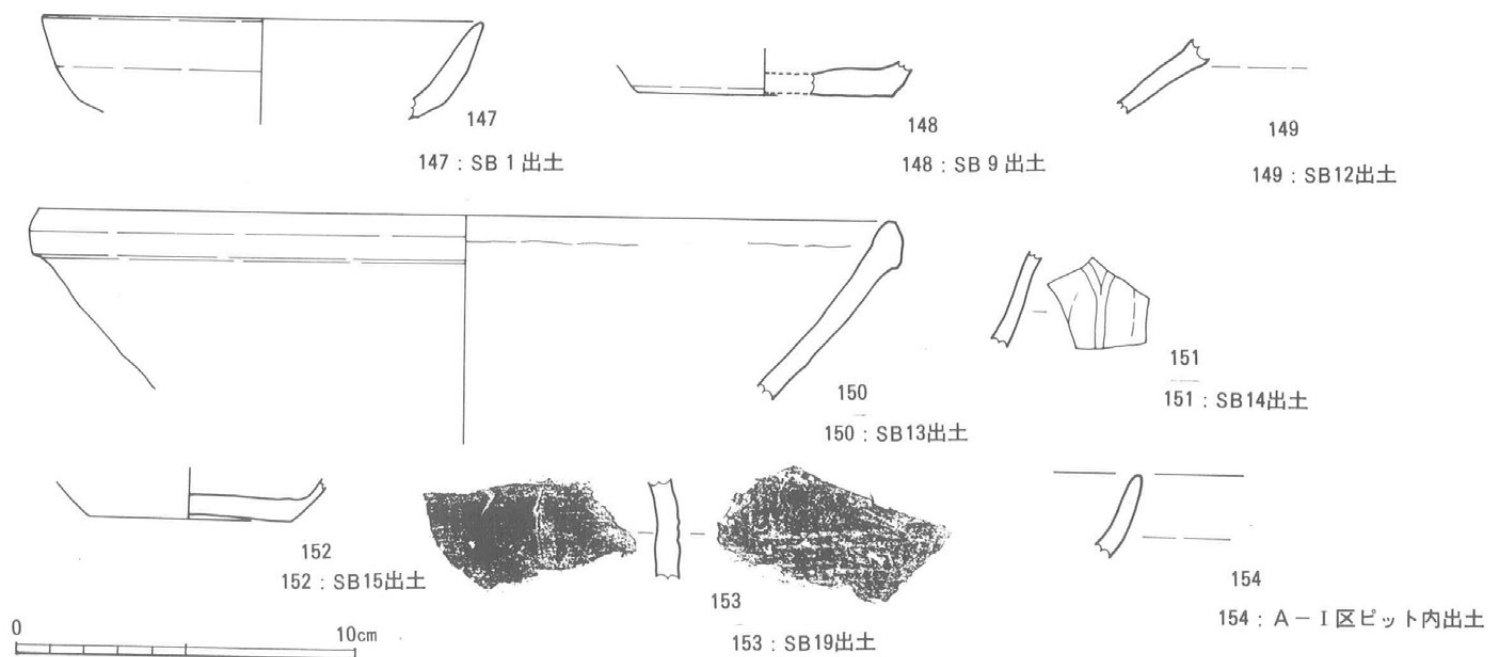


Fig. 29 柱穴内出土遺物実測図

穴掘方は径20~26cmの円形である (Fig. 26)。

[⑥グループ]

SB 3 SB 1 と重複関係にある南北棟建物である。主軸をN-1°-Eにとる。梁間 2 間 (3.7m)、桁行 3 間 (7.2m) で、東側に一間分 (0.7m) の底状柱穴を配する。柱穴掘方は径14~30cmの円形である (Fig. 26)。

SB 5 SB 4, SB 6 と重複関係にある南北棟建物である。主軸をN-1°-Eにとる。梁間 1 間 (3.1m)、桁行 3 間 (5.1m) で、柱穴掘方は径20~34cmの円形ないし楕円形である (Fig. 26)。

SB12 南北棟建物で、主軸をN-3°-Wにとる。梁間 2 間 (3.15~3.5m)、桁行 3 間 (5.8m) で、柱穴掘方は径20~40cmの円形ないし楕円形である (Fig. 27)。柱穴内から東播系こね鉢 (149) が出土している。

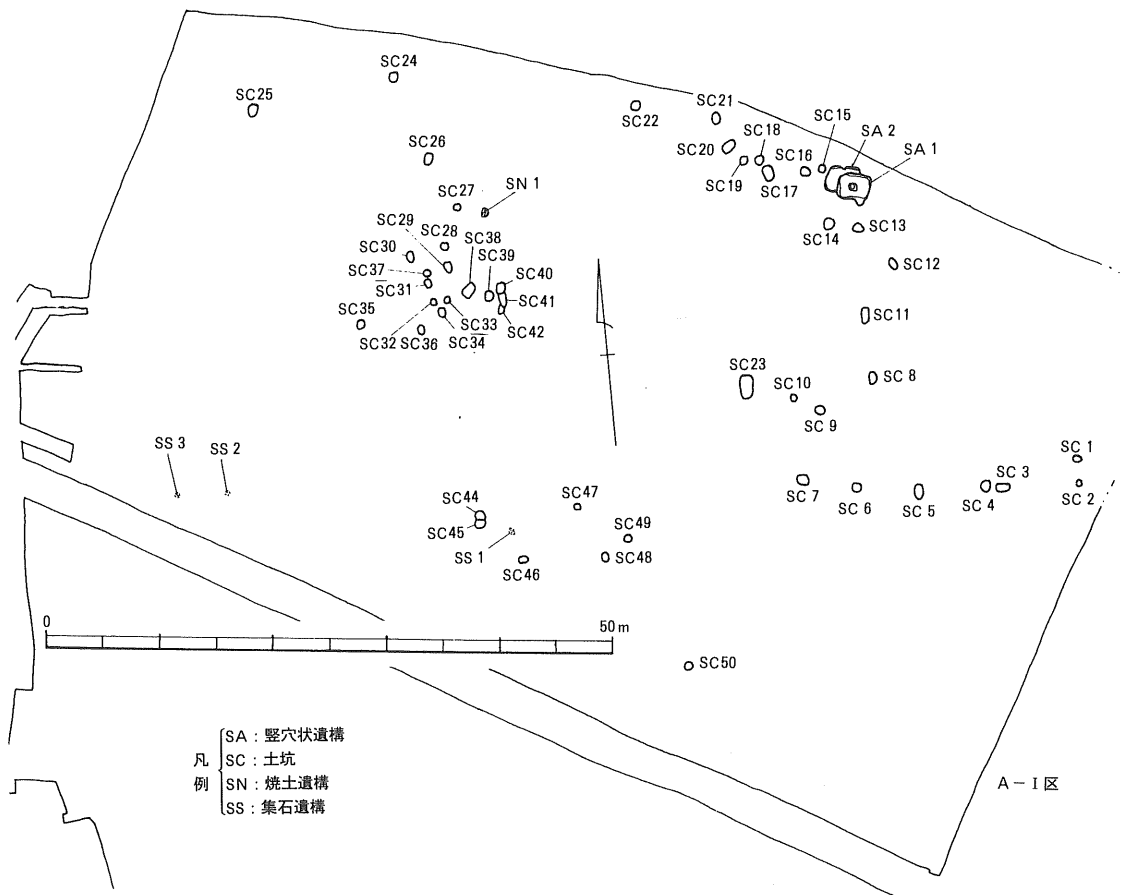


Fig. 30 A区土坑その他配置図

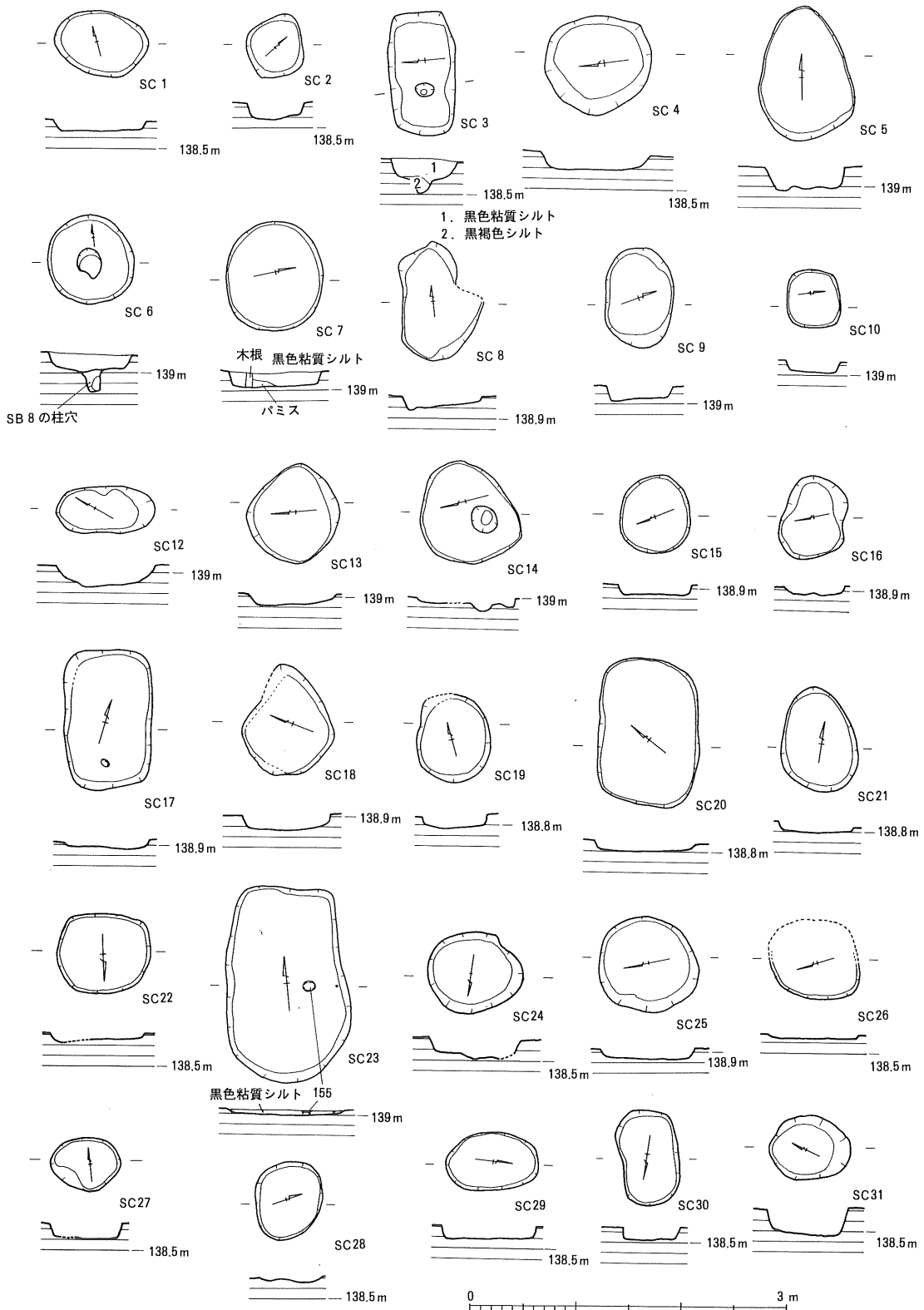


Fig. 31 土坑実測図

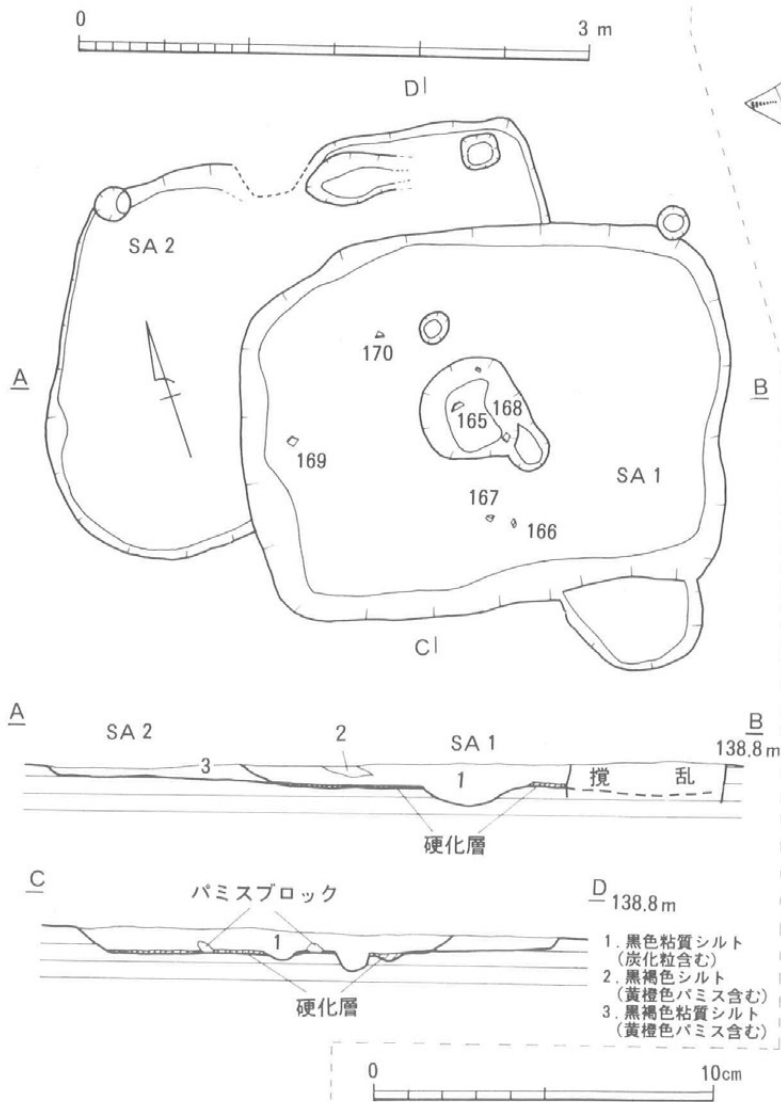
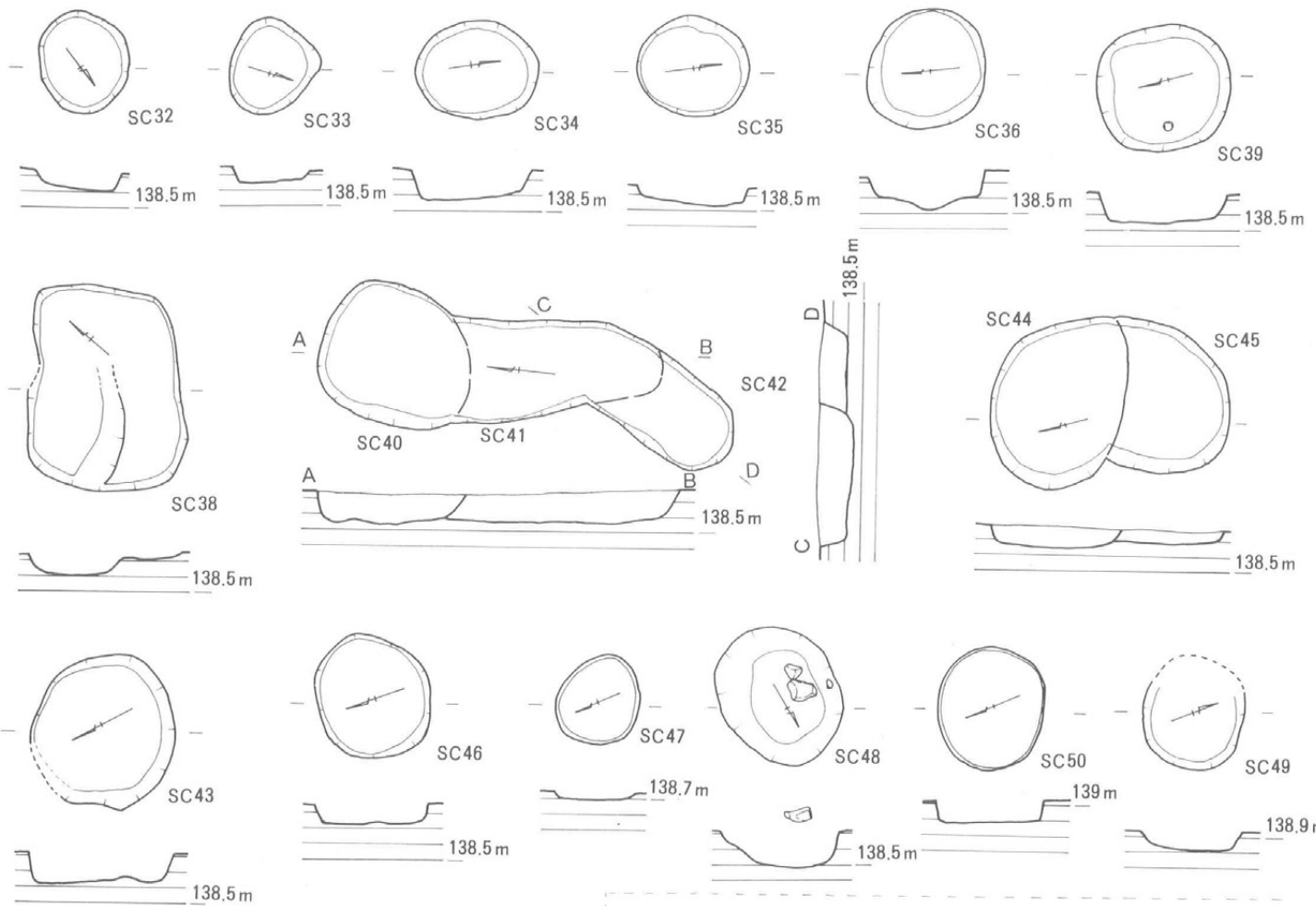


Fig. 32 土坑および竪穴状遺構実測図

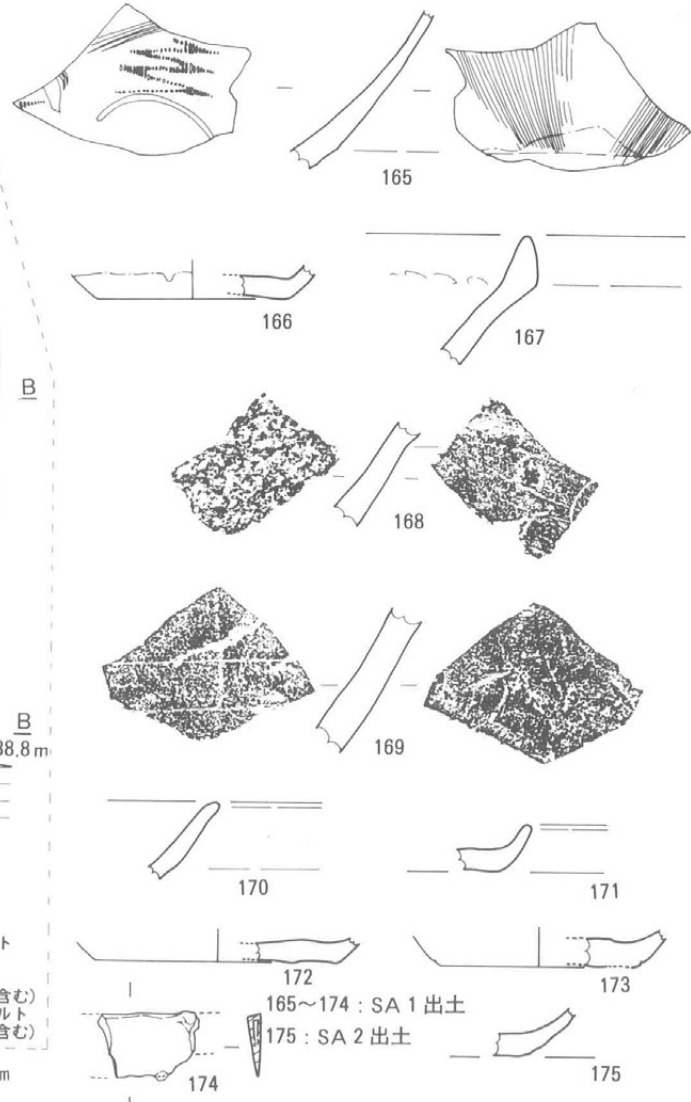


Fig. 33 竪穴状遺構出土遺物実測図

(4) 土坑・竪穴状遺構

柱穴以外の落ち込みを土坑 (SC) として一括しているが、竪穴住居に類似するものも 2 基検出されており、竪穴状遺構 (SA) とした。

土坑は、A-I 区で 49 基 (Fig. 30) と C-I 区 (Fig. 18) で 1 基が検出されている。A-I 区のものはその平面形や規模がいくつか分類できるものの、いずれも検出面からの深さは 10~20cm 程度と浅く、埋土も SC49 以外は、すべて黒色シルト土 (IV a 層) である。遺物は SC23 を除けばその性格を直接的に示すものはない。なお、A-I 区の SC37 は最終的に人工的なものとは認められなかったため、除外・欠番とした。つぎに主なものについて説明する。

[ A-I 区 ]

SC 6 直径 85cm、深さ 15cm の円形プランで、建物 SB 8 の柱穴を切っている (Fig. 31)。

SC 19 長径 85cm・短径 70cm、深さ 12cm の楕円形プランで (Fig. 31)。陶器 (158) が出土している。

SC 23 長軸 1.85m・短軸 1.15m、平面プランの南側は丸みをおび、北側は方形を呈する (Fig. 31)。ほぼ中央に土師器高台付椀 (155) の底部とセキエイと思われる白色の小石が出土している。土師器椀は摩滅が著しいものの、副葬品であるとすれば、墓壙の可能性がある。

SC 27 長径 67cm・短径 52cm、深さ 15cm の楕円形プランで (Fig. 31)、土師器 (159) が出土している。

SC 28 長径 75cm・短径 64cm、深さ 5cm の不整楕円形プランで (Fig. 31)、土師器 (159) が出土している。

SC 29 長径 87cm・短径 55cm、深さ 12cm の不整楕円形プランで (Fig. 31)、土師器 (161) が出土している。

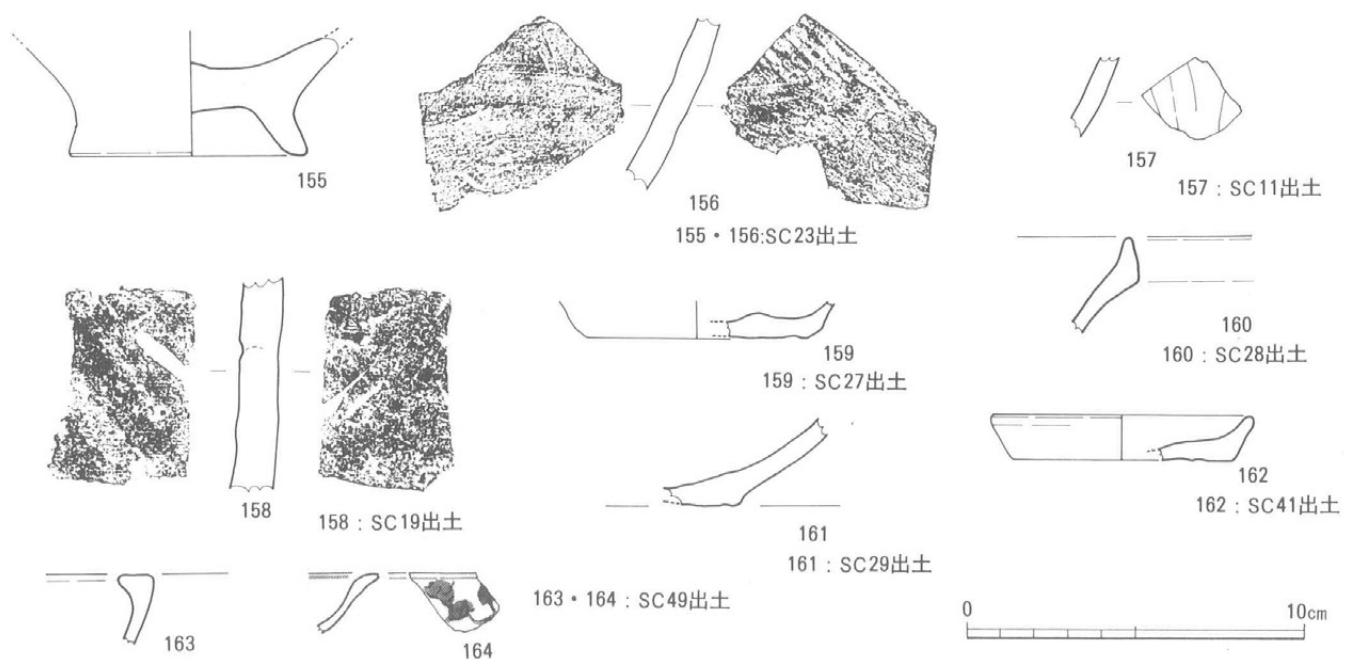


Fig. 34 土坑出土遺物実測図

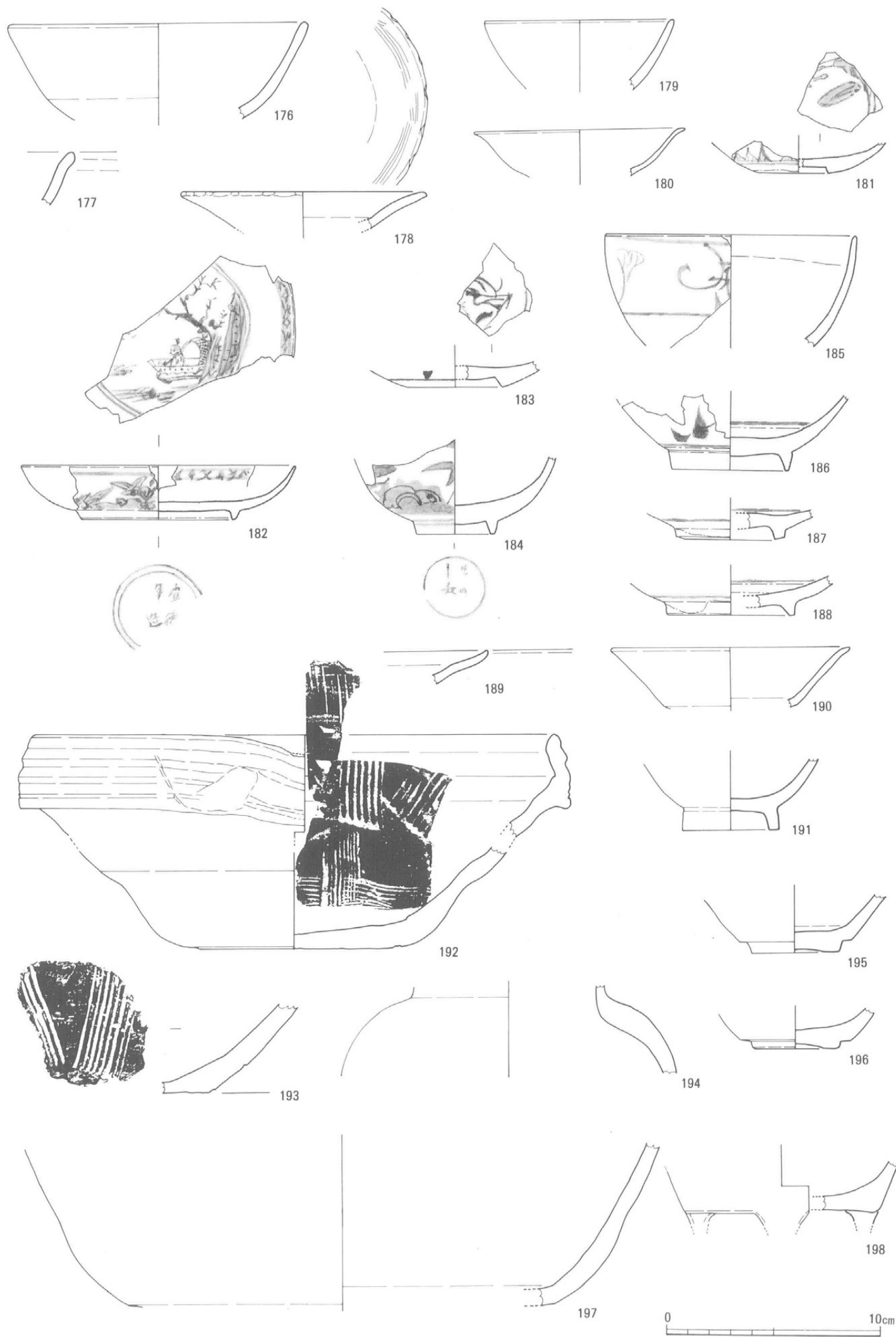


Fig. 35 C - I 区SC51出土遺物実測図 (1)

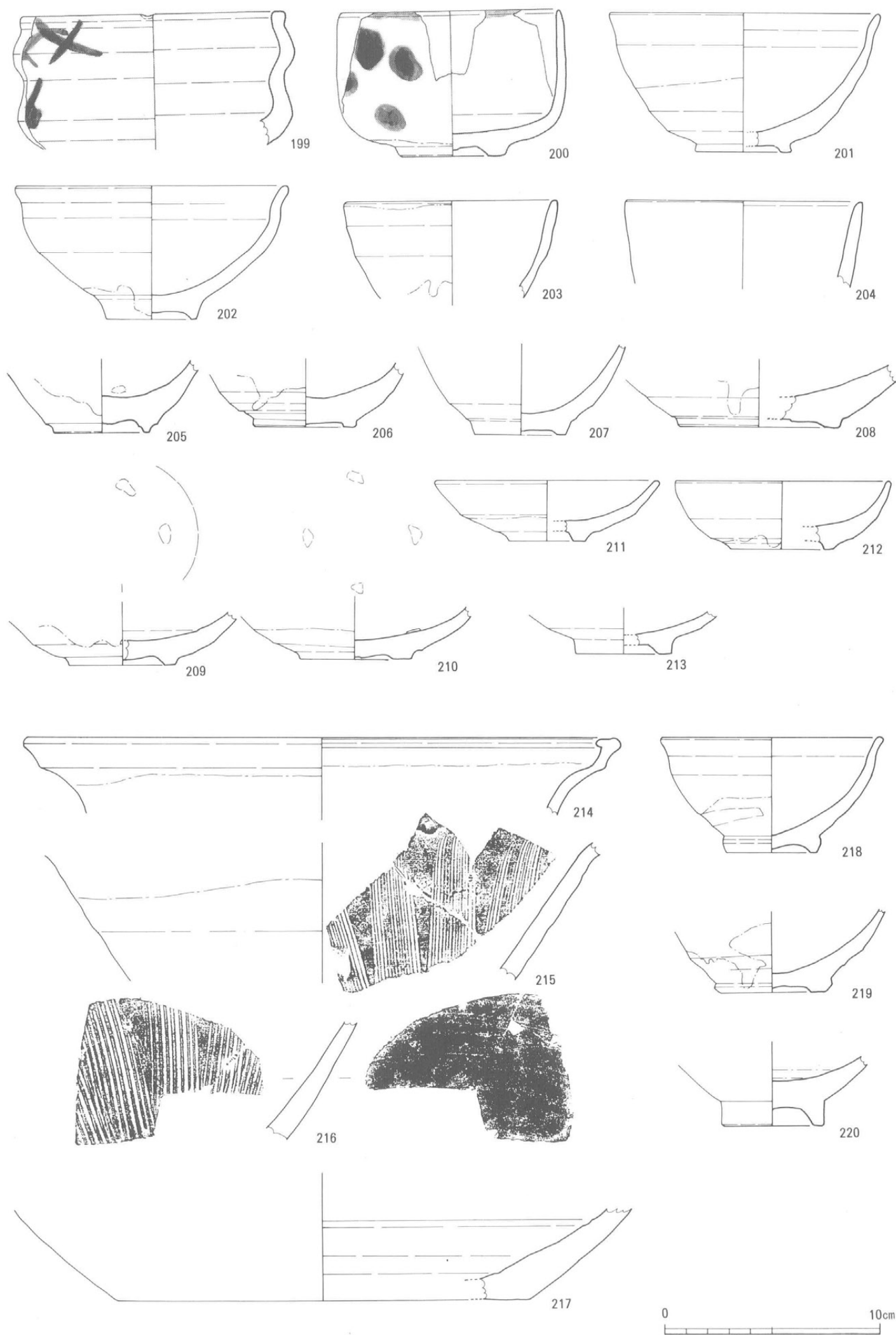


Fig. 36 C - I 区SC51出土遺物実測図 (2)



SC41 直径150cm・短径63cm、深さ15cmの楕円形プランで (Fig. 32)、土師器 (159) が出土している。

SC49 直径66cm、深さ11cmの円形プランで (Fig. 32)、青磁 (163) と染付 (164) が出土している。埋土は、II層 (暗褐色土) である。

SA 1 A-I区の北部で検出され、SA 2を切る竪穴状遺構である (Fig. 32)。東西2.9m、南北2.3mの隅丸方形を呈し、南側に張り出しをもつ。床面中央に一边60cmの隅丸方形土坑を伴うが、他にピットが1個検出されただけで、支柱の存在は認められない。床面には厚さ2

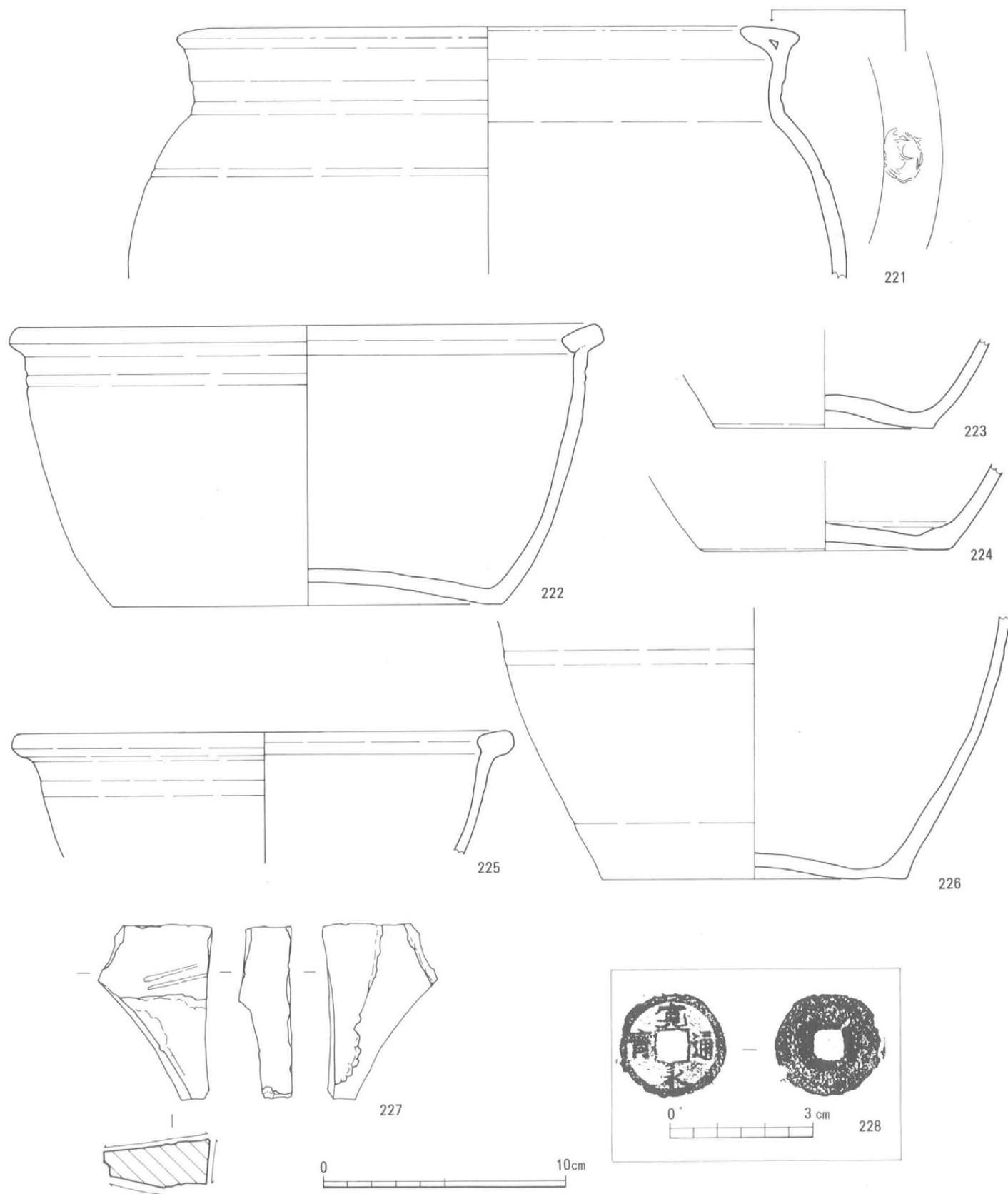


Fig. 37 C-I区SC51出土遺物実測図 (3)

cm程度の堅い層が形成され、貼床とみなされる。なお、先述したようにSB24の柱穴がまわりを取り囲むように配されており、この堅穴の上屋構造となる可能性があるが、断定はできない。埋土中から土師器（170～173）、青磁櫛描文碗（165）、白磁（166）、東播系須恵器（167～169）、鉄製品（174）が出土している。13世紀代に位置づけられるよう。

SA 2 も同様な堅穴状遺構であるが、その平面形や壁面は不明瞭である。SA 1 に切られる。土師器（174）が出土している。

[ C - I 区 ]

SC51 平面形は円形で、直径5 mを測り、深さは2 mを越える。中世の溝状遺構を切っており（Fig. 18）、中には礫、陶磁器などが大量に投げ込まれていた。出土遺構の内訳は、土師器2点、瓦質土器9点、陶器104点、青磁14点、白磁6点、染付32点、磁器3点、寛永通寶1

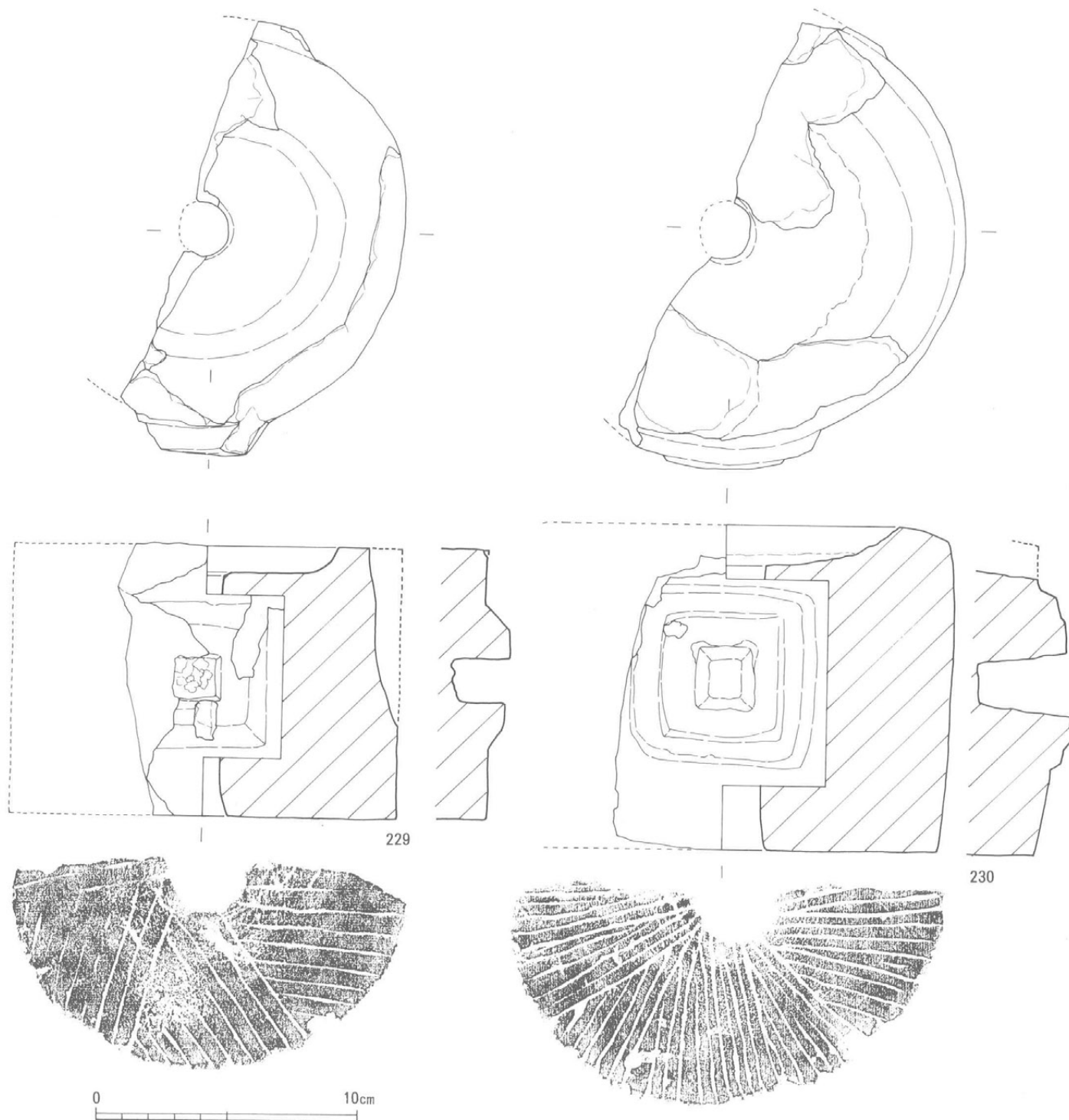


Fig. 38 C - I 区SC51出土遺物実測図 (4)

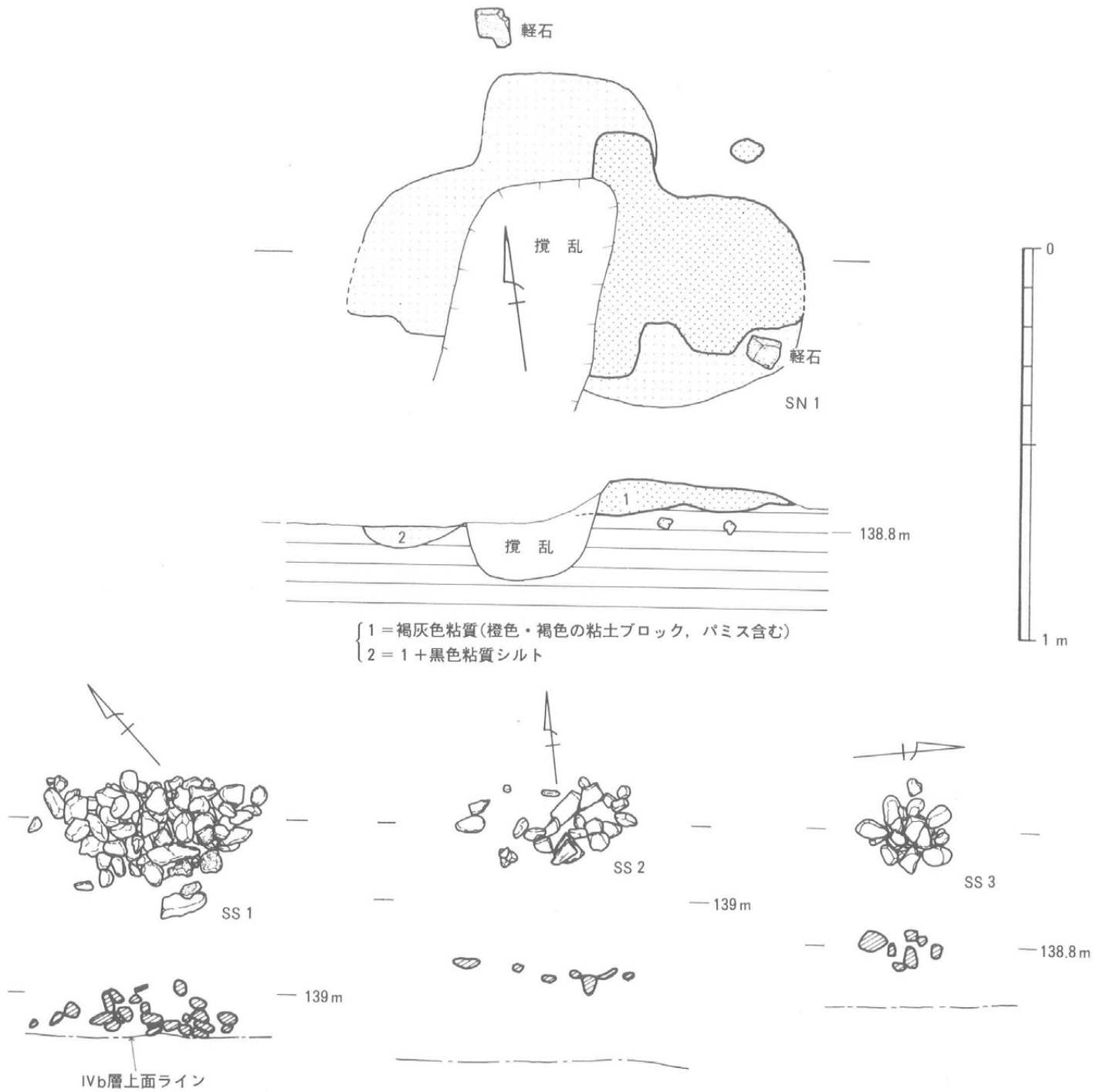


Fig. 39 その他の遺構実測図

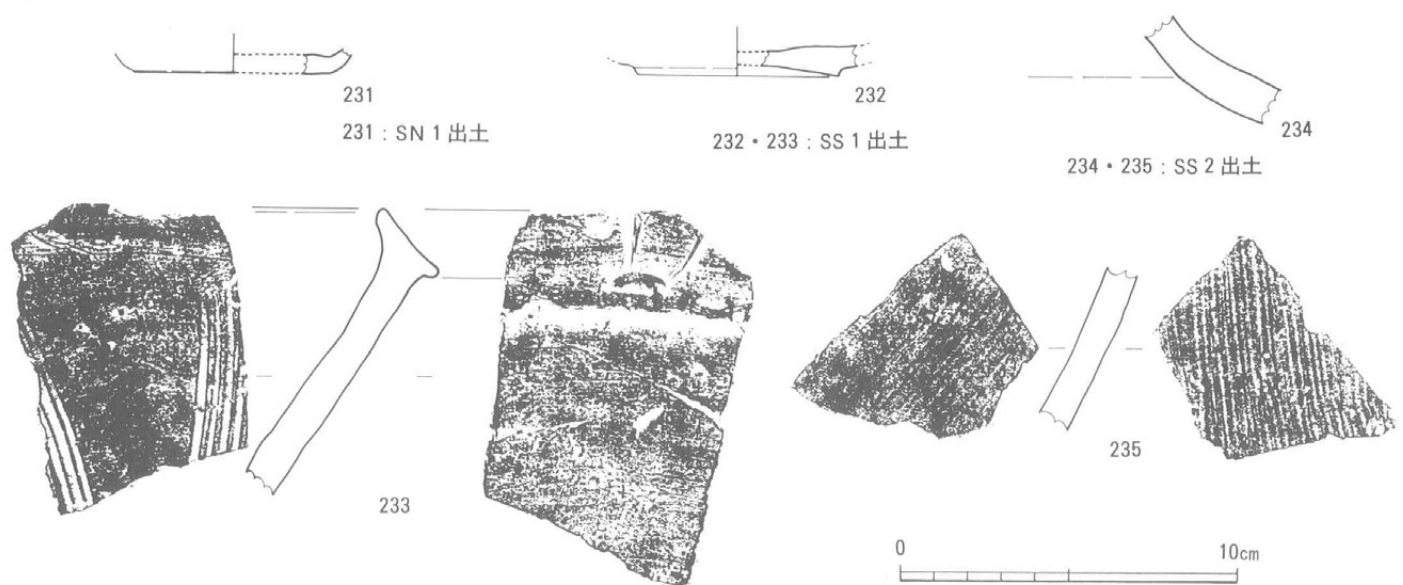


Fig. 40 その他の遺構出土遺物実測図

点、鉾滓7点、石臼2点である。陶磁器類の時期は15世紀から18世紀まで長い時代幅がある。出土した陶器碗の多くが茶器であり、石臼はいずれも上臼で、側部に四角い挽き手穴もつ茶臼(229,230)であることなどから、特殊な背景をもつ遺構と考えられる。

(5) その他の遺構

A-I区のIV a層掘り下げ時に、焼土遺構1基と集石遺構3基が検出されている。

SN1 東西1.2m、南北87cmの不定形の範囲に褐灰色の焼土と思われる粘質層が検出された(Fig. 39)。周囲に10cm程度の軽石礫が2点検出されているが、基礎ないし壁面構造をなすものではない。また、炭化物も見いだせなかった。土師器(231)が1点出土している。

SS1 平面規模が最も大きく、東西60cm、南北35cmの周囲に5～6cm程度の砂岩円礫で構成され(Fig. 39)、中に鉾滓15点、土師器(232)、備前焼すり鉢(233)を含む

SS2 東西45cm、南北20cmの範囲に、5～10cm程度の比較的扁平な礫と円礫で構成され、密度は疎である(Fig. 39)。中に鉾滓1点、陶器破片2点(234,235)を含む

SS3 径25cmの範囲に5～7cm程度の砂岩礫で構成され、集中度は強い(Fig. 39)。中に鉾滓2点、陶器破片1点を含む。

SS1, SS2, SS3ともに炭化物などは検出されていない。

掲載遺物一覧表

番号	地区	遺構	層	種別	特徴など	図録番号
1	A-I		IVb	縄文土器深鉢		330
2	B-I		IVb	縄文土器浅鉢	黒川式	259
3	A-I		IV	弥生土器甕	スス付着	220
4	B-I		IVb	石器		258
5	B			石器	チャート製	
6	B-II		IVb	石鏃		267
7	B-I		IV	弥生土器壺		256
8	B-IV	SD26	IV	弥生土器壺		108
9	B-I		IV	弥生土器鉢		251
10	A-I		IVa	白磁皿	口禿げ	116
11	A-I		IVa	白磁皿	口禿げ	232
12	A-I		I	白磁碗	口禿げ	231
13	A-I		I	白磁碗		188
14	A-I		IVa	白磁坏		178
15	B-3トレ		II	白磁坏		341
16	A-I		IVa	青磁碗	鎬連弁文	211
17	A-I		IVa	青磁碗	鎬連弁文	179
18	A-III		I	青磁碗		205
19	B-I		II	青磁碗	剣先連弁文	252
20	A-I		I	青磁碗		245
21	A		IV	青磁碗		335
22	A-I		IVa	青磁碗	鎬連弁文	222
23	A-II		II	染付皿	景德鎮	234
24	A-I		IVa	染付皿		116
25	A-II		II	染付皿	福建・広東系	234
26	A-I		I	染付碗		183
27	A-I		IVa	須恵質こね鉢	東播系	227
28	A-I		IVa	須恵質鉢	赤焼	221
29	A-I		IVa	瓦質甕	タタキ	230
30	A-I		IVa	瓦質甕	タタキ	239
31	A-II		IVa	須恵器甕		203
32	A-I		II	陶器甕	常滑焼	175
33	B-V		I	陶器すり鉢	備前焼	266
34	B-II		II	陶器壺	備前焼	269
35	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	122
36	A-I		IVa	土師器皿	へら切り	122
37	A-II		IVa	土師器皿	へら切り	240
38	A-I		IVa	土師器皿	へら切り	185

番号	地区	遺構	層	種別	特徴など	図録番号
39	A-I		IVa	土師器皿		215
40	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	224
41	A-I			土師器坏	へら切り	329
42	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	224
43	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	224
44	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	224
45	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	224
46	A-I		IVa	土師器皿	へら切り	230
47	A-I		IVa	土師器坏	へら切り	230
48	A		IV	土師器皿		335
49	A-II		I	土師器坏	糸切り	200
50	A		IVa	土師器坏		334
51	A-I		IVa	るつぼ?		229
52	A-I	硬化面	II	陶器鉢	薩摩焼	171
53	A-I		I	陶器鉢	薩摩焼	180
54	A-I		I	陶器碗	薩摩焼竹の節高台	244
55	C-I		II	陶器碗	絵唐津	356
56	B-II		II	土錘		265
57	A-II		IVa	鉄鏃		228
58	A-I		IVa	鉄釘		213
59	A-I		II	鉄釘		175
60	A-I		IVa	砥石		123
61	C-I		IVa	石臼		349
62	B-I	SF1	IV	須恵器甕	格子目タタキ	169
63	B-IV	SF1	IV	土師器坏		144
64	B-IV	SF1	IV	土師器坏		145
65	B-IV	SF1	IV	須恵質陶器		328
66	B-II	SF1	IV	土師器坏	へら切り	137
67	B-I	SF1	IV	土師器坏	へら切り	127
68	B-II	SF2	II	青磁碗		153
69	B-VI	SF2	II	白磁皿		160
70	B-II	SF2	II	白磁坏		154
71	B-VI	SF2	II	磁器碗		161
72	B-VI	SF2	II	染付碗	備前系蓋もの	161
73	B-VI	SF2	II	染付皿	薩摩焼	161
74	B-VI	SF2	II	染付皿		160
75	B-VI	SF2	II	磁器碗		156
76	B-VI	SF2	II	銅銭	寛永通寶	343

番号	地区	遺構	層	種別	特徴など	登録号
77	B-V	SF3	II	陶器すり鉢	備前焼	168
78	B-II	SF3	II	陶器	備前焼	167
79	A-II	SD1	IVa	青磁皿		3
80	A-II	SD1	IVa	土師器坏	完形	4
81	A-II	SD2	IVa	青磁碗	鎬蓮弁文	8
82	A-I	SD2	IVa	白磁		7
83	A-II	SD3	II	土師器	糸切り	36
84	A-II	SD2		陶器	備前焼	284
85	A-II	SD2	II	陶器		10
86	A-II	SD2	II	砥石		11
87	A-II	SD3	II	白磁皿		285
88	A-II	SD3	II	白磁碗		41
89	A-II	SD3	II	白磁皿		288
90	A-II	SD3	II	青磁碗	雷文帯	37
91	A-II	SD3	II	青磁	燭台?	23
92	A-II	SD3	II	青磁碗		28
93	A-II	SD3	II	染付碗		291
94	A-II	SD3	II	青花碗		13
95	A-II	SD3	II	青花碗	レンツ	25
96	A-II	SD3	II	砥石		21
97	A-II	SD3	II	陶器すり鉢	備前焼	292
98	A-II	SD3	II	陶器		27
99	A-II	SD3	II	陶器	褐釉	33
100	A-II	SD3	II	陶器すり鉢	備前焼	31
101	A-II	SD3	II	陶器	備前焼	17
102	A-II	SD3	II	陶器	備前焼	14
103	A-II	SD3	II	陶器	備前焼	286
104	A-II	SD3	II	陶器	備前焼	38
105	A-II	SD3	II	須恵器甕	タタキ	39
106	A-II	SD5	II	青磁碗		48
107	A-II	SD5	II	陶器	褐釉	45
108	A-II	SD5	II	土師器皿		42
109	A-II	SD5	II	土師器坏		43
110	A-II	SD5	II	瓦質羽釜		46
111	A-II	SD5	II	土師器坏		49
112	A-I	SD9	IVa	陶器すり鉢	備前焼	52
113	A-I	SD9	IVa	陶器		54
114	A-II	SD9	IVa	青磁皿		56
115	A-I	SD9	IVa	須恵質こね鉢	東播系	51
116	A-I	SD10	II	白磁皿		87

番号	地区	遺構	層	種別	特徴など	登録号
117	A-2トレ	SD10	II	青磁碗	玉縁端反	61
118	A-2トレ	SD10	II	青磁皿		60
119	A-I	SD10	II	青磁碗	スタンプ	74
120	A-2トレ	SD10	IVa	青磁碗		57
121	A-II	SD10	IVa	須恵質こね鉢	東播系	63
122	A-I	SD10	IVa	陶器	備前焼	70
123	A-I	SD10	II	陶器	備前焼	71
124	A-II	SD10	IVa	陶器	備前焼	86
125	A-I	SD10	II	陶器	備前焼	67
126	A-II	SD3	II	五輪塔空風輪	軽石製	22
127	C-I	SD17	IVa	五輪塔空風輪	軽石製	349
128	C-I	SD16	IVa	陶器	備前焼	344
129	C-I	SD17	IVa	須恵質陶器		347
130	C-I	SD17	IVa	須恵質陶器		359
131	C-I	SD18	IVa	白磁皿		354
132	C-I	SD18	II	青磁	陽刻文	357
133	C-I	SD19	II	白磁皿		355
134	C-3トレ	SD20	IVa	須恵質こね鉢	東播系	103
135	C-3トレ	SD20	IVa	陶器	備前焼	98
136	C-3トレ	SD20	IVa	砥石		100
137	B-2トレ	SD26	IVa	陶器甕	常滑焼	110
138	B-VI	SD26	IVa	陶器	備前焼	106
139	B-VI	SD26	IVa	青磁碗	雷文帯	109
140	B-II	SD27	IVa	青磁碗	鎬蓮弁文	111
141	B-II	SD27	IVa	石鈿	丸柄	111
142	B-II	SD29		青磁碗	鎬蓮弁文	340
143	B-II	SD29		染付碗		340
144	B-I		II	染付皿		129
145	B-VI	SD32	IVa	白磁坏		113
146	B-VI	SD32	IVa	陶器	備前焼	114
147	A-I	SB1	IVa	土師器坏		313
148	A-I	SB9	IVa	土師器坏	ヘラ切り	325
149	A-I	SB12	IVa	須恵質こね鉢	東播系	324
150	A-I	SB13	IVa	須恵質こね鉢	東播系	181
151	A-I	SB14	IVa	青磁碗	鎬蓮弁文	317
152	A-I	SB15	IVa	白磁皿	口禿げ	186
153	A-I	SB19	IVa	須恵質陶器		322
154	A-I	ピット	IVa	土師器坏		315
155	A-I	SC23	IVa	土師器坏	高台付	310
156	A-I	SC23	IVa	瓦質陶器		237

番号	地区	遺構	層	種別	特徴など	登録番号
157	A-I	SC11	IVa	青磁碗	鎬蓮弁文	302
158	A-I	SC19	IVa	陶器	備前焼	304
159	A-I	SC27	IVa	土師器坏	ヘラ切り	121
160	A-I	SC28	IVa	須恵質こね鉢	東播系	120
161	A-I	SC29	IVa	土師器坏		119
162	A-I	SC41	IVa	土師器皿	ヘラ切り	309
163	A-I	SC49	II	青磁		235
164	A-I	SC49	II	染付皿		235
165	A-I	SA1	IVa	青磁碗	櫛描文	276
166	A-I	SA1	IVa	白磁皿		276
167	A-I	SA1	IVa	須恵質こね鉢	東播系	277
168	A-I	SA1	IVa	須恵質こね鉢	東播系	275
169	A-I	SA1	IVa	陶器		273
170	A-I	SA1	IVa	土師器坏		278
171	A-I	SA1	IVa	土師器皿	ヘラ切り	282
172	A-I	SA1	IVa	土師器坏	ヘラ切り	274
173	A-I	SA1	IVa	土師器坏	ヘラ切り	118
174	A-I	SA1	IVa	鉄製品		280
175	A-I	SA1	IVa	土師器坏	ヘラ切り	118
176	C-I	SC51		青磁碗		361
177	C-I	SC51		陶器碗	鉄釉	378
178	C-I	SC51		青磁皿	稜花	361
179	C-I	SC51		青白磁碗		380
180	C-I	SC51		白磁皿		380
181	C-I	SC51		染付皿	景德鎮	361
182	C-I	SC51		染付皿		361
183	C-I	SC51		染付皿		379
184	C-I	SC51		染付碗	肥前系	353
185	C-I	SC51		染付碗	肥前系	361
186	C-I	SC51		染付碗		361
187	C-I	SC51		染付碗		361
188	C-I	SC51		染付碗		361
189	C-I	SC51		陶器皿		380
190	C-I	SC51		磁器皿	砂目づみ	380
191	C-I	SC51		磁器碗	砂目づみ	361
192	C-I	SC51		陶器すり鉢	備前焼	370
193	C-I	SC51		陶器すり鉢	備前焼	370
194	C-I	SC51		陶器壺	備前焼	378
195	C-I	SC51		天目碗	瀬戸・美濃系	372
196	C-I	SC51		天目碗	瀬戸・美濃系	372

番号	地区	遺構	層	種別	特徴など	登録番号
197	C-I	SC51		土師質鍋		361
198	C-I	SC51		土師質香炉		375
199	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	361
200	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	361
201	C-I	SC51		陶器碗		372
202	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	371
203	C-I	SC51		陶器碗	皮クジラ	380
204	C-I	SC51		陶器碗		372
205	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	372
206	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	372
207	C-I	SC51		陶器碗		372
208	C-I	SC51		陶器	唐津系	371
209	C-I	SC51		陶器皿	胎土目づみ	372
210	C-I	SC51		陶器皿	胎土目づみ	372
211	C-I	SC51		陶器皿	唐津系	372
212	C-I	SC51		陶器皿	唐津系	361
213	C-I	SC51		陶器碗		372
214	C-I	SC51		陶器すり鉢	唐津系	378
215	C-I	SC51		陶器すり鉢	唐津系	370
216	C-I	SC51		陶器すり鉢	唐津系	370
217	C-I	SC51		陶器甕	備前焼	378
218	C-I	SC51		陶器碗		372
219	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	361
220	C-I	SC51		陶器碗	唐津系	352
221	C-I	SC51		陶器甕	貝目あと	381
222	C-I	SC51		陶器鉢	薩摩系	373
223	C-I	SC51		陶器	薩摩系	381
224	C-I	SC51		陶器	薩摩系	376
225	C-I	SC51		陶器鉢	薩摩系	371
226	C-I	SC51		陶器甕	薩摩系	371
227	C-I	SC51		砥石		377
228	C-I	SC51		銅銭	寛永通寶「新寛永」	362
229	C-I	SC51		石臼	茶臼	351
230	C-I	SC51		石臼	茶臼	367
231	A-I	SN1		土師器皿	ヘラ切り	327
232	A-I	SS1		土師器坏	糸切り	
233	A-I	SS1		陶器すり鉢	常滑焼	293
234	A-I	SS2		陶器甕		296
235	A-I	SS2		陶器甕		235

## V まとめ

今回の調査は、高木地区における初めての発掘調査であったが、道路遺構、溝状遺構、建物跡などの歴史時代の遺構を広範囲にわたってとらえることができたばかりでなく、それらの成果は当市の古代・中世史を考える上で重要な資料になるものと思われた。以下に歴史時代遺構の変遷を概観した上で、特記すべき遺構・遺物について個別に検討し、まとめにかえたい。

### 1. 歴史時代遺構の変遷について

前章で、遺構内堆積土、遺構間の切り合い関係、遺構内出土遺物によって各遺構の時期を推定したが、ここではそれらを総合し、大きく5段階に分けた。なお、建物跡については柱穴内出土遺物や主軸方向などを勘案して組み込んである。以下、各期ごとに概要を述べよう。

#### [I 期] (Fig. 41)

主軸をN-40° 30'-Eの方向にとり直線的に延びる道路遺構SF 1が形成・通行される段階である。一方、A区においては、高台付き椀の出土した土坑SC23と竪穴状遺構SA 1に切られるSA 2をこの段階とした。また、掘立柱建物は主軸方向①グループのものをこの段階に位置づけたが、道路遺構SF 1の主軸方向とは若干ずれがあり、次の段階のものに近いことから、II期に含まれる可能性もある。I期の年代は、SF 1硬化面接着の出土遺物によって9世紀後半から10世紀代と考えている。

#### [II 期] (Fig. 42)

A区において、本格的な集落が営まれる段階である。溝状遺構の埋土は基本層序のIV a層に該当する1 a類(黒色土)のものをこの段階とした。道路遺構SF 1は溝状遺構SD25に切られていることから、この段階には廃絶していたものと思われる。A区・C区では、溝状遺構SD 1・6・16・17などによって直線的あるいは弧状に区画された北側の空間に掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑などが配置されている。掘立柱建物は主軸方向②・③・④グループのものをこの時期に位置づけた。なお建物群はその主軸方向に幅が認められることや建物自体の重なり合いがあることから、さらに2～3段階に細分できよう。II期の年代は13世紀代を中心とする。

#### [III 期] (Fig. 43)

A区とB区において磁北方向の広域的な溝状遺構(SD12, SD26, SD27など)が掘られ、A区ではSD 1のコースを踏襲しながらさらに西へ延びるSD 2と北走するSD10に囲まれた空間の北東隅に集落が営まれる。また、その西側に集石遺構もつくられている。さらに、B区ではI期の道路遺構SF 1とは全く主軸方向の異なるSF 3が出現する。溝状遺構の埋土は、文明軽石が降下した15世紀後半段階においてまだ完全に埋没していなかったということを示す1 b類(黒色土の上に文明軽石が堆積)のものをこの段階としたが、SD27のように文明軽石が遺構の最上部に薄く堆積しているだけのものは前段階にさかのぼる可能性もある。掘立柱建物は主軸方向⑤・⑥グループのものをこの時期に位置づけたが、その主軸方向に幅が認められることや建物自体の重なり合いがあることから、さらに2段に細分できよう。III期の年代は、14世紀後半から15世紀前半までとしておく。



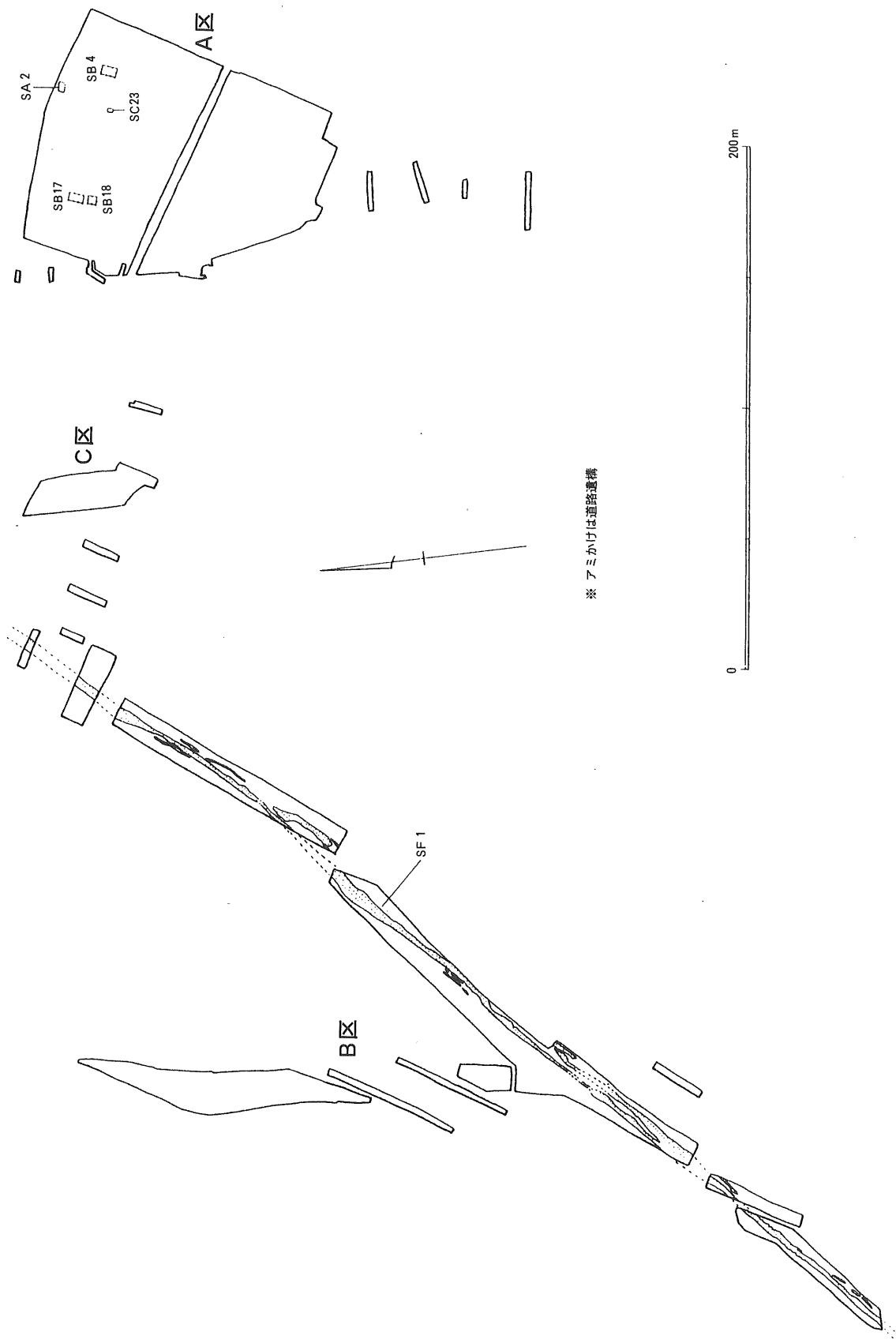


Fig. 41 I期 遺構配置図

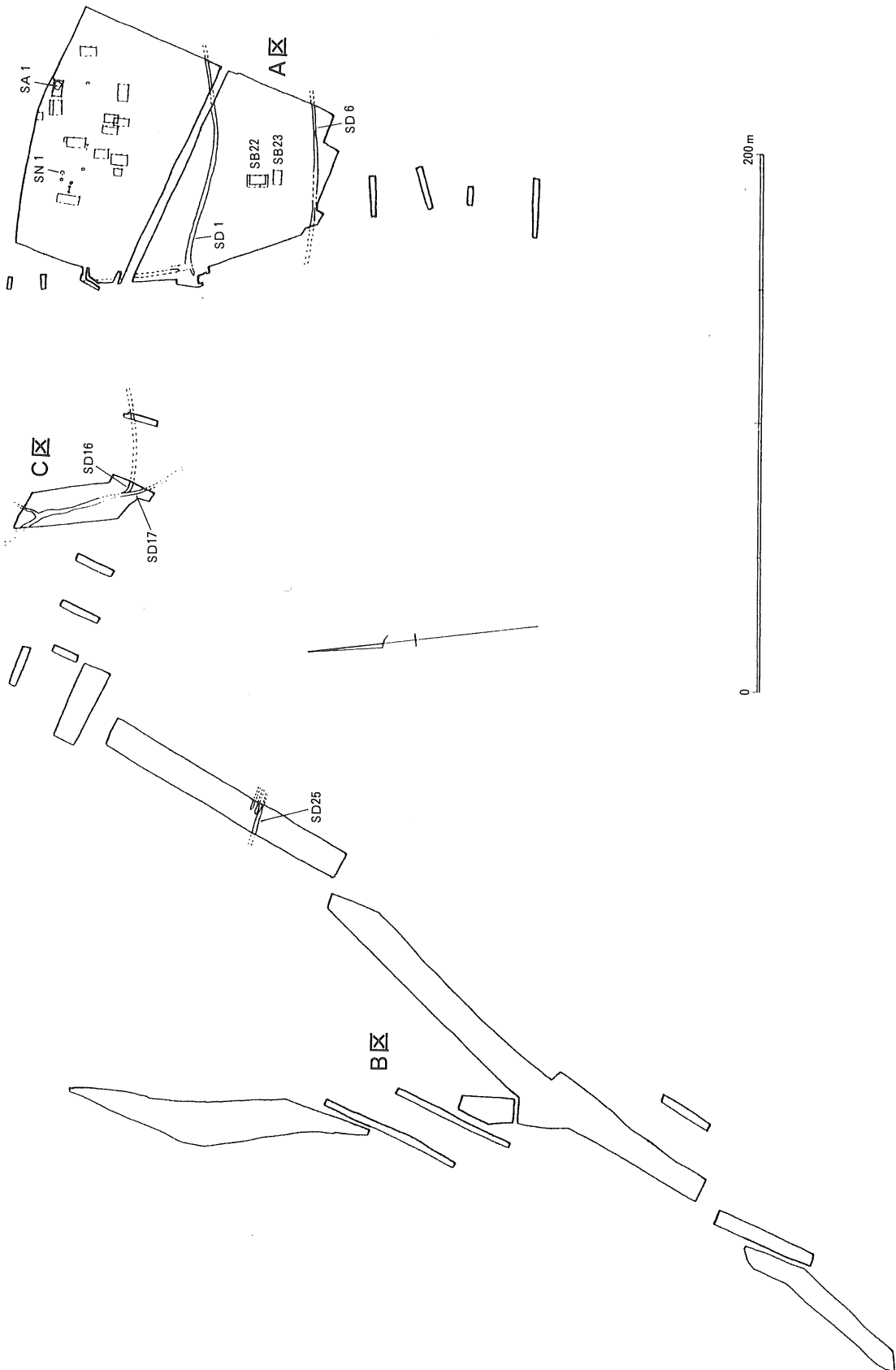


Fig. 42 II期 遺構配置図

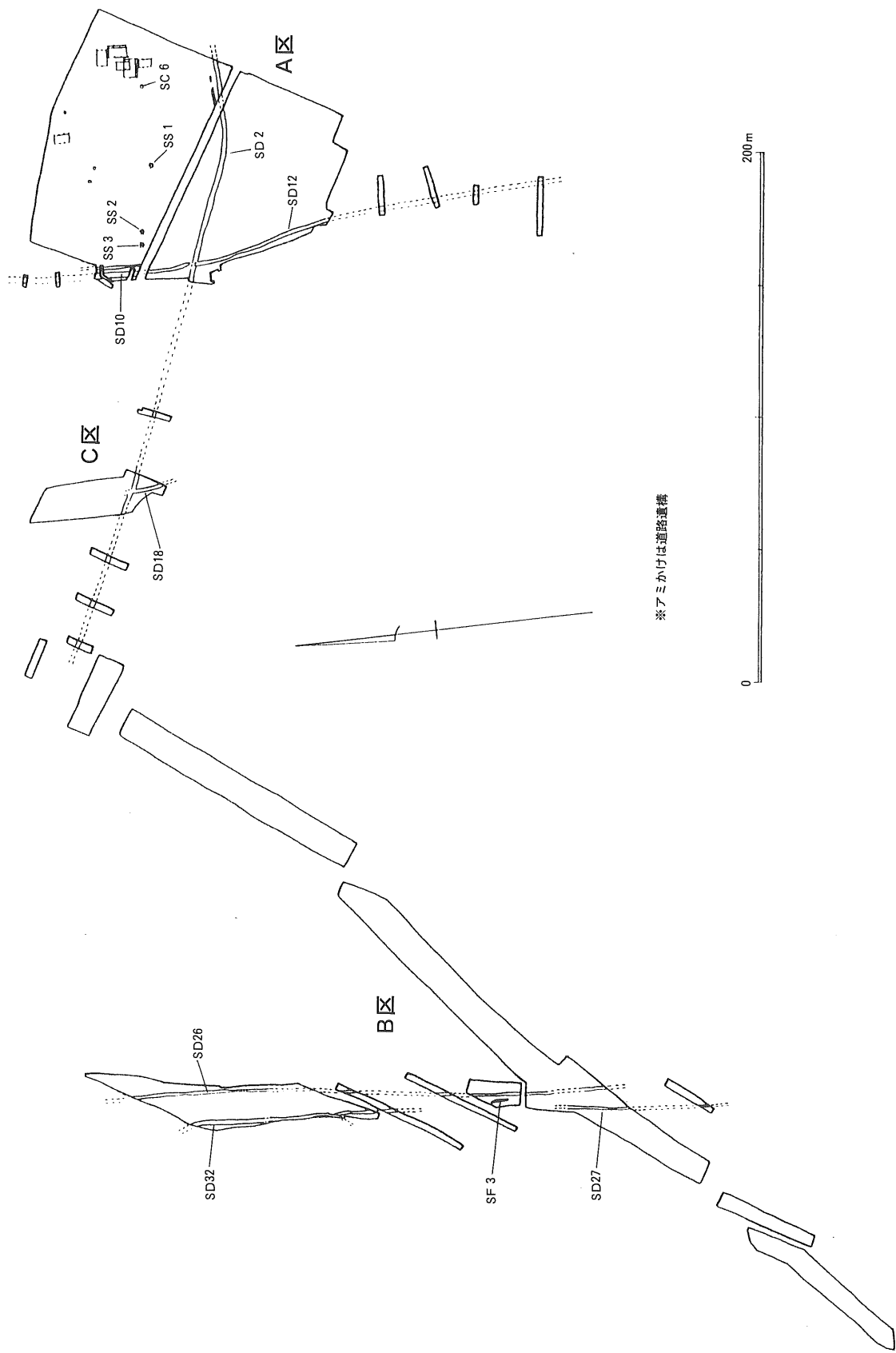


Fig. 43 Ⅲ期 遺構配置図

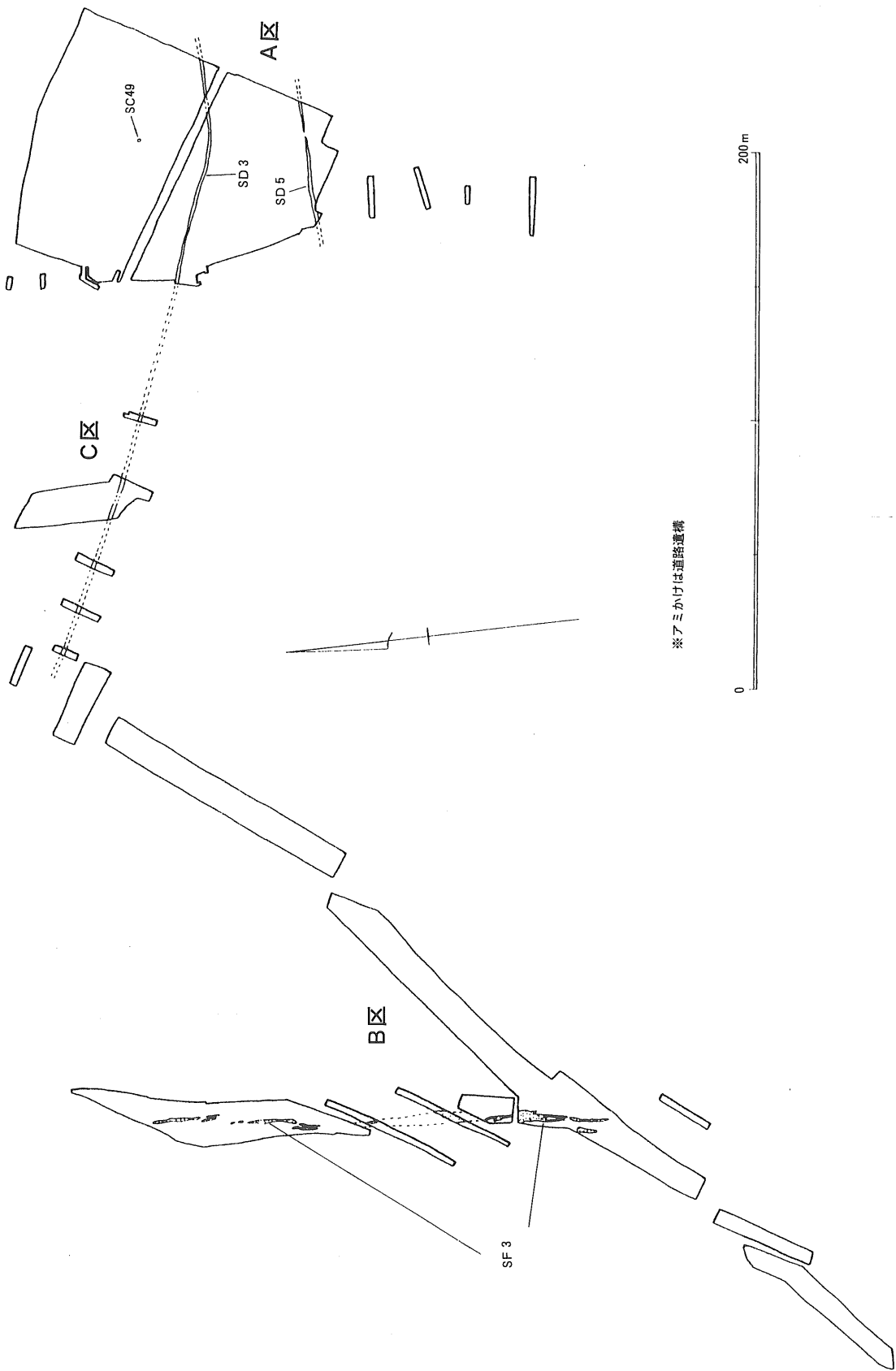


Fig. 44 IV期 遺構配置図

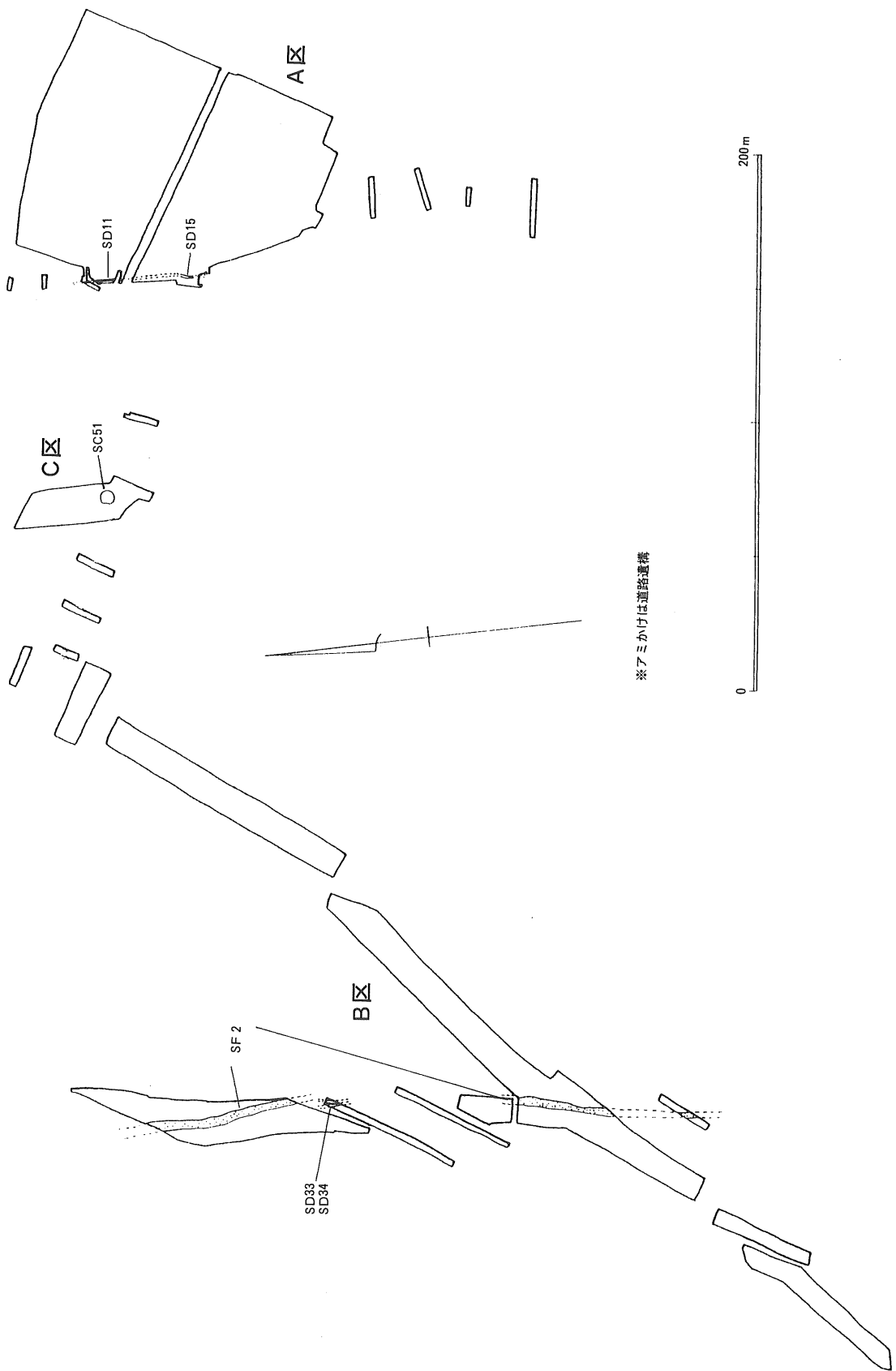


Fig. 45 V期 遺構配置図

#### [IV 期] (Fig. 44)

B区では、道路遺構SF3が顕著となる。一方、A区では、掘立柱建物が全く認められなくなり、土坑SC49だけとなる。溝状遺構の埋土は2類（灰褐色系土）のものがこの段階であり、SD1・2のコースを踏襲したSD3とさらにその南のSD5が該当する。IV期の年代は、16世紀代である。

#### [V 期] (Fig. 45)

B区では、道路遺構SF2がSF3を切りながら、ほぼ同じ方向に走行する。また、A区では小規模な溝状遺構が存在するだけとなり、前段階までの生活要素が全く認められなくなる。なお、C区においては、土坑SC51内に茶器や茶臼などの茶にかかわる道具が大量に廃棄されており、特殊な背景が想定されるが、この遺構の本来の性格は井戸かもしれない。V期の年代は、17世紀代であるが、SF2は大正時代まで通行されていたようである。

### 2. 古代道路遺構について

当遺跡で検出された平安時代の道路遺構SF1は、直接的な通行の結果によって形成された幅30cm程度の硬化帯がゆるい蛇行をみせながら幾重にも重なり合っているものである。しかし、調査区域内だけで約420mにわたって直線的に走行することから単なる踏み分け道とは考えられず、計画的かつ広域的な道路と想定され、公的施設間を結ぶ連絡道とも考えられる。

近年、官道を中心とした古代道路跡の発掘調査例が増え、国衙・郡衙、寺院、駅家などの公的機関の周辺における道路遺構の様相が明らかにされつつある。九州では、筑前国・筑後国・肥前国の広域官道が次々と検出されているが、幅10m前後で、両脇に側溝を伴うという<sup>1)</sup>太宰府周辺で検出されている官道に対し、本遺構のSF1は、施工技術・規模ともに貧弱である。太宰府などから離れた地方官道や官道レベルに達しない道路遺構の実態は、公的施設の位置比定作業の立ち遅れや調査時における遺構把握が困難であることから今のところ不明といわざるをえない。したがって、SF1を南九州における地方官道の実態を示すものとしてとらえるべきなのかそれとも別のレベルの道路と考えるべきなのかは現段階では結論を出せない。当市には「延喜式」に記載された嶋津駅が設置されていたとされるが、今後、そのような施設の位置を明確にするとともに、微地形や古代地名なども含めて道筋を考察していく必要がある。

最近、永山修一氏は日向国府と大隅国府間の官道を再検討しており、救麻駅～嶋津駅間の路線について、「平家物語」に記載された俊寛の配流ルートに基づいて想定された従来の説（熊野～清武～山之口経由）では迂回しすぎるとし、宮崎平野の内陸部を通る現在の国道10号線に近いコースを提示している<sup>2)</sup>。都城盆地北東部に位置する並木添遺跡のSF1は、氏の説（ルート）に符合する道路遺構の一例として注目される。

### 3. 石鏝について

今回の調査で、溝状遺構SD27内の文明軽石層（15世紀後半）の下層から1点の石鏝が出土した。日向国においては、西都市周辺で採集品3例、発掘品1例が知られている<sup>3)</sup>だけで、国衙の置かれていた地域以外での出土は初例である。本資料は亀田博氏の分類<sup>4)</sup>による丸靱F類にあたるものの、潜り穴の方向は氏の細分類のどれにも当てはまらない。また、黒色の石材を

利用しているが、亀田氏によれば雑石腰帯は官給品ではなく町で売られていたとされ、着用者も一部官人に限定されないという。所属年代については、奈良時代末期から平安時代を中心に用いられていたとされるが、当遺跡の出土地点であるSD27は10世紀代を下限とする道路遺構SF1を切っており、同溝が13～14世紀に位置づけられることから、伝世や混入などの要因が考えられよう。ちなみに出土状況が最も新しい例として島根県波来浜遺跡の鎌倉～室町時代の火葬墓がある〔島根県江津市教育委員会『波来浜遺跡発掘調査報告書』〕。

#### 4. 中世集落跡について

A区において、掘立柱建物を中心とした本格的な集落が営まれたのは、文明軽石降下（15世紀後半）以前、Ⅱ期とⅢ期の段階である。

掘立柱建物の平面構造は、プランを確実にとらえることのできた23棟中、2間×3間のものが8棟、1間×3間のものが6棟であった。庇を付帯するものについても5棟中4棟の身屋の構造が2間×3間であり、Ⅱ期・Ⅲ期両段階を通じておおむね2間×3間ないし1間×3間を間取りの基調とすることがうかがえる。また、建物面積の平均値は、5坪前後のものが10棟、7坪前後のものが8棟と、全体の約80%を占めており、10坪前後の庇付建物は3棟しかない。さらに、建物の組み合わせについてみると、Ⅱ期のSD1とSD6に囲まれた空間に位置するSB22とSB23、Ⅲ期のSD2の北東側に位置するSB3とSB5、SB6とSB7は同時期に近接して建てられており、SB22・23、SB6・7については「L」字方の建物配置をとる。これらの10坪前後の庇を付帯する主屋的建物と5坪前後の付属屋的建物とのセット関係は当該期の集落構成単位の一例として注目されよう。ところで、松原地区第Ⅰ遺跡（都城市内郡元町）の13世紀後半段階には、大溝（堀幅4m）をめぐらせた区画内に15坪程度の庇付き建物と5～7坪程度の建物群で構成された屋敷が営まれており、在地領主の館跡と推定されている<sup>5)</sup>。最大建物の規模を比較したときに、並木添遺跡の建物群はそれより一回り規模が小さいことから、集落を構成する階層としては、主屋建物+付属建物の複合棟に有力農民層が、それ以外の5～7坪前後の単独棟については下級農民層や下人クラスの居住が想定されるのではないだろうか。

集落の変遷を見ると、Ⅱ期では、A-I区全域とA-II区に建物が配置されていたのに対し、Ⅲ期には、それまでの配置が変わり、A-I区東側だけに建物が配置され、A-I区西側には小鍛冶に伴うものと思われる集石遺構や土坑群がつけられている。このような空間利用の変化は、後で触れる溝状遺構の規模・性格の変化にも対応しており、Ⅱ期の集落がまったくそのままⅢ期の集落へと受け継がれたものでないことを示している。全体的に見ると、13世紀に当地の居住が本格化し、14世紀にはそれが断絶し、再び14世紀後半から15世紀前半に、集落形成が行われるが、15世紀後半にはそれも突然廃絶してしまったようである。

つぎに、これらの建物群の周囲を走行する溝状遺構について見てみるが、これらの溝の大半は、用水路としては疑問があり、むしろ土地の区画を意図しているものと考えられる。

A区を東西に弧状走行し、切り合いながら重なりあうSD1、SD2、SD3は、断面観察の結果、Ⅱ期のSD1が埋没しかけた段階に、Ⅲ期のSD2が掘られており、SD2が文明軽石などの堆積によって埋没しかけた段階に、Ⅳ期のSD3が掘られている。SD2とSD3は底面に

掘立柱建物の時期別規模一覧表

\*ゴチックは庇付き建物 \*---はセット関係

時 期		II 期				III 期	
主軸方向 面積		①	②	③	④	⑤	⑥
3 坪	8～9 m <sup>2</sup>			SB20			
	11～12 m <sup>2</sup>	SB18					
5 坪	15～17 m <sup>2</sup>		SB10 --- SB11	SB9 SB23		SB7	SB5
	17～20 m <sup>2</sup>	SB4 SB17			SB14		SB12
7 坪	21～23 m <sup>2</sup>		SB24		SB1	SB2	
	24～27 m <sup>2</sup>		SB8 SB16	SB15 SB19 SB13			
10坪	31～38 m <sup>2</sup>			SB22		SB6	SB3

硬化面が形成され、道路としての機能が想定されるが、これらの溝が同じラインに掘られ続けたことはII期段階の地割りが後々まで生きていたことを示すものとして注目される。

一方、A区とC区の建物群を曲線的に囲みこむようなII期の溝に対して、III期は建物群の近辺に限らず、広域のかつ直線的な溝がつくられている。ほぼ磁北方向に走行するA区のSD10、SD12やB区のSD26、SD27、SD32などは総延長100mを越えており、大規模な土木工事が推察される。その背景としては、新しい有力開発領主の出現などが想定されよう。いずれにしても、これらの溝は屋敷地や耕作地も含んだ広い範囲を区画している可能性があり、そのような単位が何を意味するのか<sup>6)</sup> 今後検討していくべき課題であろう。

註

- 1) 山村信榮 1990「古代大宰府の官道」『都府楼』古都大宰府を守る会
- 2) 永山修一 1992「日向国府－大隅国府間の延喜官道の再検討」第5回人類史研究会発表要旨
- 3) 宮崎県文化課長津宗重氏教示
- 4) 亀田 博 1983「銚帯と石帯－出土銚・石銚の研究ノート」『関西大学考古学論叢』
- 5) 矢部喜多夫 1989「まとめ」『松原地区第I遺跡』都城市文化財調査報告書第7集
- 6) 都城市内の他の中世遺跡においてもこのような溝状遺構は普遍的に認められるものであり、あるいは中世の徴税単位とされる「在家」という概念の検討材料になり得るかもしれない。





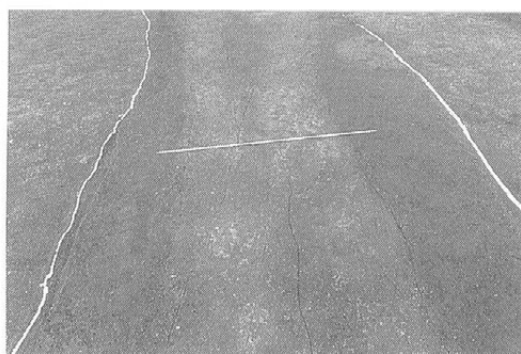
B区 道路遺構 (SF 1・SF 2・SF 3) 全景



B-I区 道路遺構(SF 1)調査状況



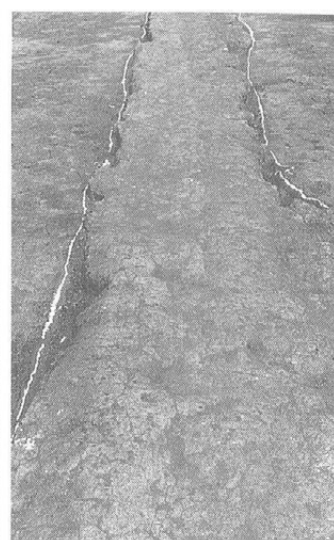
B-III・IV区 道路遺構(SF 1)最上硬化面



B-IV区 道路遺構(SF 1)硬化面



B-IV区 道路遺構(SF 1)全景



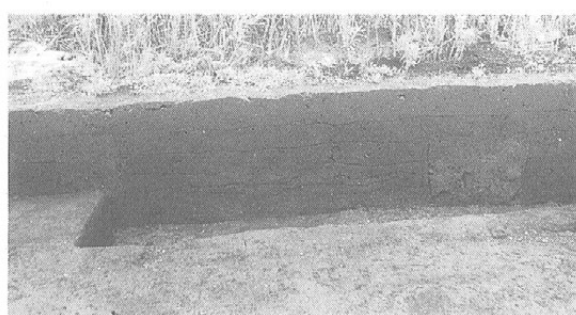
B-II区 道路遺構(SF 1)硬化面



B-III区 道路遺構(SF 1)最下硬化面



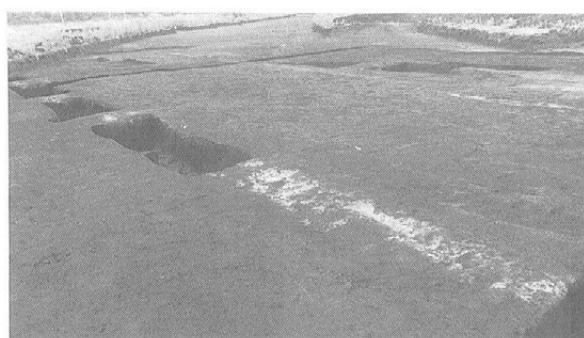
B-IV区 道路遺構(SF 1)最下硬化面



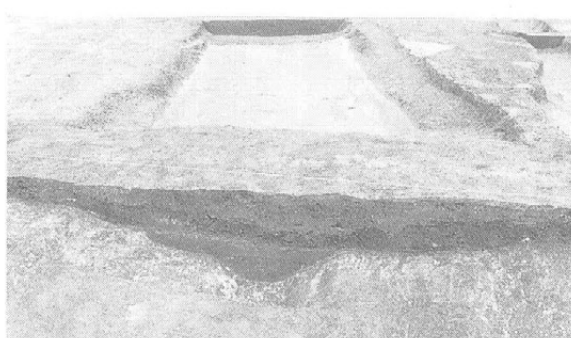
B-I区 道路遺構(SF 1)断面



B-IV区 道路遺構(SF 1)断面



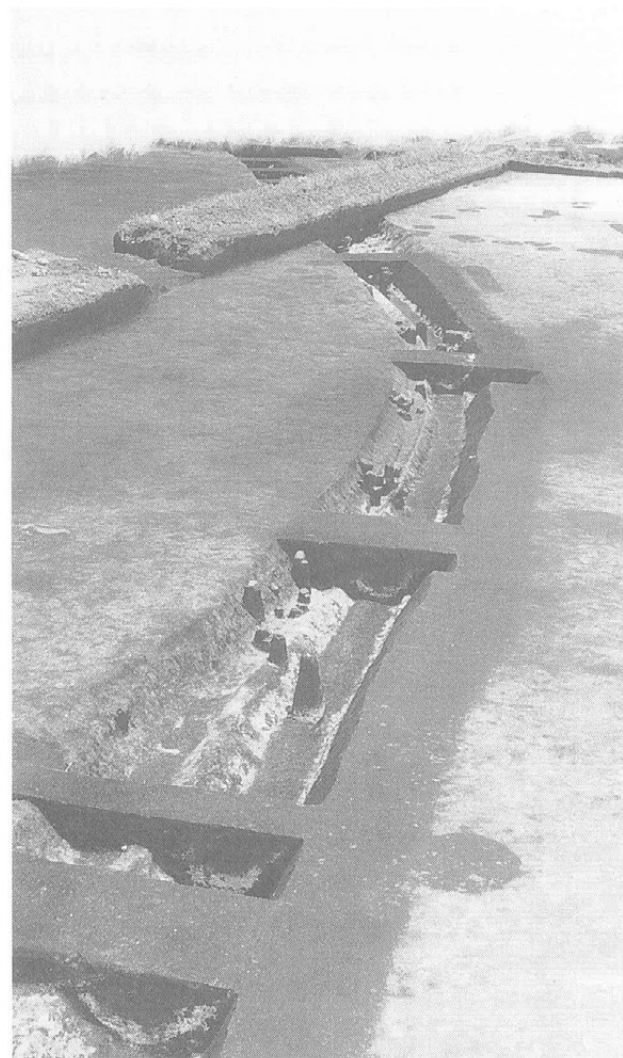
B-II区 道路遺構(SF 3)と溝状遺構



B-VI区 道路遺構(SF 2)



A-I区 溝状遺構  
(左からSD 3, SD 2, SD 1)



A-I・II区 溝状遺構  
(SD 1, SD 2, SD 3)



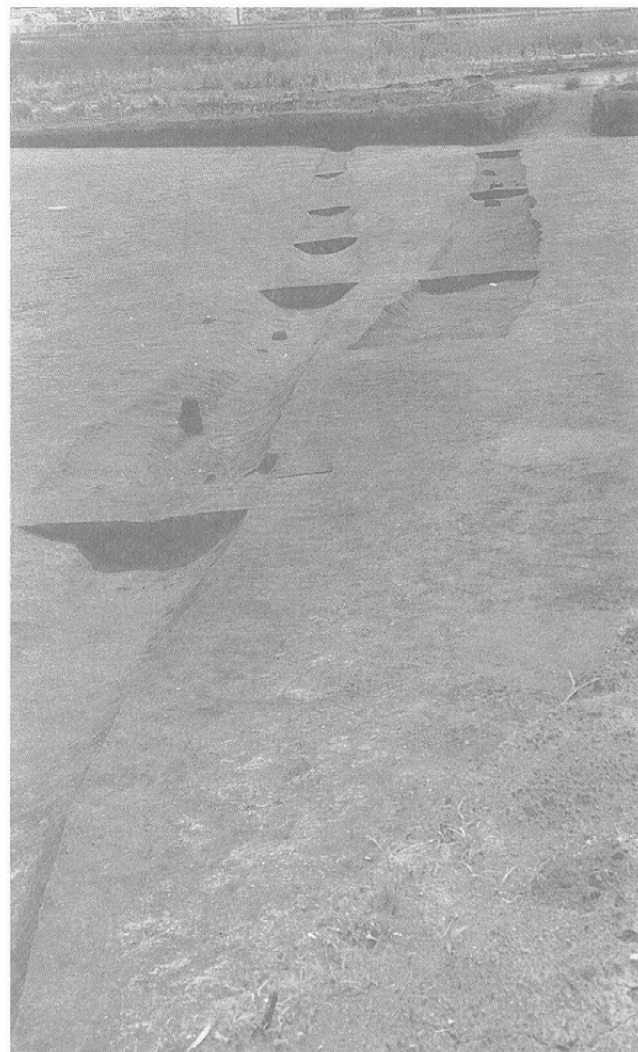
A-I区 溝状遺構の切り合い  
(左からSD 3, SD 2, SD 1)



A-I区 溝状遺構  
(左からSD11, SD9, SD10, SD7)



A-II区 溝状遺構 (SD12)



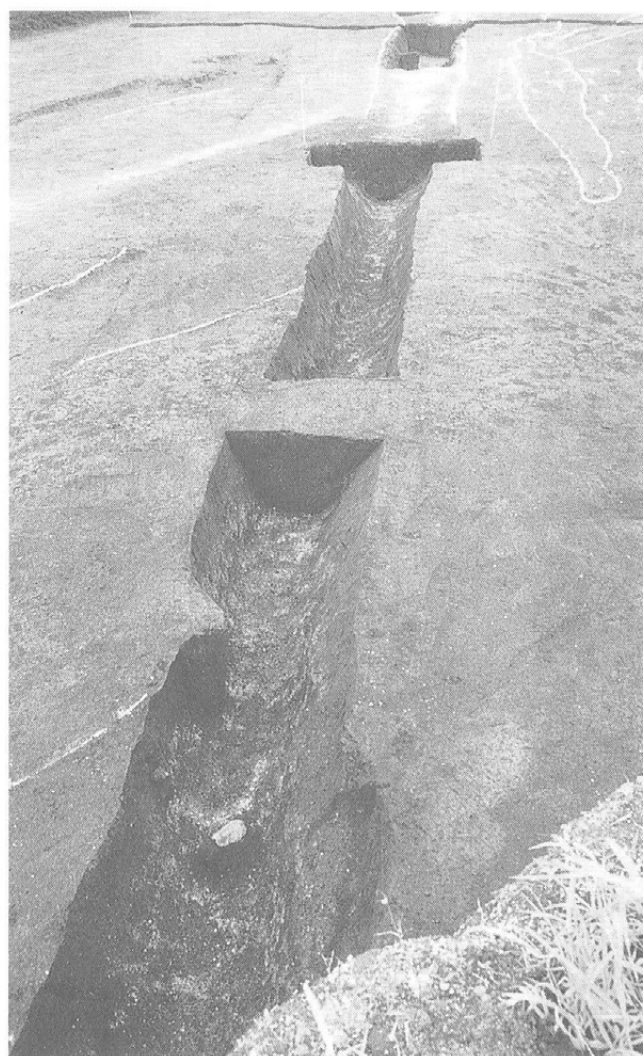
A-II区 溝状遺構  
(左はSD5, 右はSD6)



C - I 区 溝状遺構 (SD16, SD17)



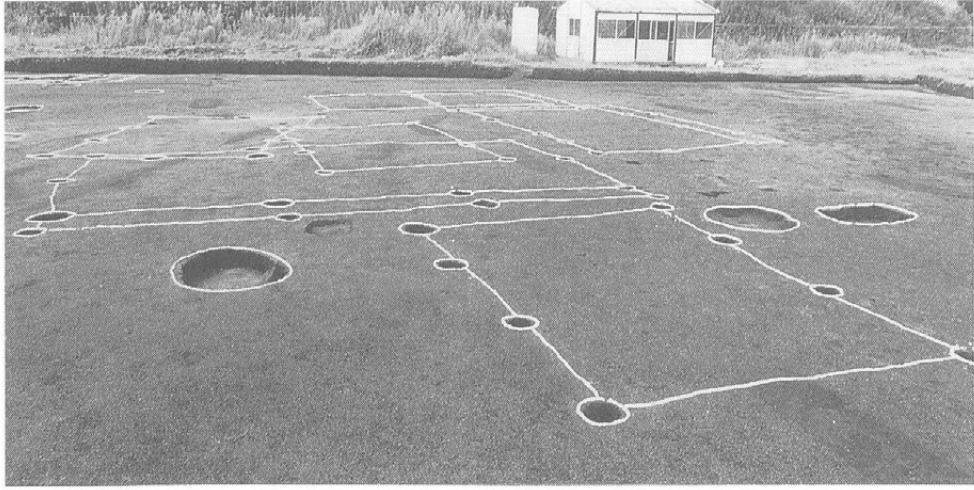
B - VI 区 溝状遺構 (SD32)



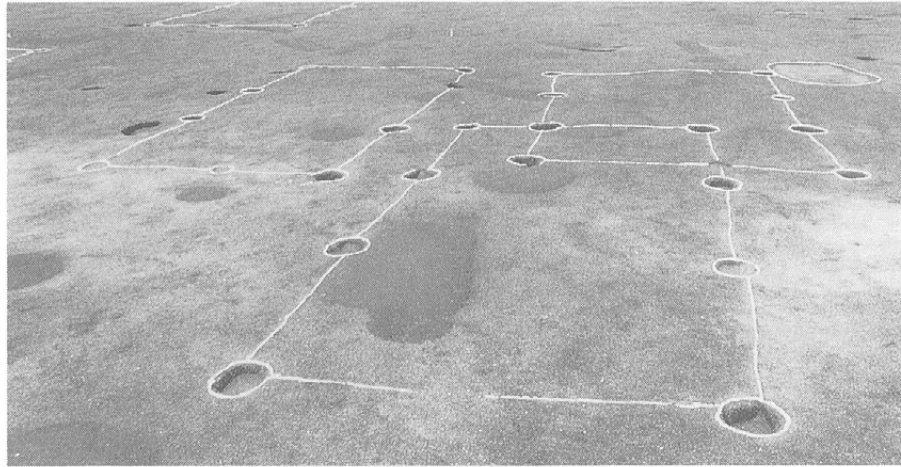
B - II 区 溝状遺構 (SD27)



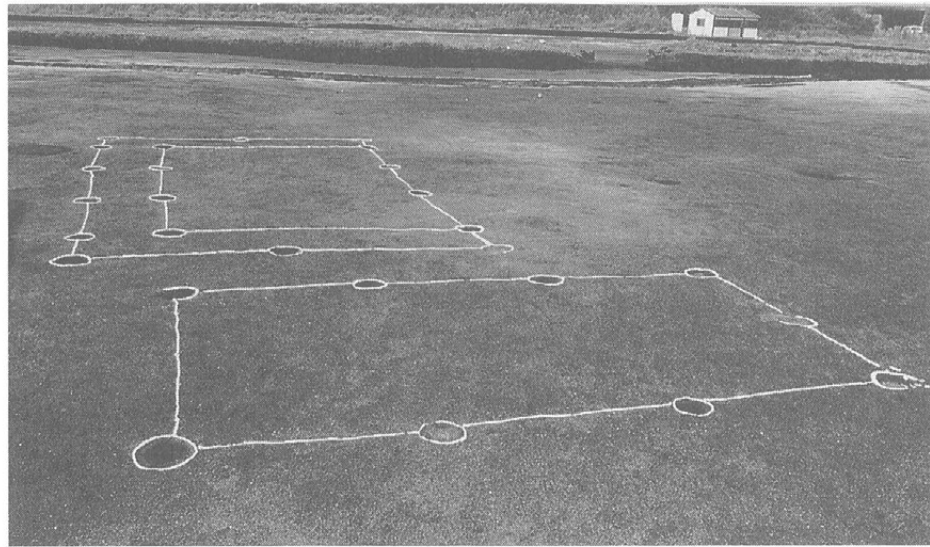
B - II 区 SD27石鈔出土状況



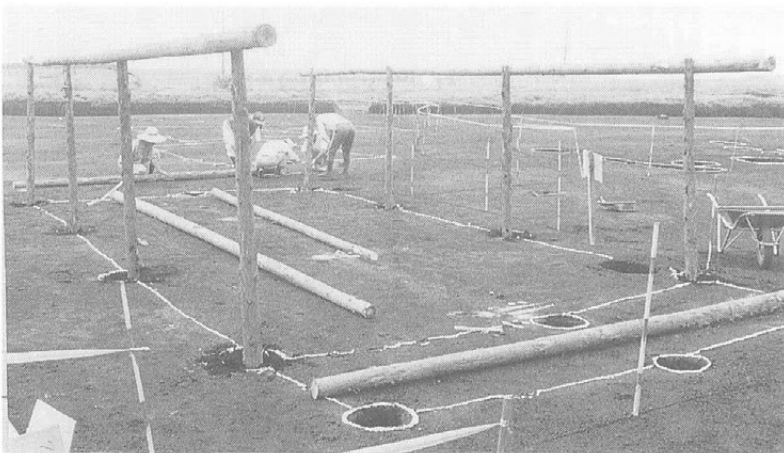
A-I区 掘立柱建物跡(SB1,SB2,SB3,SB4,SB5,SB6,SB7)



A-I区 掘立柱建物跡 (SB9, SB10, SB11)



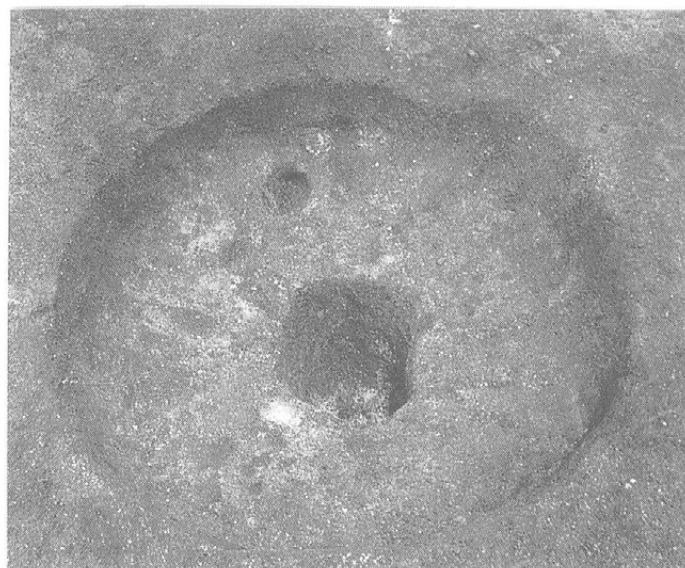
A-II区 掘立柱建物跡 (SB22, SB23)



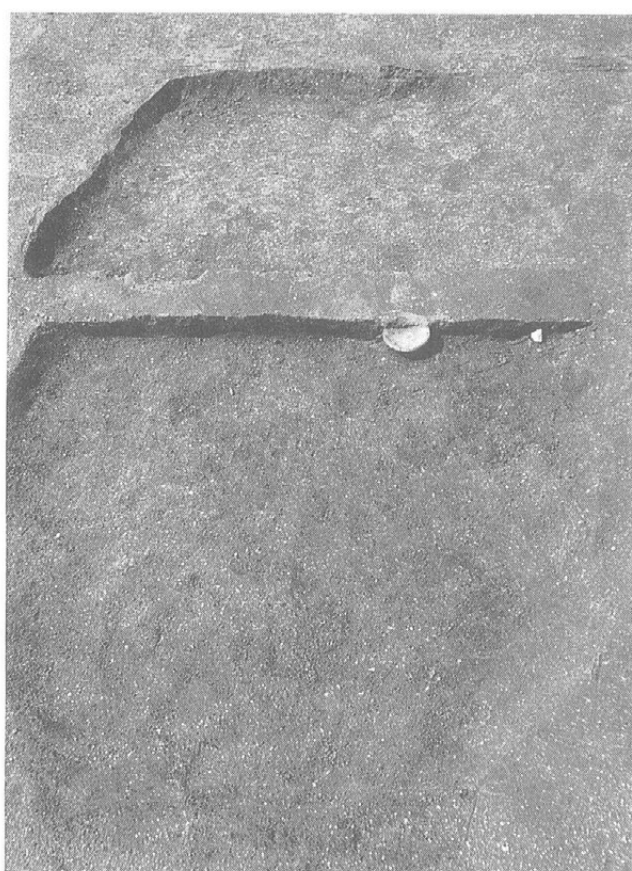
A-I区 SB13 復元状況



A-I区 土坑 (SC2)



A-I区 土坑 (SC6)



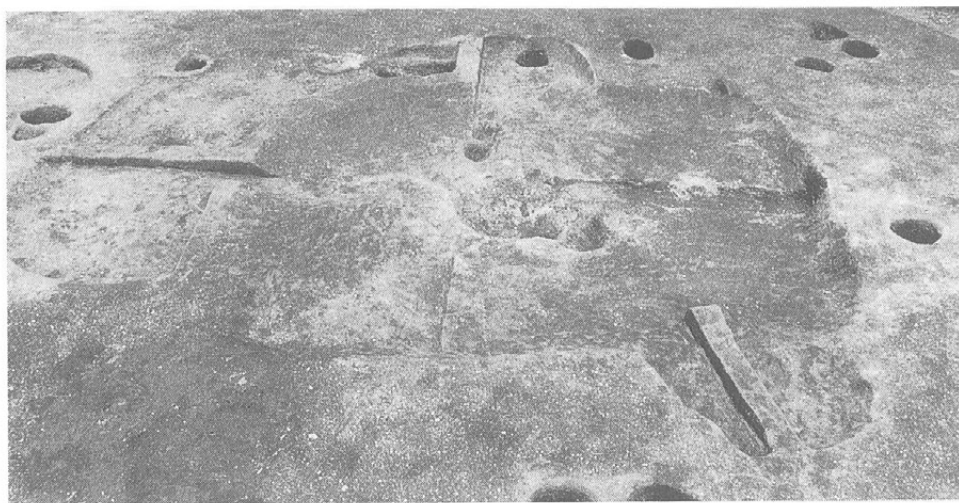
A-I区 土坑 (SC23)



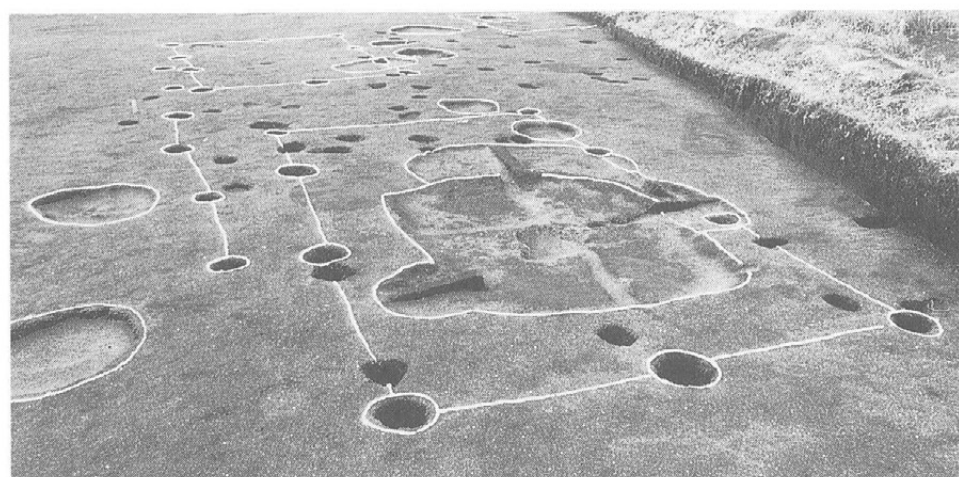
A-I区 土坑 (SC17)



C-I区 SC51と溝状遺構



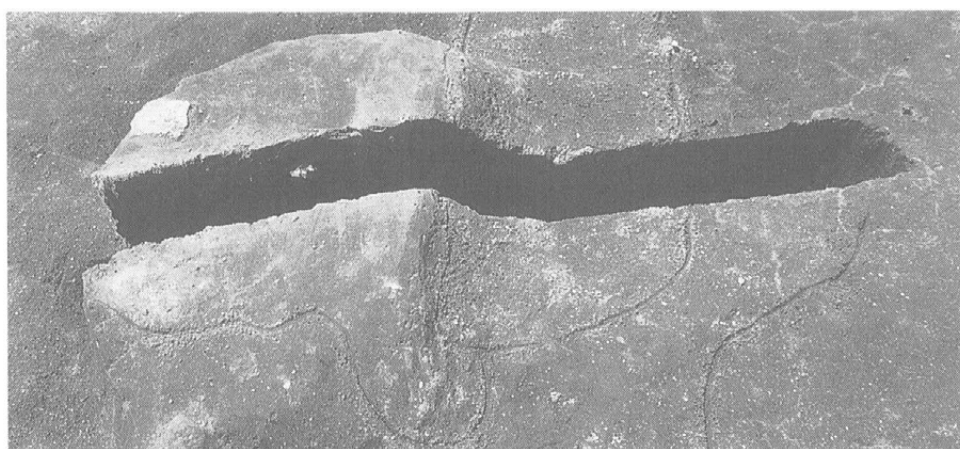
A-I区 竖穴状遺構 (SA1)



A-I区 SA1とSB24

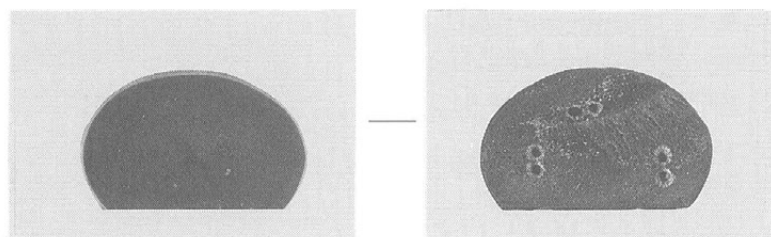


A-I区 集石遺構 (SS1)



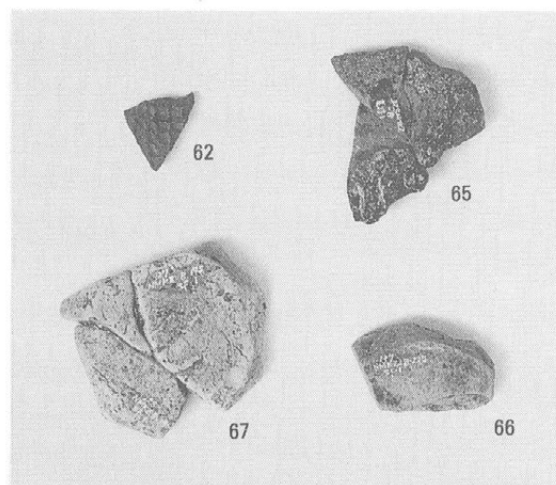
A-I区 焼土遺構SN1



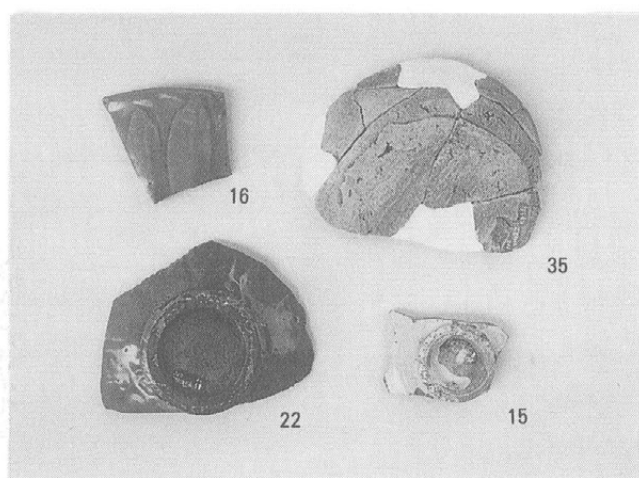


(オモテ) (ウラ)

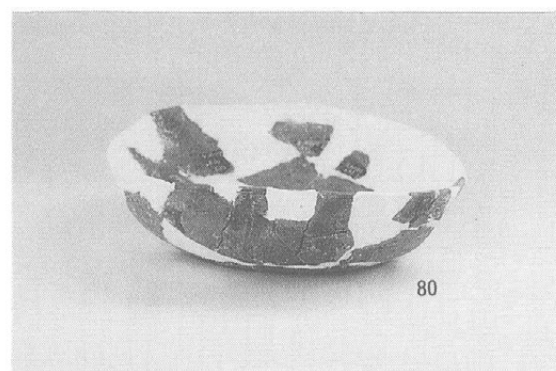
SD27出土石鑄 (141)



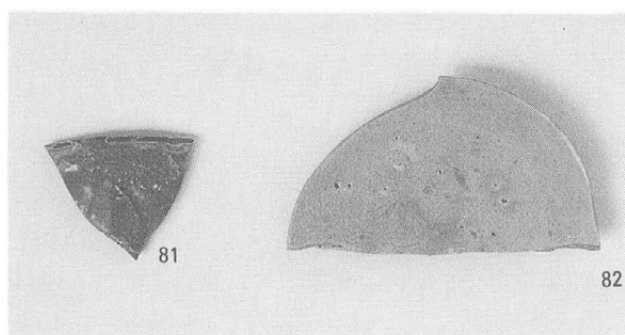
SF 1 出土須恵器と土師器



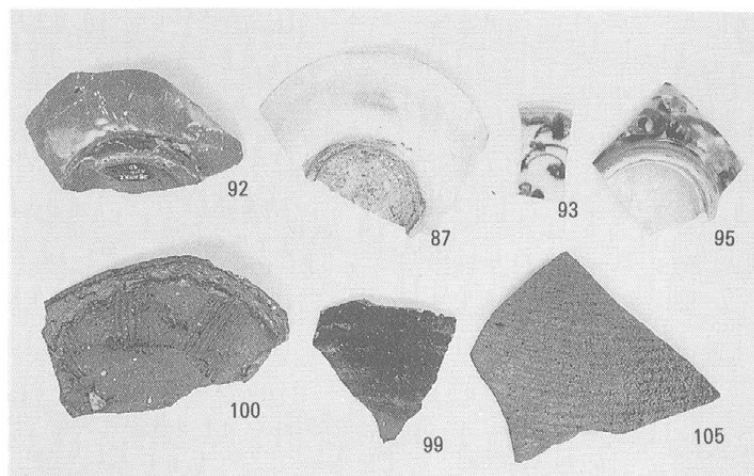
A-I区 IV a層出土遺物



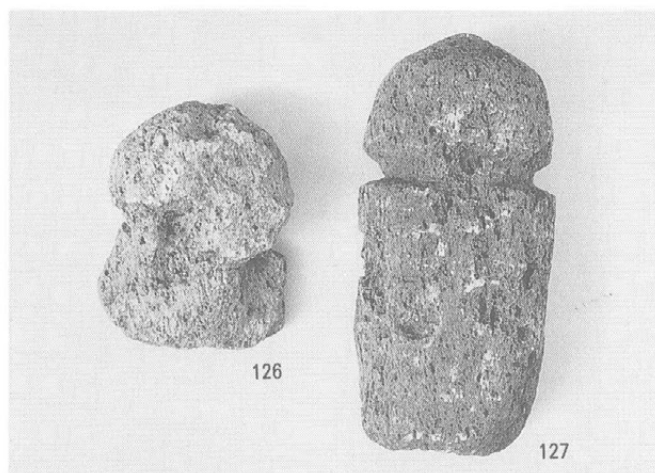
A-II区 SD 1 出土土師器



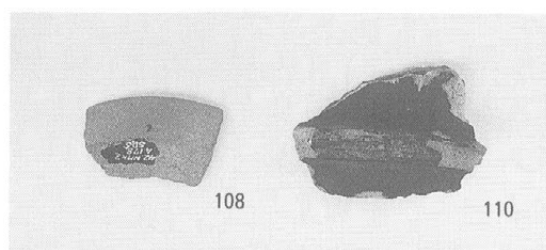
SD 2 出土青磁・白磁



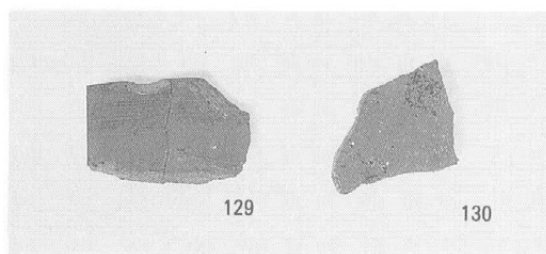
SD 3 出土陶磁器



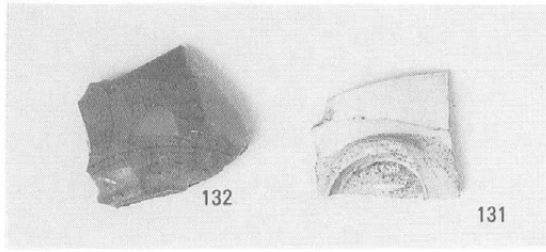
SD 3, SD17出土軽石製品



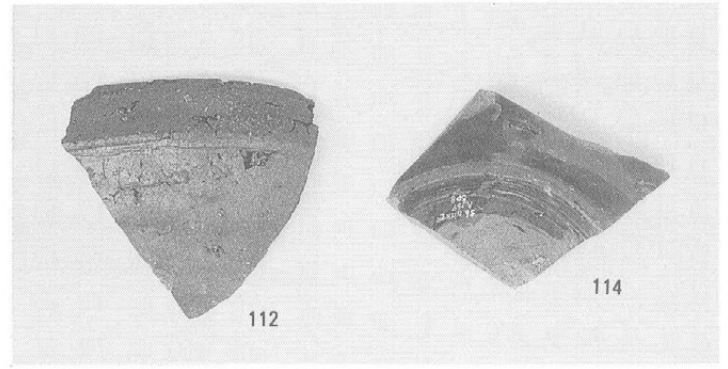
SD 5 出土遺物



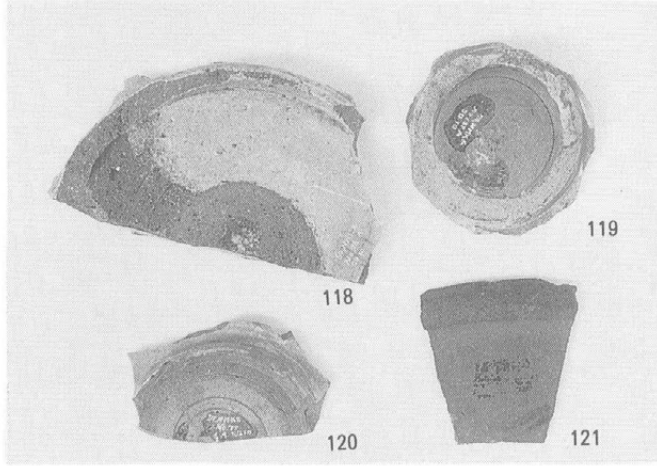
SD17出土陶器



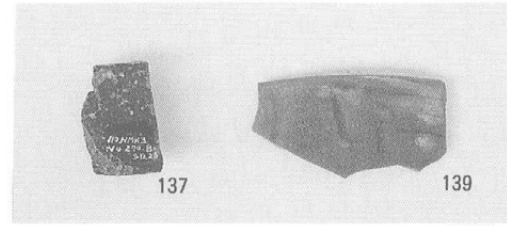
SD18出土遺物



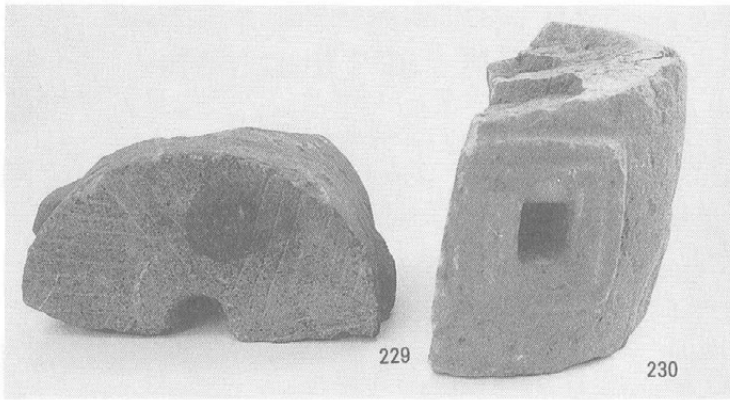
SD 9 出土遺物



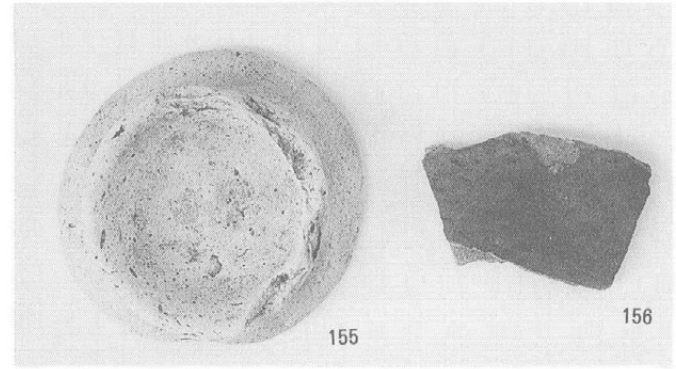
SD10出土遺物



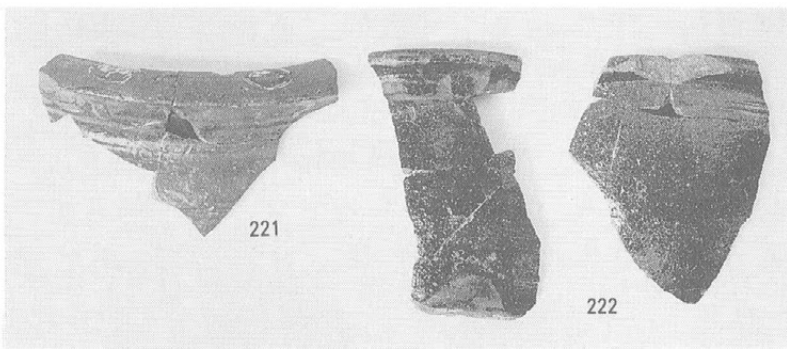
SD26出土遺物



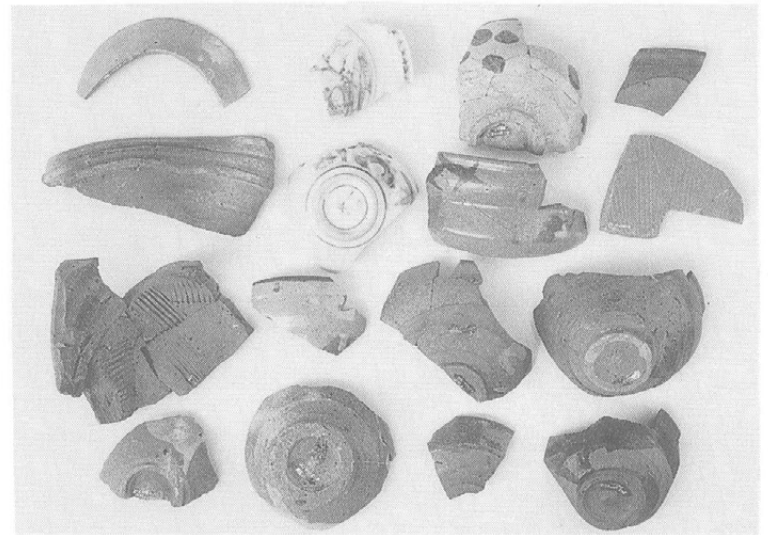
SC51出土石臼



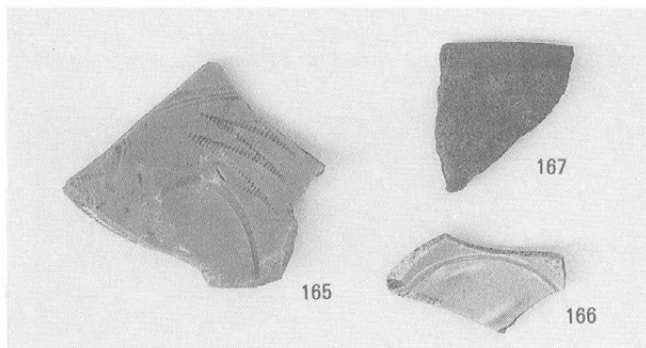
SC23出土遺物



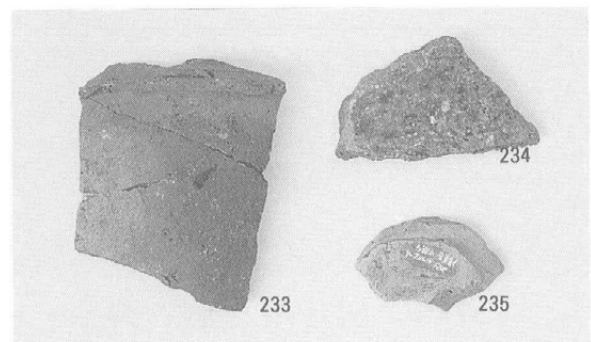
SC51出土陶器



SC51出土陶磁器



SA 1 出土遺物



SS 1・2 出土遺物

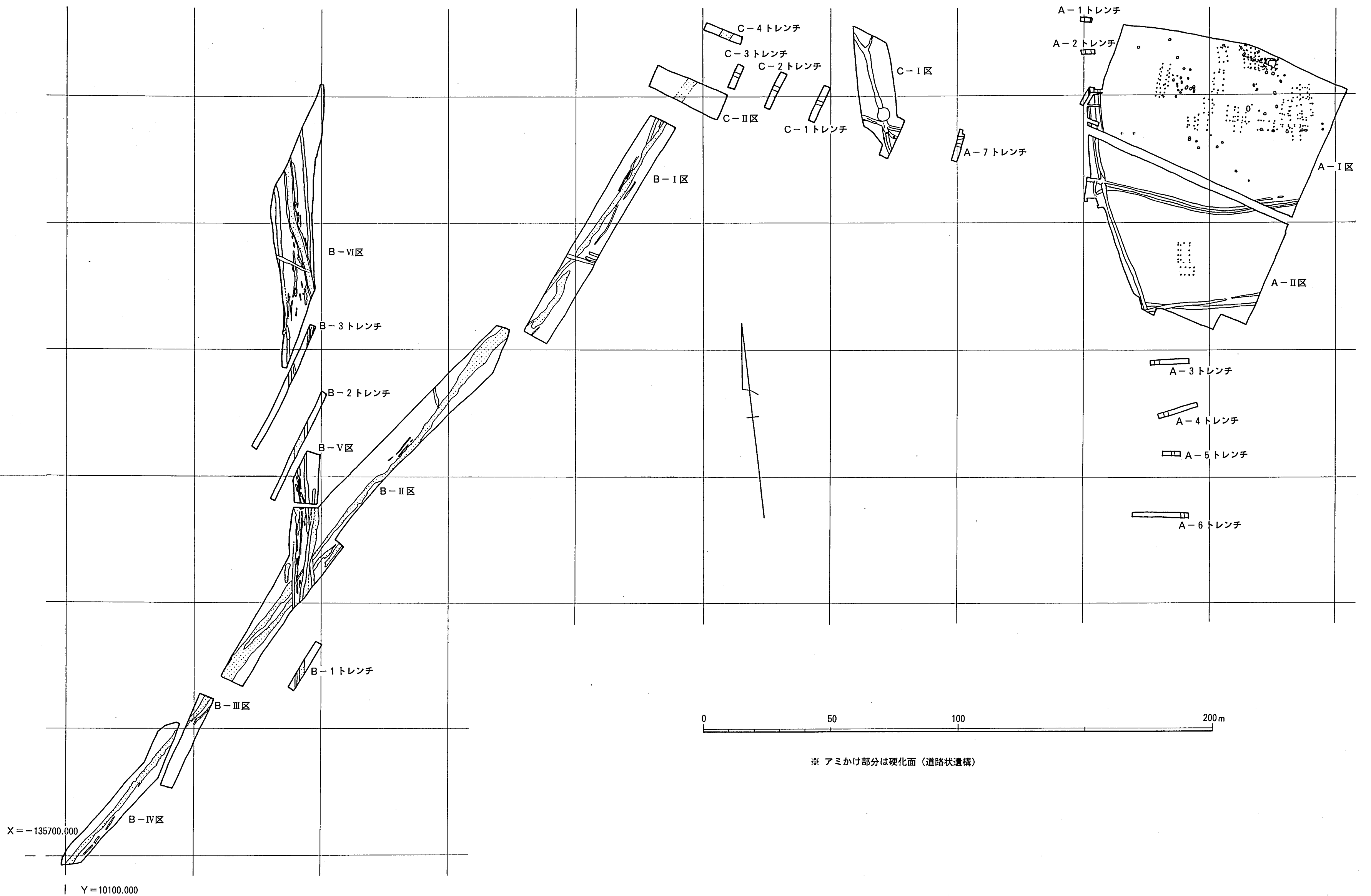
## 並木添遺跡

都城市文化財調査報告書第24集

1993年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会  
発行 〒885 宮崎県都城市姫城町6-21  
TEL (0986) 23-2111(内線554)

印刷 有限会社 文昌堂  
都城市東町18街区1号  
TEL (0986) 22-1121



付図 宮崎県都城市並木添遺跡調査区および遺構全体配置図